
精靈達のレクイエム（鎮魂歌）

真条月鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊達のレクイエム（鎮魂歌）

【NZコード】

N5367P

【作者名】

真條月鈴

【あらすじ】

訳ありで家を離れることになったモニカ。

母に言わされた行き先は隠された土地、ベルシア。

王子の側近をしている兄が旅に同行したが、向かう先で何者かに襲われる。

一人逃がされたモニカを助けてくれたのは一人の青年と少女だった。

ここから彼女の破天荒な運命は始まった。

始まる時（前書き）

この小説は管理人のサイトで連載している小説を修正・補足をしたもので

誤字脱字、わかりにくい表現、いろいろあるとは思いますが、ご了承いただけの方のみご覧になつてください。

始まる時

「お嬢様、奥様がお呼びです。」

ノックをして入つて来た侍女の言葉に窓辺に立つていたモニカは振り返つた。

風に煽られ舞う銀色の髪が、光に当たりキラキラと輝く。

侍女を見る瞳は質素の薄いエメラルド色だ。

淡く見えるのにその瞳は意志が強そうに見える。

「母様が？」

凝つた造りをした窓枠に肘をついていたモニカは、あまりよろしくない体勢をさりげなく戻し、問い合わせた。

「はい。なんでも、今すぐ部屋に来て欲しいです。」

「わかった。行くわ。」

モニカの返事を聞いた侍女は入つて来た時と同じように一礼すると部屋を出て行つた。

部屋に一人になつたモニカは一人首を傾げた。

「母様、モニカです。」

そう言つて部屋の戸をノックすると、お入りなさい、と母の声がしたので失礼します、ヒドアノブを回した。

部屋の扉はよく手入れされている証拠に音も無く、スムーズに開いた。

扉を開けると昔とあまり変わらない部屋の風景が見える。

壁にかけられた風景画に感じのよいテーブルや椅子、本棚などがあり入ってきた。部屋一帯はブラウンで整えられており清潔感漂う綺麗な部屋だ。

モニカの部屋とほとんど変わりない景色がレースのカーテンをかけられた窓から見える。

その窓の側に立つて後ろを向いていた女性がこちらを向いた。

「モニカ、急に呼び出しじめんなさいね。」

そこに立っていた母エイシャーは、本当に申しわけなさそうな表情をしている。

「大丈夫ですよ、母様。それよりどうしたんですか？」

珍しいですよねと続けた。

部屋の扉を後ろ手で閉めながらモニカは問いかける。

部屋をよく見渡すと部屋には自分と母だけだった。

「貴女に今からお願ひがあるの。今から私の故郷に行つてほしいの。」

「

「今から? それより、母様の故郷はどこなんですか?」

「そう、今からよ。夕食は手頃に食べられるような物を馬車に積んであるわ。荷物も。その馬車でベルシアに行つてちょうだい。」

もづ、荷物が積まれていると聞いて驚いたが聞いたことのない名前が出てきて、首をひねつた。

「ベルシア?」

「やつぱり聞いたことないかしら?」

そう言われ首を縦に振る。

「そう、ベルシアは一般には知られていない土地なの。隠された土地とも言つわ。」

「隠された土地?」

「ええ、そうよ。この国に昔魔物達から人々を守つた八神将と呼ばれる人達の存在は知つてゐるわね?」

「八神将って本によく出て来るわよね。確か色々な神器を持つて立

ち向かつた勇敢な人達でしょ？」

「さうよ。その神器を隠したとされる場所が隠された土地よ。ベルシアのよろな世に知らされていない土地はベルシアも足して8つ。土地のことは各国の王族の「くわづかの人しか知らないわ。」

今までそんな場所が存在するなんて予想もしなかつた。しかも、その場所が母の故郷だなんて。

「けれど、モニカが母様の故郷に行かなればならない理由は？」

そう、なぜこんなにも急に出発が決まったのか……

「隣国のフケート王子やその国の国王陛下が今夜お忍びで屋敷にいらっしゃることになったの。」

母親の発した初めの名前を聞いた瞬間、モニカはビシリ、と固まつた。

「母様、それは本当？」

信じたくないで、母に確認をとる。

嘘だと言つて欲しい。

「この期に及んで私がモニカに嘘なんてつくと思つへ。」

それは思えない。

だが、信じたくなかった。

お隣りの國王陛下はたびたびこの屋敷で聞く不思議な噂を確かめに、
その息子フケート王子はモニカに求婚を申込に。

どちらもモニカ絡みなのだ。

母は、娘の意に沿わぬ事を阻止しようと頑張ってくれているのだ。

どちらに転んでもモニカにとつては最悪なことには変わりない。

「父様は何か言つていらしましたか？」

そつ、父テラシーネの了解をとつていないとモニカは屋敷を出れない。

「ええ。許可は私がもぎ取つてきたわよ。大丈夫、心配しないで。
モニカを王子達が探ししているようだつたら言つてやるわ！娘は今別
荘で療養中ですってね。」

母のこの強気な性格がモニカは好きだ。

温かくて安心するような、そんな感じ。

けれど、父はモニカを嫌つていて。

きっとフローランス家の恥だと思つていてるに違いない。

このフローランス家は伯爵家だが、公爵家と同じく高い特別視され

ている。

モニカの兄、フィオーラはしっかりした人で勤勉だ。

だが、女は結婚と服の流行など、そんなことをしていればいいと言われるのだ。

女には勉強など必要ないと言われる。

だが、モニカは例外と言つてもいい。

彼女は勉強が好きなのだ。

知らないことを知りたいと思つている。

「この前いらした時もそう言つて帰つてもらつたわよね？」

「だつてモニカは身体が弱く病弱なことで有名でしょ？ 嘘なんだけどね。」

そう、世間には病弱なことで有名だが、実際はモニカが、社交界にあんまり出たくない」と、こついう面倒事を避けるための嘘なのだ。

フローランス家は美形ぞろいで有名なのだ。兄、フィオーラなどは引っ切りなしに女性が言い寄つてくる。

そして結婚している母や父にまで…
もちろんモニカも例外ではない。

「だつてあんなお世辞ばかりの退屈な社交界なんて嫌よ。楽しくもないし、つまらないもの。」

子供の頃から財産目当てや、容姿目当てだった男が言い寄ってきて、それがモニカは嫌いだった。

「まあ、そつなんだけどね。」

母も同意をしめす。

「けどね、好きな人と出るようになつたら楽しいものよ。」

朗らかに笑いながらそんなことを言ひ母が心底すゝこと思った。

一度だけ見たことがある。

もう、結婚もして子供もいる母に男性がわんさか言い寄つてくる人達を、母はやんわり断つて離れようとしている所に父が颯爽と現れ、あつという間に辺りの人を蹴散らすという様を……。

あれが母には楽しかつたのだろうか？
と疑問を持つたがあえて尋ねなかつた。

「いけないわね。話が反れてしまつたわ。」

モニカも忘れていた。

「それじゃあ、母様の故郷にモニカは至急、避難すればいいのね。」

早口でまくし立てるモニカに母も同意をしめす。

「フィオーラがついて行くつて言つてたからあの子に地図は、もう

渡してあるからね。」

「え?、兄様も行くの?」

「ええ。モニカだけで行かすと侍女や従者なんな付けないで行つちやうでしょ?だから母様もフィオーラの意見に賛成よ。……あれ以来、貴女はなんでもできてしまつから侍女はいらないかもしれないけれど、せめて兄のフィオーラぐらい連れて行きなさい。」

そう言って笑ひ母にモニカは言った。

「お兄様は今お忙しい時期と聞きました。とてもそのようなこと頼めません。」

兄は実力もあるので第一王子の側近をしている。

王子には会つたことないが、その王子に実力を認められ、信頼されるほどだとも聞く。

そんな、日々多忙な兄を自分のわがままに付き合わす訳にはいかなかつた。

そう。

わがままなのだ。

求婚を申し込んでくるフケート王子は仮にも隣国の王子、世継ぎなのだ。

その申し出を自分は突っぱね、家族に迷惑をかけている。

モニカがそれを受け入れれば父にとつても兄にとつても、母にとつても、とても得になる。

それをモニカは棒に振つてゐるのだ。

「でもあの子、王子様から休みをもぎ取つてきたみたいよ？」

「そんなん……！」

「諦めなさい。フィオーラは貴女のこと心配してくれているのよ。」「

絶句するモニカに母は彼女を言い聞かせるよつと云つた。

「ほら、もう出発しないと。荷物は全て馬車の中よ。このまま屋敷の入口に向かいなさい。そこにフィオーラが待つてゐるわ。」

そう言つてモニカの肩を押す。

モニカが部屋を出る前に、母はモニカをギュウッと抱きしめた。

「氣をつけるのよ？」

「……ええ、わかつてゐるわ。」

母が言つた言葉の本当の意味。

それが指す事をモニカは身をもつて知つてゐる。

母が心配するのも無理なが…。

「行つて来ます。」

そう言って母から離れた。

「ええ。行つてらつしゃい。」

母の言葉を部屋を出ながら聞いた。

「あつ！…！」

玄関に向かおうとしている途中で、モニカはある物がないことに気づいた。

多分馬車に積んだ荷物の中には入れてくれてはいないう。

あれだけは置いていく気にはなれない。

モニカは立ち止まり、一瞬そつ考えた後、歩いてきていた廊下を走つて戻つた。

「あつた！」

部屋に戻つてドレッサー所に置いてある宝石箱を開け、中に入つてあつた小振りなアメジストが先に付いただけのシンプルなネックレスを手に取つた。

このネックレスは装飾品にほんと興味のないモニカの、唯一のお気に入りだ。

普段は毎日と言つていいほど身につけている。

だが、今日はもう部屋着に着替えようと思つていたので、外して置いていたのだ。

その後、着替えようかと思つた頃に母から呼びだされたという訳だ。

ネックレスを手に取つたモニカは早々に部屋を後にし、玄関に向かつた。

息を切らして玄関先に行くと兄、フィオーラがモニカを待つっていた。

「兄様、遅くなつてしまつてごめんなさい。」

待たせてしまつたと思い、駆け寄りなが謝つた。

「モニカ、そんなに息を切らしてどうした?」

こちらを振り向いた兄の目に映つた妹は息を切らして駆け寄つてきたので驚いたのだろう。

「部屋に忘れ物を取りに戻つていたら遅くなつてしまつたものだから……」

「それならここに来てから使用人に取りに行かせればよかつたのに。」

「

「それもむずつなんだけど、じつちの方が早かったから。」

苦笑しながらそう返事をする。

「それより、早く出発しましょ。」

だが、一刻も早く出たくて兄を急かした。

「そうだな、もう荷物も積めたし急ぐか？」

そう言って大きい手を差し出してくる兄にモニカは安心したのだった。

「モニカ、疲れただろう？ 着くまで寝ていてもいいぞ。」

ぼんやりと外の風景を見ていたモニカにフィオーラが声をかけてた。

「兄様」じゃ、ちゃんと寝て下さい。 昨夜も遅くに帰ってきたのでしょ？」

昔から一緒にいるんだからそれくらいは知っているんだぞ。」

塗装のされていない砂利道。そこを通る馬車に乗っている私、は前後左右に揺られながらも窓から覗く風景を楽しんでいた。

肉眼で確認できる建物はほとんど皆無。時たま民家の屋根を確認できるくらいに遠く離れている。

これはこれでゆとりがあつて良いこと、私はそれらを見ながらそんなことをぼんやりと思つた。

「モニカ、少しばはれたんじやないか？着くまで時間はある。寝てもいいぞ。」

ぼんやりと外に向けていた視線を戻せば、兄は予想通りの顔をしていた。眉は眉間にとり、渋面を作つてゐる。

「兄様そんな顔をしてたら女性が逃げますよ。」

軽く冗談でそんなことを言えば、兄に小突かれた。

「そんなことを考へる暇があつたら、自分の心配をしろ。ただでさえお前は

「

「 それせこひの台詞です。昨夜も遅くに帰ってきたにもかかわらず、今日のここのことについて来たのはどこの誰ですか。兄様こそしつかり寝てくださいよ。」

長くなりそうな説教へと変わり行く兄の言葉を強制的に遮り、私は切り返す。伊達に今まで兄妹をしてきていない。その分のスキルはばっちしだ。

「俺は良いんだよ。問題はお前だ。いいかモニ力良く聞け、そんな言葉で俺を誤魔化すな。聞いたぞ、この前屋敷で倒れたんだつな。」

いつたい誰が告げ口したんだか。兄にはいつの間にか情報が行き渡っている。
私は内心舌打ちをしたい勢いだ。

「ちやんと寝てるわ。」

「 だれも不眠症で倒れたとはいってないがな。」

してやつたつと一矢口と笑う兄は性格が捻くれていると思つ。

「寝ようと思つても寝れないお前のこじだ、ここ最近不眠続きた

るつ。伊達に十七年間一緒に育つてきたわけじゃない。このぐらいはお見通しだ。」

確かに四才も年上の兄は頼りになり、世話を厭ないと良く兄の部屋へと行っていた。

「でもこの『ひのき』

「でも、じゃないだらつ。やつ言いて倒れたのは最近なんだからな。」

それにはつゝ、と呟まる。

弁解の余地はない。

「クッショーンも有るし、膝もある。使ってもいいから寝ろ。」

いや、膝はちょっと……。などとおもいつつもクッショーンを受け取れば、気持ちよくて顔を埋めてしまつ。

「大丈夫なのに……」

そう言つたのはせめてもの抵抗のつもり。

心配してほしい訳ではないのこ、素直にそれが伝えることができない。

それを兄に伝えることの出来ない歯齒痒さを感じながらも、私は襲つてきた睡魔に勝つ」とは出来なくて、眠りについた。

「 二力、モ二力。」

「 ん~?」

「 起きる、早く。寝ぼけてる時間なんてないぞー。」

焦つたよつた兄の声。

「兄様? びつじたの?」

ムクリと起き上ると兄がこちらを厳しい目で見ていた。

「 ちゃんと田は覚めたか! ? 外の気配を探つてみてみる。」

訳が分からぬ。だが言われた通りにすると、背後で馬を駆けてくる気配が複数ある。

「馬がこちらに向かつて複数…………けど、なんでも……まさか、私達が目的！？」

「だらうなあ。数分もしない内に追いつかれるだらう。」

「そんな……！」

「なうどうじうと書つのか、と兄を見ると真剣な顔でこちらを見ていた。

「モニカはこの馬車の馬を使い逃げろ。」

言われた言葉に神妙に頷きスカートをまくし立て前に出る扉を開き、座つて馬を操つていた兄の従者に訳を話して一頭の綱を受けとつた。

「お兄様もみんな一緒よね。」

背後を振り返り兄を見て言つた。

馬車を引いている馬は4頭。

馬車に乗つているのはモニカと兄と馬を操つている従者一人だけだ。残りの人は宿泊先に先に行つている。

なので、この馬車に乗つている二人が馬で脱出し、残りの一頭で遅いけれど馬車を引いて囮にすれば逃げられるはず。

だが、兄は首を縦には振らなかつた。
それを見て目を見開く。

言葉の意味。それは一緒に残らないとこつこと。

「兄様は残るといつたの……なぜ?...」

理由を問いつても何も返つてこない。

「……だつたら私も残るわ……」

涙れを切らした私はそつと呟んだ。

「それはダメだ。モニカは逃げる。」

「嫌よ!…私も残るわ。私だつて闘える。」

兄ほどではないけれど、強いと自負できる。

幼い頃から兄が留つ剣術の稽古をいつそり隠れて見様見真似で覚えてきていたのだ。それはかなり我流ではあるが。

兄がそれに数年前に気づいたので、両親には秘密にしてもらつていた。

「ダメだと云つてこる。お前は逃げる。」

「なんで…どうしてよ…」

泣きじやくつながら首を振つた。

「どうしてなんだ。……」めんな

ント

首筋に凄く強い衝撃があった。

「ど……うして……」

私が意識を保つていられたのはそこまでだった。

気を失った妹を腕に抱き抱えてフィオーラは言った。

「モニカをここに残しとく訳にはいかない。」

聞こえるはずもない彼女にそう呟く。

「ビジィーラ、モニカの馬を頼む。」

ビジィーラと書かれた自分の従者に馬をこちらまで引き寄せもらった。

その上にモニカを落ちないように横たえる。

「お前なら落とされるはずがないだろう。モニカを頼んだぞ。」

前半は聞こえているはずもない妹に、後半はモニカを乗せている馬に向かって言った。

馬はモニカという部分に反応し耳を傾け自分の背中を見た。

そして了解したかのように嘶いた。

フイオーラはそれを見て安心したようだ。

「いけ」

短く言つただけだが馬は颯爽と駆けて行つた。

「よかつたんですか？」

それまで黙つていたビジィーラが馬が見えなくなるのを待つて、口を挟んだ。

「なんのことを言つているんだ。」

「一緒に行かなくて、と言つ」とですよ。」

「……ならお前が行けばよかつたんだ。」

「嫌ですよ。俺はフイオーラ様の従者ですもん。」

ひょうひょうとビジィーラは自らの主人にそう言つてのける。

「にしても、驚きましたよ。噂は本当だつたんですね。」

馬が走つて行つた方向を見て彼はそう言つた。

「なんのことだ。」

「いやですね。惚けても無駄ですよ。噂はかなり広まっていますからね。モニカ様には不思議な力があり、いろんなモノに變されています、と。」

だがフイオーラは安心した。

「のべらこの噂はどうにかなる。

だが、アレがばれてしまつたらやばいのだ。

まだ誰も知らない。

家族以外は……

「モニカにそんな不思議なものはない。ただ、馬には懐かれている
ようだが。」

「そうなんですか。ですが、凄いですね。馬に好かれるなんて。」

「まあな、それより。俺はこのままアイシラをこのまま迎え撃つ。
お前はどうする?」

「愚問ですよ。モニカも」一緒にします。」

「わかった。」

そして彼等は来るべき者が来るまで待ち続けた。

「もおーーなんでこんな道通らないとけないの。」

「仕方ないだらう。嫌ならヴィオラは来なればよかつただらう。」

「薄暗い山のなか二頭の馬が少し離れて歩いている。」

その先に歩いている方の上に男が、後の方に女が乗っていた。

どちらともマントをかぶつており姿がよく見えないが、声からしてまだ20歳前後だとわかる。

「あんな所で残つているとか、ありえないですわ。それよりあたしも会つて見たかつたんだもの、モニカ嬢に。舞踏会や社交的場にはほぼ欠席で、たまに顔を出したかと思えばすぐに帰っちゃうし。おまけにフィオーラは面会を頼んだつて拒否するしで、全く会つたことがないんですもの。しかも、アイツー自分に妹がいること隠してただなんて！！」

かなり怒つて憤慨している女に先を行く男は言った。

「まあ、そうだね。アイツ、俺にも黙つていたんだし。妹がいるつてこと。数年前なんだか不思議な噂を聞くものだから聞いたのをちらりと吐きやがったくらいだ。」

男が言った言葉に、女の方ははげしく同意をしめした。

「あたし達に何も言わないなんて最低ですわ。何年の付き合いでしてると思つてゐるのかしら。」

「まあ、いいじゃないか。だから、いつして仕返しもどこ、いたずらをしに行くんだし。」

男は微笑んでいながらも黒いオーラを漂わせている。マントでほとんど身を包んでいるため、あまり良く見えないのだが、容姿が両者とも整っていることだけは見てとれた。それだけに、あまりにその表情がさまになつてゐる事がわかる。

「それもやうですわね。早く会つてみたいわあ。」

男の言葉で機嫌を直したのか、『機嫌のようだ。

しばらく森の中を馬で進んでいた一人は異常に氣づき、自分の馬をぴたりと止めた。

「ねえ、…………」

「…………ああ、わかつてゐる。」

そのまま数秒の沈黙。

辺りの音は、風が葉を揺らす音、鳥の鳴き声、枯れ葉や落ち葉が風によつてカラカラと動く音だ。

「何か近づいてきてる。」

「ええ。正確に言えば、私達に向かつて来るような感じ……。この場所に向かつて来ているんじゃない。」

「この気配は…………馬だ。」

しかも、人が操っていない馬だと。

数秒後、姿が見えた。

「ヴィオラ、ネインは出でるか？」

「ん~。どうかしら?あの子、気分屋だからどうども言えませんわ。

」

「だらうな。この半年で出てきたのはたつたの3回。1ヶ月に1回出でくればいい方だしな。」

気楽げに答える女に、男の方はしみじみといった風に呴いた。

「シャイなんですか。仕方ないでしょう!~?」

「…………なら、俺が止めるか……。」

しぶしぶという感じに呴いた男は、近づいてくる馬に集中し、駆けて来て横を通りのを待つた。

が、男はあるモノを発見した。

「おい、ヴィオラ！一人が乗っている。」

乗っていると言つても氣を失っているのか、馬の背で体を横になつてゐる。

にしてもおかしい。

馬が妙におとなしすぎる。

「ねえ、見て。馬のスピードが落ちてきていますわよ。」

彼女の言つ通り、馬は彼等の元に着くときにはもう止まつたのだ。

「女の子？」

馬の上から一人で氣絶している人を降ろそうとして身体の軽さに驚いた。そしてマントのフードがずれ、顔があらわになる。

「みたいだな。にしても、貴族だとと思つけど、ヴィオラせどりと思つ？」

木の幹にもたせ掛けながら尋ねた。

ふと、先ほど一駆けてきた馬を見ると、綱を繋がれてもいい

のに、おとなしくその場にいた。

普通はありえない。

視線を何気なく戻すと、彼女は気を失っている少女の顔をまじまじと見ている。

「この子、可愛い！！何、この白銀の綺麗な髪は！すつごい美人さんですわ。」

興奮したように騒ぐ彼女に、視線を向けると、マントをのけた姿が目に入った。

確かに綺麗な少女だった。

だが、それを考へると、なおさらこんな森にいることがわからない。

「わかつたから。……貴族だらうな……。」

「でしょうな。」

気を失っている少女の着ている服は控えめながらもしっかりと作りをしており、何より質がよかつた。

貴族じゃなければ、良家のお嬢様といったところか。

だが、苦労してそだらうな、とも思った。

良家のお嬢様なれば、貴族達のように位の高い者に求婚を申し込まれれば、そう簡単には断れないだろ？と。これだけ容姿が整っているのだ。

そこら辺の、無駄に地位の高い奴らが放つてはおかぬだろ？。

なぜだかそう思つと彼女に親しみを覚えた。

まだ田を覚ましても、話してもいなかった。

そんなことを考えた自分を自嘲氣味にわらつた。

「あら、なに? きなり… じつしました? きなり笑つたりして…」

見られていたのか、ヴィオラがこちらを、なにか気持ち悪いもので見た、といった風な表情をしていた。

「いや、別になんでもない。ただこの少女も大変そうだらうな、と思つただけだ。」

お前にもわかるだらう、その気持ち、と問えば苦笑を含んだ相槌を打つてくる。

「ふう〜ん、それよりもこの子じつやつて起しますの?」

笑つていた顔を瞬時に引き締め、少女に視線を向けて問うてきた。

そうなのだ。

男ならばビンタでも、したたか殴るなどしてどうにかしただらうが、少女なのだ。

しかも自分にこのような経験は初めてで、じつしていいのか分からぬ。男ならあるのだが…。ここは本當ならばヴィオラに任せた方がいいのだが、その彼女が尋ねてきているのだ。

だから尋ね返すこともできない。

「…………一応「いい」で起「いい」す「い」ともないだ「い」つ。近くの屋敷に連れて
行「い」ひ「か?」

「それもやうですわね、ここの近くならあそこがあありましたわ。

」

うなずき返してきたヴィオラは少し、いやかなり嬉しそうだ。

この少女の身が心配だ。

屋敷に着いたら、彼女に侍女を付けるべきだろ「うかと思案しながら
も、ヴィオラの返答に同意を示し、行動に移すこととした。

初めに私が見た物は灰色の綺麗な糸。

とても綺麗で、私の髪の色とは大違い。

私のように質素は薄いのに、しつかりした色をもつてゐるのがとても羨ましくて、手を伸ばした。

届いたなら自分もその色に染まれるような気がしたから……。

「 い… つたあ。 」

ガシリと糸を掴んだ瞬間声が聞こえた。

そして目の前にあつた糸が離れていく。
だがそれを私はぼんやりと見つめていた。
手は一つの間にか糸から離れていた。どうやら指の間をすり抜けて
しまつたようだ。

「 あれ？ 目が覚めた？」

先ほども聞いたような声がしてハツとする。

「 え？」

自分の置かれている状況を知り、戸惑つた。

なぜか自分はベッドに寝ており、枕元には知らない青年がいた。
どうやら私が糸だと思つて掴んだ物は彼の髪の毛だったようだ。
なにやらよく回らない頭を押さえながら、片手をついて座位の体制
になろうとすると青年が手を貸してくれた。

そしてなぜ、寝ていた私の目の前に青年の髪の毛があつたのかを問う。

「ああ、ゴメン。あまりにも口差しが気持ちよくて、ついつい寝て
しまったみたいだ。」

そう言って床に落としていた本を広い上げ、ポンポンとはたく。寝

てしまつた時にでも落としたのだらう。

「別に大丈夫よ？兄様はもつと酷いもの。」

「兄さん？」

「わづよ。私のこ」

「ういえば、兄様は……。」

そして思い出した。

「 行かなきや。」

兄様を助けに……。

多分きっと、兄様はあのまま残つたのだらう。

私だけ逃がして……

ベッドを降りようと体を動かし、床に足をつけて体重をかけると
ようめき、倒れそうになつた。

が、青年が支えてくれたので倒れることはなかつた。

「 なにしてるのーは4日間も寝込んでいたのに、こんな急に
体を動かしたらダメじゃないかー？」

だが、他人のはずなのにかなり怒られた。

それでもモニカは退くわけにはいかなかつた。大切な大切な家族のことだから。

「 行かなきやいけないの。兄様を助けに！！」

涙目になりながらも必死に彼の腕から逃れようともがくが、彼は一向に放してはくれない。

「…………行くつて、場所が分かつてゐの！？ましてや、今自分がいる所も把握してないだろ？。」

そう言われればモニカもハツとする。

「 まずは事情を話してくれない？出来るかぎりは俺等も協力するから。」

「…………俺等？」

今、この部屋には自分と目の前に居る青年しかいないはずだ。

「ああ、それは」

バン

突然、部屋の扉が開いた。
それも乱暴に。

「抜け駆けなんてズルイですよ。」

そして、そこからずかずかと入つて来た少女はそう言つたのだ。少女と言つても女性と言つてもしつくつとくるくらいだ。

その子の髪の色も灰色だった。

「ヴィオラ、もう少し声のトーンを下げる。彼女が驚いている。」

「あら失礼しました。私つたらはしゃいでしまつて……。私のことはヴィオラと呼んでくださいな？」

微笑みを浮かべる彼女の隣で青年もついでとばかりに口を開く。

「俺のことはハーレイと呼んでくれたらいよ。」

笑みを見せてくれる一人に、とりあえず悪い人ではないのだろうと判断し、強張つていた顔を緩めた。

先ほど彼が、ハーレイが俺達と言つたのは目の前にいる少女、ヴィオラも含めてといふことだね？

「はい。ヴィオラさんとハーレイさんですね。」

一人とも、どうやら私よりも年上そうだ。

「「ちゃん、は付けないで。」」

私が呼んだ名前に付けた“さん”が気にくわなかつたご様子。息ピッタリに言い返された。

「じゃあ、ヴィオラにハーレイ。」

そう言い直すと納得したようだ。

家族以外の人をこんな風に呼ぶのは初めてのことだ、なんだか新鮮に感じる。

「ええと、私はどうしてここに……？」

ともかく兄の元に急ぎたくて、今の自分の現状を把握しようと尋ねた。

「月華の森で馬の背に気を失つたまま乗つっていたんだ。」

月華の森とは国境付近にある森の名前。満月の夜に咲く珍しい花が唯一見つかる森なので、その花の名からきて月華と言う。

森に正確な道は一本しかなく、なんとか馬車が通れるくらいの道があると兄が言つていた。

そして、そこを通つていて襲われたのは私達。

兄に自分が逃がされたので襲われたのかどうかは不確かだが……。

ハーレイとヴィオラの話を聞く限り、兄に気を失わされた後馬に乗せられたようだ。

だがよくもまあ、意識のない人間を乗馬させたものだ。今さらながら兄に對して腹が立つてきた。

「君はどうして馬に乗つてあんな所に居たんだい？」

心の内で怒つっていた私は突然降つてきた声にはつとす。

兄と私は内密に、母の故郷ベルシアに向かつていた。だが、そこは隠された土地だ。

彼等にそれを話していいものか悩んだ末、こう言つた。

「私は、兄と従者の三人で出かけていました。そのところ、何者かに追われていることに気づき、兄が私だけを逃がそうとしたんです。私はこのまま残るか、皆で一緒に逃げよう、と提案したのに兄に却下され、意識を奪われました。……そして今にいたります。」

たつた三人で出かける、と言つても普通そんな説明では納得しないだろうとはわかつていた。

だが、ハーレ達は黙つてそれを聞いてくれたのだ。

「追われることに心当たりは？」

「ありません……たぶん。」

自信がない。

自分はあまり外の世界を知らないから。

その分、勉学に励んだ。

一般的な知識や家に関係や繋がりのある所などは知つてはいるが、それほど詳しくはない。

社交的な場や、仕事などをしていれば他人から恨まれるようなこともあるだろう。

なので、ないとは言い切れなかつた。

「せうだよね。よつぽまどじやない限り特定はできるだらうね。」

椅子に座つたまま少し困り顔で、無意識なのだらうか、膝に置いた本の表紙を人差し指で「コツ」「コツ」とリズムよく突いている。

「特定できるんですか！？」

「うん、まあね。でもあれから4日も経つていてるから、微妙なところかな。」

「うそ！？4日も経つてゐのー。」

「うそ今まで、満足に睡眠を取れていなかつたせいなのだらう。だが、睡眠不足だけでこんなにも寝込むはずはないだらう、普通は。けれど私は例外中の例外。」

「ベッドを降りようとした君に言つたはずなんだけど……」

自分の声を失つたこはよくあつたことだ。
何日も寝込んだ。

だが、それとこれは別。

あの時は3ヶ月以上の不眠症に悩まされていた。
きちんと寝もせず、一瞬意識を失うといふことばかりだった。

そしてそんな妹を見ていた兄は強行手段にでたのだ。
すなわちそれは、急所を突いて意識を奪うというものだつた。
それから私は死んだように何週間も目を覚まさなかつたらし。

それと比べればまだましな方なのだろうけれど……。

「聞いていなかつたみたい。ごめんなさい。でも、兄は……、兄の無事を知りたいんです。」

膝に置いた手をきゅっと握りしめ唇を噛み締めた。

「うん、わかつてゐる。だから探しに行こう? 現場に行つて手がかりになりそなのを見つけよう。」

冷たくなつていた手をハーレイは優しく包み込んだ。

優しく微笑みかけてくる。

その手をペシリと払い、割り込んでくる手があつた。その手はハーレイの手を払いのけることに成功すると、私の手を両手でひし、と握りしめてきた。

「もちろん私もですわよ。何かあつたら私に頼つて下さいな。このしけたシリしている男よりは役に立ちますわよ。」

今まで黙っていたヴィオラが突然口を挟んできた。

「ありがとうございます、二人とも。とても心強いわ。」

自分を心強く元氣付けてくれる一人に私は自然と笑みが零れた。

眞実（前書き）

モニカの過去がチラリと？

薄暗いのにじめじめしていくく、地に落ちた乾燥した葉がこすれあ
いカサカサと音をたてる。

「たしか、この辺りだつたはずなんだけビ。」

あれから支度をしてからすぐに出かけた。月華の森へと。
馬車は身動きがとりにくいで馬を使い出かけた。

だが私が4日前に通つたらしき道を見つけたが自信がない。

するとビヴィオラが馬からひょいと、飛び降りた。

「うへん。あまり馬の後などは残つていないですわね。」

地面を手で少し触り呟いた。

口調も姿もどこかのお姫様を思わせ彼女。
だがそれに似合わず乗馬などが上手かつた。

「…」この先少し行けば湿地があるはずだ。運が良ければそこに手が
かりがあるはず。幸い、雨は降つていなから。」

少し思案する風に言つたのはハーレイだ。

本当に彼等は何者なのだろう。

自分は一人に助けられた身なので余計な詮索はしないようにしているが、やはり気になるものは気になるのだけだった。

何かをしていないといろいろ余計なことを考えてしまった。私は頭を一振りするとハーレイの言葉に一人で頷いて、先へと進んだ。

この乾いた森にある湿地だ。他の所のと比べてもそれほどぬかるんではないのだろう。だが、地に後が残るはず。

もしかしたらないのかもしれない。手がかりが。

淡い期待だが、あつて欲しい。

そう、私は祈るような思いで先へと馬を進めた。

「 着いた。ここからが湿地だよ。所々ぬかるみがあるから足を取られないように気をつけて。」

先に馬を進めていたハーレイがこちらを振り返り、言つ。まるで小さい子供に、あそこへは行つてはダメよと、言い聞かせてくる母親のようだ。

私にしてみれば、もう一人兄ができたような心境だ。

私を助けるために逃がした兄さん。

待つて。必ず探し出して助けてみせるから。

兄さんが強いのは知っている。だが心配だ。
だって家族なのだから。

馬から降りて二人と別行動をしていた。一人暗闇へと進む。その時、
何かが光った。

迷わずくさむらへと手を伸ばす。

それは意図も簡単に見つかった。

「これは、兄様の眼鏡……。」

どうしてと、呟く。

ヒビが入り、傷つき、泥が付いていた。フレームは治し用がないく
らいに曲がっている。

それは馬の足跡が辺りにたくさん付いている場所に落ちていた。

それを再確認した私の顔からはサーと血の気が引いていく感覚。

「 兄様、嘘でしょう…。」

時が止まつたかのように感じた。

まるで世界にただ一人突つ立つてゐるかのような孤独感。

グラリと身体が傾く。

だが、確かに自分の身体…のはずなのに、やつではなによつにほんやりと感じる。

ああ、私はなんて浅ましいの

兄すらも失った

私の近くにあるものが、私のせいで消えてゆく、失ってゆく

目尻から涙が零れた。

途端、私の視界は田まぐるしく変化を遂げた。

頬に当たるのは固くも温かい何か。

「大丈夫、フイオーラは無事だから。大丈夫、心配ないよ。」

頭上から降つてくる優しい声。

「……ハーレイ？」

「うん。」

その優しい声でほんやりと感じていたのが嘘のよつに、頭がはつきりしてきた。

自分が今いるのは彼の腕の中。

つまり抱きしめられ、支えられている状況。

おやじく、身体が傾いだ時に抱きしめられたのだろう。

「 じうじて…」

私は目の前の青年を仰ぎ見た。

「 ？心配だったからこいつちに後から向かつただけだけビ…。」

「違つわー。ビうじて兄の名前を知つていいのー？」

私は一切兄の名前を口に出していない。

なのに彼の唇が紡いだ名前。

それは偶然などで紡がれることなど絶対にないはずの名前。

いくら助けてくれた人達でも私は名乗らなかつた。

家はまあまあ名の知れたものだ。そうやすやすと名乗つたがため、家族や屋敷の者に危険が及ぶ場合があつてはこまる。

それに、兄は王子の側近だ。元は騎士団長だった。それだけに、名は知れ渡つているばずだ。

ハーレイとヴィオラに心配され、笑顔を向けられた時には良心を苛まれたが、名は尋ねられなければ名乗らないと決めていた。

だが、結局尋ねられてはいない。
だから知らないはずだった。

なのに……。

そこまで考えてはつとした。

「…………なた、貴方、まさか……兄様を襲つたの！？」

疑心暗鬼にとらわれていた。

「落ち着いて、落ち着いて、モニカ！－」

彼が両肩に手を置き落ち着かせようと揺ゆく。

「なんで襲つたのよ！兄様を返して！－なんで、……………ビリして……また……私から大切な人を奪うのよ！－」

髪を振り乱して、絞り出すような声。

最後の方は嗚咽混じりだった。

「モニカ、聞いて。俺はフィオーラの知り合いなんだ。だから眼鏡を見ただけでもわかる。」

地べたに座り込んでしまった私と視線を同じくして言つ。

「…………嘘よ。そんなの嘘。」

それでも弱々しく首を振り続ける。

「……もし俺が敵だつたら、モニカを助けたりしない。」

だから信じて、と言ひ。

先ほどから身体が熱くなつてくる。この感覚には覚えがあった。

だめだ。

このまま力を使つては。

頭ではわかつてゐるはずなのにどうしようもない。

その異変にハーレイも気付いた。

「モニカ？」

風もないのに銀の髪が舞い上がる。

力が暴走しする前触れだ。

このままでは一人を巻き添えにしてしまう。

敵なのに……

そう思いながらも身体は素直だった。口を突いて出た言葉それは

「元、げて、…お願い、逃げて。」

彼等を心配する言葉だった。

上手く動かない身体で必死に彼を押しのけようとする。

が、ハーレイは一向に動く様子がない。

「 だめ……っ！」

身体からあふれる力は、全ての者には強すぎる力。

いつもは制御できているのに……私の声や感情の増長によって左右される。

このままじやあの時みたいに……。

唐突に田の前が真っ暗になった。
唇には温かい物が当たっている。

な、に

おどりこて壁田する。

すると、それは唐突に離れた。

「ほら、大丈夫。」

ね、つと笑いかけてくる。

私の思考回路は一時停止した後、状況を理解した。

「 な、な……なにすんのよ……」

顔に朱が走るのがわかる。

「なにって、……収まつただろ？？大丈夫。」

「そう言われてみれば……」

「……収まつたわ。」

「そこにはつと/orする。」

「でも、……！」

「でもはナシ。」

尚も食い下がる私の唇に人差し指を彼は当てた。

「……っ！」

「それにしても俺のことを疑うなんて酷いなあ。少し、いや、かなり傷ついたよ。」

「…………貴方、本当に違うの？」

優しく微笑みながらも、私に疑われて傷ついたと言つ彼。かなりの優男に見えるのに、していることは日茶苦茶だ。

「ああ。違う。俺はフィオーラの知り合いだ。っていうか親友？」

なぜに疑問形？などとも思つたがあえて口にはしなかった。

「信じていいのね、貴方を。」

再度確認するかのように尋ねる。

「もううん。」

聞くまでもなく、返ってきた返事は自信満々だった。

なんだろう。

なにか頭に引っ掛かる。

そうだった。

「ねえ、なんで兄様の名前だけじゃなく私の名前まで知ってるの?」

私の名前はあまり知られていない。というか、伏せられている。

兄も、自分の知り合いにすら教えていないはずだ。

「ん? ああ、それは

」

「 何年もの付き合いなのに、フィオーラが私達に貴女のこと
をいつまでも黙っているから、調べましたのよ。」

ハーレの言葉を遮るよひに次を言つたのはどうからともなく現れた
ヴィオラだった。

彼女は少し立腹の様子だ。

「やあ、ヴィオラ。ちゃんとそつちは探したのか？」

ハーレイは、ヴィオラが立腹なのを知つてか知らずかなんでもない風に言ひ。

「私のことをお聞きになる前に貴方はどうなんですの。その前に離れてくださいませ。」

近づいてきなうそんなことを言い、そばまで来るとハーレイの腕の中でいた私を取り返すように奪い返す。

「大丈夫です？ 何もされていません？」

彼女より少し背の低い私に目線を合わせて問い合わせてくれる。

「ええと……はい。」

なくは無い、が。言える訳が無かつた。

それに、自称チキンハートの私にはそんな度胸もない。

そして、どうしていきなりここに来たのかと思ったが、彼女は難無くそれを口にした。

「心配しましたわ。いきなり雲行きは怪しくなるし、強風が吹いて来るし、ろくでなしあ居ませんでしたもの。」

「あつ。」

思わず声を上げてしまった。

辺りを見渡し空を仰ぎ見る。

薄暗い色をした雲は少しずつ遠退していくものの、風は一向に止まらない。

私のせいだ。

私が我を失つて、力を暴走させてしまったから……。

すると指先に何か温かい物が当たり、搦め捕られて握り込まれた。

それは、ヴィオラに分からぬ程度に近づいたハーレイの手だった。

強すぎず弱すぎず。心地好い温かさ。

彼が一体私の何処まで知っているのかは分からぬ、が心配し、気遣つてくれていることは分かつた。

いくら暴走を止めるためだと分かつていたとしても、キスをされたのは頂けないが……。

霸氣のなかつた顔に少し朱が走る。

ファーストキスだったのになあ。

それは辛い。

だが、それ以上に嫌悪感を感じない自分に疑問を持つ。

なぜなのだろう？

「…………もうそろそろ屋敷に帰ろうか。だんだんと肌寒くなつてきたことだし。」

さりげなく自分の着ていた上着を私の肩に羽織らせながら言った。まだ夏だとはいえ、夕方になると気温が急激に下がる。もう秋と言つてもいいくらいだ。

私は手の中の壊れた眼鏡を大切に抱え、ハーレイの意見に賛同したヴィオラは優しく私の肩を抱いた。当然それはハーレの上着を落とすためで、ペチリと彼に投げ返していた。

屋敷再び（前書き）

単純なサブタイトルですみません

屋敷に戻ると侍女などに寄つてたかられ、バスルームに連れ込まれた。

屋敷とは私が彼等に助けられ、連れてこられた場所だ。

「自分でできますから。」

脱衣所で私から離れようとしない侍女たちがまじりでまじりのような視線を向け、口にした言葉。

だが彼女等は不満げだった。

私のドレスに手を掛け、手伝おつとしていた手をやんわり退けることで、態度を示す。

いつまでも渋る私にとつとつ諦めたのか、服に手を掛けていた侍女の方が手を離した。

「お体を洗うのをお手伝いさせて下さい。」

5人居る内の一一番若い侍女が口を開いた。

となると、彼女が一番偉いのだろうか。

「すみませんが、一人になりたいものなので一人で入させてくれませんか？」

正直言つて疲れていた。

それに兄のこともあり、一人で考へたかった。

目を向けるそこにはハンカチに包まれた眼鏡が棚に置いてある。

その物悲しいさまに侍女は渋々了承せざるをえなかつた。

この屋敷の主であるらしいハーレイから何か聞いているのである。

若い侍女は目線だけで他の者も下がらせ、私に何がどこにあるのかを教えると自分も、失礼しましたと言つて出て行つた。

扉が完全に閉められたのを見届けると、ドレスを勢いよく脱ぎ捨てた。

あらわになつた身体。

白い胸元。

そこには複雑な紋様があつた。

それほど大きくなないが、紅く色づいており、白い肌には目立つ。

普段は薄いピンク色なのに今は

「 真つ赤。」

胸元を見下ろし、指先でなぞりながらポツリと言葉を落とす。

なぜこんな物があるのかといつ理由はとつの中に対する答えを知っている。

あの、時から消えない癌。^{アザ} これからも決して消えることはないのだ
わ。わ。

バスタブにポチャンと浸かる音が浴室に響く。

詰めていた息をはー、と吐き出す。

何やつてるんだろう、私。

繰り返し考へることは兄のこと、それからハーレイのこと。

一人になつたとたん考へが波のように押しかけてくる。

どうしてあの時私だけ逃がしたの？

どうして見知らぬ私を助けてくれたの？

どうしてキスしたの？

考え出したら止まらなくなる。

力の暴走を止めるためならあんなことをしなくともなにかあつたはずだ。
多分……。

あの時のことを思へ出して、思わずザブンと頭まで浸かる。

息を吸うために水面から顔を出し、吐き出した息は溜息なのか、息継ぎなのか私にはわからなかつた。

「あ～もつー歎むのや～めた。今わらひにじにじしたつてしようがな～わ。母様だつてきつとわらひわよ。」「わらひにじにじしたつてしようがな～わ。母様だつてきつとわらひわよ。」

うさうさ、と頷きながら自分を納得させる。じつでもしないこと立ち直れない。

ならばれつもく自分でできる」としないこと、と勢によくバスタブから出で、身支度をテキパキと整える。

やうと決まれば、私の向かう所はただ一つだ。

部屋を出た所のすぐ近くに先ほどの侍女が立つていた。

私が出て来たのに気がつくとすぐさま近付いてくる。

「まあ、お風邪をひかれてしまってますよ。あなたとおふれになつてください。」

そう言つと、さうかり出したのか、タオルで私の髪の毛の水分を拭き取る。

銀色の毛先から落ちる髪は、もうすっかり冷たかった。

しづらへると満足したのか手を離した。

その彼女に私は尋ねた。

「あの、ハーレイの居る部屋まで案内してもいいですか？」

すっかり時間は経つてしまつたがまだ聞きたい」とは沢山ある。

「ハーレイ様の、ですか？」

なぜかハーレイの名前で詰まつた彼女を不思議に思つたが、話したことがあるの、と言えば彼女は渋りながらも了承してくれた。

長い廊下を彼女に付いて行きながら思付いたことを口にする

「Iの屋敷は場所的に何処ら辺りになるんですか？」

先を行つていた彼女は何故か肩をビクリと揺らした。

そんなんあらかさまに私を警戒されると正直傷つくな。

別にそんなに、振つて悪い話題だったの？

「あの、えと、それは……」

何やら歯切れの悪い返事だ。

どうしてか、こちらが虚めているような感じになる。わざまでは侍女の鏡のように毅然としていたの。

「悪かったわ。ハーレイに聞くから氣にしないで。」

私がそつと彼女が申し訳なさうに目を伏せた。

「すみません……。」

「大丈夫、ただ不思議に思つただけだから。」

早く先を急ぎましょ、と目線を向ければ彼女わかりました、と足を進めた。

もうそこには先ほど動搖した彼女の面影は、毅然とした姿からは見出だせなかつた。

「ほんとうに、どうして、」

一つの大きなドアの前で立ち止まつた彼女はクルリと振り向き、私に道を空けた。

ドアは大きいと言われても丁寧に装飾を施されており、その古い紋様からは歴史を感じさせる。

促された私はドアの前まで静かに歩みドアノブに手を掛けた。

ドアは想像していたものと違ひ音も無く開いたが、ノブを回す音だけは開けたばかりの室内に響く。

まず私の視界に入ってきたものは闇。

室内にあつた恋らしき物は、うつすらと闇夜に浮かび上がる月を映し出していた。

この屋敷に戻つてきたのは夕方頃。

それから1、2時間も経つていなにに、もう外は暗闇が支配していた。

少しすると月明かりに映し出される室内が見えるよつになつた。

窓、机、ベッド、椅子にソファーに棚。

一般的な物は全てそろつてはいるが、どことなく寂しい部屋。私はそう感じた。

一步、廊下から室内へと足を踏み入れれば、ここまで案内してくれた彼女が一礼してドアを閉めて出て行つた。

シーンと静まり返る部屋。

本当にこんな所にハーレイが居るのか、と疑つたがとりあえず探してみる。

まずはヘッドの側まで行つて中を確認する。

はたと氣づいた。

これではまるで、私が寝込みを襲っているようだ。

そして声をかけて探せばよかつたのだと。

す、と空気を取り込み、名前を呼ぼうとした瞬間。

「なにしてるの」

背後の耳元で息を吹き掛けられながら声がした。

「つ、あやあ」

もう、と口を押さえられた。

パニクつた私は何が何だかわからなく、必死にもがく。

口を押さえている、ゴツゴツした手に爪を立てて抵抗し、なんとか声を出そうとする。

「ちよつ、ちよつとまつて！痛い。俺だよ。ハーレイ。」

「？」

そして恐る恐る背後を振り返る。

そこには焦った様子のハーレイがいた。

見知った顔を確認し、手と肩の力を抜くと口を押さえていた手は退けられた。

「つー・ビックリしないでよ。馬鹿。」

だが驚かされ、恐怖を覚えた私は思わず怒鳴った。

そうして彼の広い肩を力の抜けた手で叩く。

「「」めん、「」めん。寝ていたらいきなり部屋に入ってきたものだから何してんのかと思つて。」

「だ、だつて、貴方を探してたんだもの……。」

「だからって、男の部屋にこんな風にすがすか入つて来られればこつちはたまつたもんじゃなによ。もう少し用心してくれないと。」

呆れた風に言つ彼はほんほんと私の頭を優しく叩く。言つてこる」とは厳しいのに、してこることは優しい。

「……」「めんなさい。」

そんなことを言われば謝るしかなかつた。

「うふ。ちゃんと解つたならいいよ。それにモークガ以外とお転婆なことも分かつたしね。」

お転婆ばと言われ真っ赤になつてしまつ。今まで猫被つていたのに…。

それより、始めの方でハーレイは氣になることを言つた。

「寝ていたのよね？」

「うん。」

「ベッドで寝ながったわよね？」

「ソファーで寝ていたからね。」

「どうで。」

ベッドから驚かされたなら、私はそれほどまでベックリしなかった
だろう。

「もうだつたの。だつたらこつ起きたの？」

「モニカがベッドに近づいた時ぐらこじやんと起きたかな？けど
最初っから気づいてた。」

意味が解らない。

どうこいつことなのだらう。

「起きてはいたんだけど、ちやんと意識が覚醒していなかつたって
ことだよ。」

黙つて首を捻つているとハーレイは説明してくれた。

「で、何か用事があつたんでしょう？」

彼こそう言われ、ハツとする。

いけない、忘れていた。

「私がここに来たのは、貴方に尋ねたいことがあつたからなの。」

自然と表情が固くなる。

部屋は月明かりが調度いいくらいに照らし出しているので、明かりはいらないだろう。

「なぜ正体の解らぬ私を助けたの。あんな所で馬に乗せられ、意識のない私を拾えれば面倒なことになることくらい分かつたはずよ。それに、いつから私のことに気がついていたの。」

いくら月明かりで明るいとは言え相手の表情までは見えない。

自分の、この強張つた表情が見えないことは幸だが、彼がどんな表情をしているのか知りたいとも思ったが、それと同時に知るのが怖いと思つた。

顔は知らず知らずのうちに顔は下に向いている。

一瞬の沈黙の後、ハーレイが口を開く。

「助けたのは君を乗せて走つていた馬が俺達の前で大人しく止まつたのと、君が貴族だと思ったから。そして君がフィオーラの妹、モニカだと気がついたのは、あいつの眼鏡を見た時。森で助けた時から訳ありだとは思つていたから面倒事なんて百も承知だつたから別に今さらなんとも思わない。」

唇がわなわな震える。

そんなのあるわけがない。

あるはずがない。

嘘だ。

「…………うそよ……嘘。……面倒事になるのも百も承知で、今さら何とも思わないなんて嘘よ。貴方、見たでしょ！？私がしたことをつーやれでも言えるつて言つのー！」

怒りに任せ、言葉を紡ぐ。

感情の波に押し流されそうだ。

自分を抑える、と心の中で声がする。だが、抑え切れない感情は留めなく涙と共に溢れ出す。

「貴方も……私のこと、気味が悪いんでしょ……みんなそう。みんな離れて……いっちゃんのよ。」

突然ぐいっと腕を引かれた。

「気味なんて悪くない。」

たつた一言。

なのにどんな言葉よりも鮮明に耳に入った。

その大きな腕に抱かれ、優しく頭を触られると、なぜだか彼の言葉を信じれた。

それに促され、涙声で心の中にあつた蟠りを吐き出す。

「それに怖いの。自分の意志に…関係なく…暴走した、当の本人…は…止めることのできない…人外の力…。」

「君はその力で人を傷つけたことはあるの？」

静かな、本当に静かな一つの咳きが落とされた。

私は思わず唇を噛み締める。

その口をこじ開け、無理矢理声をしぼりだす。

「あるわ。」

暗闇に落とされた言葉は固い響きをもつていた。

「その相手は君を責めた？君のせいだと言つたの？」

「……口ではなんとでも言えるわよ…」

「そうかもね……。だけど、君に力があつてもなくとも、人は人を傷つける術すべを持っている。それは剣術を習つている俺にも同等のことを。」

彼の言葉に思わず顔を上げ、彼を見た。

その反応をハーレイは満足そうに見て、優しく目を細めた。

「人を傷つけることは誰だってできるし、その方法は星の数だけある。モニカの場合は方法が少し違うだけ。暴力と言う名で他人を傷

つけることもあれば、言葉で心を傷つけることもある。そしてそれの使い道を変えれば、暴力は人を助ける力にも返られる。そして言葉は相手を癒す。そしてモニカの力はも誰かを守れる。」

守れる。

私が？

今まで暴走ばかりしていた力が誰かを守るなんて。

そんなこと考えたことすらなかつた。

いつも力が暴走しないように神経を張り巡らしていただけだ。

力を解放することを恐れて、人との関わりも断つてきた。

それを彼は自ら解き放てと言つ。

「……無理よ…。私にはできないわ。」

泣きつかれて頭痛のする頭をゆるゆる振りながら弱々しく言つた。

「どうしてやる前から諦めるの。していない内からそんなことを言つていてる、出来ることも出来なくなるよ。」

「だつて…始めから結果は決まつているもの……。」

「ならその結果は誰が決めた。」

真つ直ぐな瞳に射られた私は目を離すことができない。

「つ、それは…。」

「出来ないと決めつけるのは試してからでも遅くはない。だから、もつ自分を否定しないで。」

彼の言葉が心に浸みた。

自分を認めひ、好きになれ、と。行つている。

「自分を否定……。」

「ち、否定しないで。そんなことしていたら、何もかもダメになる。君はもつと自信を持つべきだ。」

できぬよねと、彼の瞳が語りかけてくる。

少しだけ、信じてみたいと思つた。

彼の言葉を。

「……そう、ね。もう少し頑張つて信じてみようかしら」

自分を、そしてあなたを。

言葉にはしなかつたが、私は強く思つた。

すると、自然と顔は下を向いていたものから、毅然としたものへと
変わり、表情は笑顔になつた。

悪くないかもしれない。

貴方を信じてみるのも……。

あれから2日。

続けて雨が降つてゐるのと、森へは行けていない。

家へと手紙を出して知らせようとも思つたが、まだフケート王子などが居るかもしないことからそれはためらわれた。

もしかしたら屋敷に戻つてゐるかも、という淡い希望も持つたりしたが、あの兄が頼まれたことをほつたらかして、いそいそと帰るとは思ひにくい。

それにハーレイの言葉もあり、フイオーラは無事だと信じてゐる。

なので、あの時ほじは焦つてはいない。

「モニカ様？ どうかなさいましたか？」

ぽんやりと部屋のソファーから窓の外を見ていた私はほつとする。

さつきまでは雨がザアザアと降つていた空は今は曇天。

まるで今にも泣き出すのを堪えているかのようだ。

ふい、と田線を窓から逸らし、声の発せられた方へと田を向ける。

「ううん、何でもない。」

声をかけてきたのは一日前、私をハーレイの居る場所まで案内してくれた侍女、エスペだ。

「ですが2時間もそのままにしてはお体にも悪いですよ。」

「やうね、……」には室内訓練所なんかはあるかしら?.

しばらく考えた後に言葉にする。

この「うる」何もしていないから身体が鈍っている。 そろそろ身体を動かしたい。

「訓練所ですか?ありますけど、何をなさるんです?」

「少し身体を動かそうかと思つの。」

彼女に尋ねられた言葉に、花咲かんばかりの笑顔を向けて上機嫌に用意を始める私。エスペは戸惑った顔をして私の行動を見守つていた。

「た、たんま、たんま！」

焦つた男の声。

私は相手が完全に降参しているのを曰にとると、手に持つていた木刀を手元に戻す。

とたんに遠回しに見ていた人々が拍手をよこす。

「こ」は室内訓練所。

その名の通り、「こ」は身体を鍛える所。

自分の目の前には数人の男が倒れている。
中には恐持ての者も。

「はあ、大の大人が情けない……。」

（せめて女には勝てないと……。）

「けど、いい運動にはなったわ。」

うんうん、と満足げに頷き、自分の相手をして倒れている者や腰の抜かしている者にありがとう、と手を振る。

と、そこへまた一人歩み寄つて来る者があつた。

「おひとつ、私とも手合させ願いたい。」

よろしいか、と問い合わせてくる男は団体も大きいが、しっかりと筋肉が付いており、がつしりとした体格の恐持てだった。

惜しげもなく曝し出した二の腕の筋肉、タンクトップの上からでも分かるほどの腹筋の割れ目。

すこしその格好は見ていて寒かった。

髪は剃つているものの、ほお擦りをすればジョリジョリしせつだ。髪はすぐんだ金茶色。

対する私の装いは侍女から無理矢理借りたシャツに長ズボン。長い髪は頭の高い位置で一つにくくり、ポニーテールにしている。シャツの下に隠しているが、胸元にはあのアメジストのネックレス。

侍女達に借りる時、よそ様のご令嬢にそのような格好をさせれません。と泣いて止められたが、普段からこんな格好しているから、と振り切ってきた。

辺りから見れば、ぱつと見私は見習い騎士ぐらいに見えるか見えないかぐらいないだろう。髪の毛なんかも梳かず引つ詰めて縛つてある、と言った方が正しい。

まさか誰も、普段はドレスを着ている令嬢だとは思いもしないはずだ。

対する田の前に立っている例の男を見ると、40代後半くらいに見える。

だからといって中年より、壮年と言つ言葉が似合いそうな風貌だ。

「『じめんなさい。私では貴方の相手にならないわ。』

その男が纏まとう雰囲氣、身なりを見て人目で解つた。

この人は強い、と。

私が言つた言葉に納得がいかないといつ顔をしている男に、私は言葉を付け足した。

「相手の力量がある程度分かつてしまつから…。だから今は私、無駄な手合わせはしないわ。」

「ほお、私の力量が解るのか。」

「貴方くらいの騎士なら大抵の者は負けると思つわよ。」

感心した風に言つ男に私は思つたことを言つ。

「『りやーたまげた。小さいのにやるなあ。』

確かに彼と比べたら私の頭なんて彼の肩よりも少し下辺りになるが、標準としては私の身長は普通だ。単に彼が高いだけ。

「で、相手はしてくれないのか？」

「当たり前じやない。貴方を相手にしたら、私一分と持たないもの。」

「そつやつて相手の力量を解くことができるのはいいことだが、挑戦もしてみないで決め付けるのはあまり良くないぞ。」

若いならもつと威勢良く突つ掛かつてこないとな、と笑いながら答える。

「分かつているわよ。だけど、今日は身体を慣らして運動したかつただけなの。」

私が言つた言葉に、私によつて打ちのめされた男達がビクリとした。

「そりが、明日もくるのか?」

「外が雨だつたらね。」

「お前さんは騎士ではないだろ?。私の知る女の騎士や、見習いは含わせて6人しかいない。その中でお前さんの顔は見たことがない。」

「

それにその髪色もだと。

「だつて私、軍なんかに入つてもいないし、騎士ですらないもの。貴方も感づいているでしようけど、立派じゃないけど令嬢よ。」

「冗談めかして答えると、やはり、と眩きが落とされる。」

「では、客人のモニカ嬢なのだな。」

「そりが、なんで知つているの?..」

「ああ、それは」

言葉の途中で訓練所の入口の扉が勢い良く開いた。

「 私、何やっているんだ！」

そこから入つて来たのは肩で息をしているハーレイだつた。

「これは、ハ 」

「 アルギ、部下の者を連れて少し下がつていろ。」

何かを言おうとした男はアルギ、と言ひりじい。

それを遮るようにハーレイは言い視線を投げかける。その態度は正に上から命令しなれている者の態度で、正直驚いた。

私に接する時とあまりにも違ひすぎたから。

彼の言葉にアルギは軽く頷くと、話をちりかり聞いていた部下に向かつて田線だけを寄越して、そくさくと出て行つた。

やはりと云うか、何と云うか、想像してはいたがアルギは偉い人だつたようだ。

どうりで、並外れて他者よりも強いと感じた訳だ。

「 なんでこんな所に居て、木刀を持っているんだよ。」

額に手を当てて咳く彼を見て、私は正直に答えた。

「身体を動かしたかったのよ。近頃鈍つてたし。」

そう言いながらリボンで、一つ括りにしていた髪の毛を下ろす。

「…君に剣を教えたのは誰?」

しばらく黙っていたハーレイの口から出た言葉はそれだった。

「兄様よ。けど、正確には違つのかしら?」

「あのフィオーラがモークに剣術を…ありえない、あいつに限つてありえない……。だけど、正確には違つとせざつこう」とへ

「?私のはほほ我流なのよ。それをより正確にするために兄様が教えてくれるようになつたの。」

兄に対してありえない、と連呼している彼に首を傾げた。

「あいつ、部下に相手にはなつてやるもの、教えはしないんだ。そういう腕が立つのに……。なのに、よりこもよつて妹に教えるか、普通!」

「それは仕方ないと思つわ。」

いつもの冷静な彼とは少し違う様子に私は困惑つの、事実を口にする。

「だつて、幼い頃から私が兄様の特訓を盗み見して、見よう見真似

で始めちゃったんだもの。」

「…………は？」

私の言つた言葉に対し、呼応するように発せられた彼の声はなんともマヌケなものだつた。

実際、ハーレイは騒然としていた。

私があまりにも普通の令嬢と掛け離れているものだから。

ハーレイの知つてゐる令嬢など、お茶を優雅に飲んで会話ではお家自慢をし、何処の化粧品がいいだの、このドレスお幾らしたと思います？と高飛車にオホホホと笑つてゐるものばかりだつた。ましてや家柄が良くなるのに比例するかのように、そんな傲慢さは大きくなつていく。

それに比べて、彼女は家柄良し、容姿良しのかなりの上位だ。なのに血の剣を露つてゐると言つ。

「だから兄様は護身術になるくらいに教えてくれよ」としてくれようとしたんだけど、それが予想以上だつたみたい。」

「それはどうこう……。」

「護身術以上に勝るものだつたみたいでね、……。」

もう、唖然としていた。

こんなにも外見が可憐な少女が強いなんて想像もできないハーレイだつたから。

「やあね、そんなりアクションしないでよ。私はお固いのが苦手なだけ。剣術だつてばれたら止められると思つて、隠れてしていたら我流になつちやつたのよ。」

あまりにもハーレイの反応が可笑しかつたものだから、思わず素に戻つてしまつた。

だが、彼はそんなことに気づいていないだろ？

「…けど剣術は見ているだけで獲得できるものではないだろ？..」

それをびつかり、と聞こ掛けたくる。

「そつなんだけど、実際兄様の付けていたノートとか、こつそり読んでいたの。こつこつ時は剣をこつして受け流す、とかね。けど、それでは女の私には無理なことも沢山あつたわ。だから自分でなんとかしてた。」

もつ、ハーレイは感心しばなつしだつた。

そこには何かに思ひ当たつたように聞こ掛けたくる。

「まさかとは思うけど、あんまり社交界に出ないのは単に堅苦しいのが嫌なだけ…？」

ドキリと心臓が跳ねた。

「え、え。そんなとこみゆよ。」

こんな返事では、ハーレイに不信感を持たれたのは確かだ。

だが、私にはこれ以上何かを語り自信など無い、黙り込んでしまつた。

自分に宛がわれた部屋に戻ると何故かヴィオラが待つてましたとばかりに顔輝かせた。

どうして部屋に居るのかは解らないが…。

「モニカ～。いらっしゃい、いらっしゃい！」

彼女が居るのは私が使わせてもらつてこるベッドの上。

しかも、もう寝間着姿だ。

足をぶらぶらさせて手招きしてくる姿はとても20歳には見えない。

「ヴィオラ、どうしたの？」

当然それは、部屋に居ること、寝間着姿のこと、ベッドに居ることを指している。

「モニカを待つていたんですね。」

笑顔全開で笑いかけてくる彼女はとても嬉しそうだ。

「そういえば、この屋敷に再び戻つて来てから早一月。ハーレイとは顔を合わすことはあっても、彼女とは全く顔を合わすことにはなかつた。」

「ヨリヨリ何處に居たの？屋敷内では全く見かけなかつたけど……。」

「ヴィオラの居るベッドに近づきながら疑問を口にする。

とたんに彼女の機嫌が田に見えて悪くなつた。

「最悪でしたわ。頭いかれてんじやないのかしら。」

「ど、どひしたの。」

「あれからここに戻つて、私監禁されていましたの。」

「なつーかんき　　」

「　　声を下げて下さにな。せつかく抜け出して来たのに見つかつてしましますわ。」

監禁という言葉に驚き、大声を出してしまったが、跳んできた彼女の手により塞がれた。

静かにできますか、と問い合わせられ、私は頭を縦にぶんぶん振る。

「 だ、誰に監禁されていたの。」

監禁だなんて、そんな酷い仕打ちをする人がこの屋敷にいたなんて……。

「誰にだなんて決まっていますわ。あの小憎たらじこ男ですわよ。」

頭にクエスチョンマークが浮かび上がる。

小憎らしい男？

「ハーレイですわ。」

「えつ？」

そしてヴィオラの口から出た名前にびっくりする。

あの自分を助けてくれた彼がそんなことをするなんて驚きだった。

そこで一つの考えに行き渡つた。

だがそのことを彼女に尋ねる前に、二人の間に声が割つて入つてき
た。

「 何でモニカの部屋にヴィオラが居るの。」

それは何とも不機嫌そうに顔をしかめて、ドアにもたれ掛かってい
る、今話題に上つてる人物だった。

「まあ、行儀の悪い。乙女の寝所に無断で立ち入るなんて、なんて

不粹なのかしい。」

あまりにも状況が飲み込めないと、ヴィオラが勇ましくも立ち向かった。

「それは君が言える事なのかな、ヴィオラ。」

私に対する時とは違い、あらかさまに毒を吐く彼。彼は今、私の目には別に映つた。

そこで、フリーズしていた脳が復活。

「 ごめんなさい、お邪魔して。失礼します。」

それだけ言つと、ヴィオラの居たベッドから離れて部屋の外へと向かう。

ドアに駆け寄つて出ようとする時に、ポカンとしたハーレイの目と目線が合つてしまつたが、慌てて目線を外して外への扉へと手を回した。

あれから走つて走つて走つて、庭園に出た。

晴れたら綺麗だろと思われる景色は今もむすりん綺麗だが、どこか寂しく感じられた。

そして雨のあまり当たらなそうな木陰を選び、幹の根元に座り込んだ。

湿気を多く含んだ風が雨粒を私の元まで運んでくるが、もちろん私はそんなことお構いなしに居続ける。

屋敷内に居れば濡れることはないのだが、今の私は外に出たかった。

「 どうして逃げ出してしまったのかしら……」

自分で咳きながら、そんなの決まつている。

ヴィオラがハーレイの彼女だと思ったから。

彼に監禁されるようなことを彼女がした覚えは私には無い。なら、男が女を監禁する理由は、私にはどう捻つても一つしか思い浮かばなかつた。

それは、他人に彼女を見せたくないといつ独占欲からくるものではないのだろうか。

何でだらり。

何故か気になつてしまつ。

胸が痛む。

今まで家族以外の他者を、こんな風に気になどしたことはなかつたのに……。

それは完全に私が一方的にハーレイの事を気にしているところだ。

ただの尊敬の念からくるものかもしれない。

だけど、人を想うことがこんなにも苦しく、切ない事だと思いまし
なかつた。

この気持ちが恋心かどうかは分からぬ。だけど他人と関わること
に恐れを抱いていた私に希望をくれた。

それは優しくも温かい心だつた。

ポタリ、と葉に付いていた兩粒が私の頬に落ち、伝つた。

その透明な雫はまるで私の流した涙のように地に吸い込まれて行つ
た。

どうしてあの人のことが気になるんだろう

自分のわけの分からない気持ち。

私には恋なんていう甘い感情は持ち合わせていない。
だから恋ではない、と思つ。

だったら何だ、と問われれば生まれて直ぐにヒナドリが見たものに

懐くような、そんなものなのかもしれない。側にいると安心できるような、そんな感じ。

けれど少なくとも、彼は貴族だ。

私は世間から身を隠さなければならぬ。

どんなことがあっても……
関わりを持つてはいけない。

それが私にできる、父様への精一杯。

あの後落ち着いてから部屋に戻った私は、アスペに散々説教をくらつた。

木陰とはいえ、風に困つて雨に当たつていた。そのため銀の髪からあまり色の違わない透明なが滴り落ちていた。

どうやら彼女は髪に水滴が付いていることになり敏感なよつだ。

「うーん、と髪を拭くわけでも無く、押さえ付けるようにせんぽん、と拭き取つてゆく様は馴れたものだった。

兄弟でもいるのだろうか、と思つたが、他人の私情に口を挟むのは良くないと思いやめた。

私が他人にされたくないことだったから……。

「はい、これで大分マシになりましたよー。」

そう言つて髪に手早く櫛を通してゆく。

「別に良かつたのに……。どうせ後から浴室にいくつもりだったから」

面倒なことが嫌いな私がぶつぶつと言つて居ると過敏な反応を見せた。

「良くありません。体を温めるにしても、そのままにしていたら風邪を引くんですよ。熱が出て、苦しい思いをしてもいいんですか？」

「それは嫌。」

だつたらほつたらかしにしないで下さい、と返してくる様は口調こそそうではないが姉のようだった。

実際私よりも三歳年上なのでそう思うのも無理なかつたが、他人と関わることが苦手な私が自然と素直に言葉を返すには十分だつた。

そう言えど、とHスペが言つた。

「私が部屋に入つて来た時、ハ...ーレイ様とヴィオラ様が何故が居たんですね。どうしてでしょ?」

ビクンと身体が不自然に反応してしまつた。

だが、それに気付いた風もなく彼女は、あまりにも五月蠅いので出て行つてもらいましたけどね。と退屈なく笑う。

そんな彼女に私はホッとした。

気負うことなく話せる事が素直に嬉しかつた。

「あの二人仲がいいわよね。」

「ええ、それはもう、微笑ましい限りですわ。」

アスペの言葉で確信が持てた。

やたぱり彼等はそういう仲なのだろう。

「ですけど、ヴィオラ様もお可哀相に。全く以つて不敏ですわ。あの方の独占欲の強いことといつたら……まあ、本人は気付いていないみたいですけど。」

後半は聞こえなかつたが、部屋のあちこちを動き回り部屋着やらタオルやらを準備しながら彼女はそんなことをぼやいていた。

そしてそれらを渡しながら頑張つて下さいね、と言われた。

その言葉に私は動搖してしまつ。

「な、なんで……」

「わあ、なんででしょ。ハハシです。」

セツセツと愛嬌で笑う。

どうせやうに私の気持ちに気付いたわけではなくセツセツだ。

そしてその時私は気づいていなかつた。
その言葉の本当の意味を……

「わい、早めに身体を温めてきておこませ。」

そう言って彼女にバスセツトを渡された私は、薄暗くなつてきた廊下から窓の外を眺めながら歩いた。

外はもう、黄葉していた葉が静かに、そしてゆっくりと地に落ちてゆく。

そんな季節の始まりだった。

屋敷再び（後書き）

一応この章で一句切つきます。
サイトではもう少し進んでますので修正補足を頑張ります（笑）

思に出の鄉愁（前書き）

サイトでは第2章とここから分けられていくんですが、まあ、あまり関係ないんですけどね。

思い出の郷愁

朝から外が騒がしい。

だいたい私は夜型だ。早起きは得意でもない。

いつもならお昼前に寝台から起き出すのだが、今田は五月蠅くて田
が覚めてしまった。

田はまだ出ていないので今は5時過ぎくらいだらうか。

「…………な、に……？」

我ながら人様の屋敷で図々しく廻過ぎまで寝るのもどうかと思つが
……。

こつちまで駆けてくる足音がする。

私に宛がわれた客間まで走つてくる人など心当たりがない。

というより、みんな不自然なほど足音がしないのだ。まあ、単に私
が気づかなかつただけかもしれないのだが。

なんだらう、と思いつつ急いで、椅子に掛けていたカーディガンを
引っ掛けるように羽織る。

寝間着は寒くなつてきている季節とはいえ、室内管理はしつかりと
されており、薄着でもいけるくらいなので薄い生地で、身体のライ

ンがわかつてしまつものだ。

森で襲つてきたやつではないだろうが、一応武器になつそつな鉄製のパイプとおぼしい物を手に取つた。
(なぜそんな物があるのかは謎だが)

膝丈より下まであるネグリジエの裾を大胆に捲り上げ、手早くドレッサーにあつたピンで手早く留めた。

胸元にある紫色の光が私を優しくはげましてくれていのうで、私はホッと息をついた。

そして素早くドアの隣に移動し、壁に張り付いくと、バタンと扉が開いたのはほぼ同時だった。

「乙女の寝所に無断で入つてくんじやないわよー。」

私はその物に向かつて飛び込むように地を蹴り、頭にパイプを減り込ませようとした勢いよく振り下ろした。

が、それは思わぬ形で受け止められることとなつた。

自分の置かれている状況に目をぱちくつわせる。

背に回つた手、パイプを捕まれた感覚、頬に当たる温かさ。

そして

「やあ、モニカ。元氣してたか？」

懐かしい声。

「 は？」

状況が飲み込めない。

まるで久しぶりの友に会ったかのような口ぶりで、話しかけてきたのは兄だった。

兄を探しに行く、と言つて4日目。

なんと兄は自分からのことやつて來た。

「ほりモニカ、素に戻つてゐるぞ。口調、口調。」

そんな妹を余所に、兄はポンポンと言葉を投げ掛ける。

よつやくフリーズしていた脳が正常に動き出した。

敵と思つてパイプを振り下ろした相手は兄、フィオーラ。

そして

「 なんで兄様が居るの！しかも乙女の寝所に無断で入つてくるなんていい度胸ね。つていうか、どうやら紛れて肩抱かないで。

」

なまじりを吊り上げて口早にまくし立てるが、乙の兄には全く効果がない。

「 なんでつてモニカを迎えてにきただけだし、乙女の寝所つて……妹が飛び込んできて、抱きしめない兄はいないだろ？ お兄ちゃん

うれしいぞ。モニカが自分から俺にハグをしてくれるなんて。」

ああ、思い出した。

兄はこういう人だ。

いつも最低では2日に1回は顔を出していた兄だったから、4日も離れていて忘れていた。

「兄様、わかつたから……。」

いつも脱力する。

心配していた自分が馬鹿みたいに思えた。

自分に抱き着いている兄をペリッと引きはがし、向き直る。

「どうして私がここに居るのが分かったの。」

そう、私がハーレイ達に助けられたのは偶然のはずだ。
必然なんかじゃない。

なのにどうして。

「ああ、それは」

私から離された兄は、名残惜しげに自分の手と私とを見比べていたが、尋ねられたとたん雰囲気が変わった。

いつも思うが、人が変わったかのような豹変振りだ。

「月華の森の周辺であるのはこの屋敷ぐらいだからな。君に限っては賢い馬のことだ、ここに来ると思つてね。」

だが、返ってきたのはなんとも単純かつお氣楽な返事だった。

「…………そこにたどり着かなかつたらどりあるつもりだつたのよ……。」

妹に平氣でそんなことをする兄の正氣を疑う。

この屋敷の所有者らしきハーレイははじつしたのだろう。

とこうより、兄が非常識すぎるのだ。

こんな朝っぱらから良い迷惑だろう。

その後、この客間からアスペによつて追い出されたらしい一人。またヴィオラは監禁されているのだろうか？

とこうより、一人とも一緒に寝ているんじや……。とこう考えに行き着いた瞬間さあー、つと血の気が引いていく。

「兄様なんてことしてくれたのよ！ハーレイと兄様は知り合いなんでしょう。なのに、たとえ兄様の想い人がヴィオラだったとしても、なにも邪魔することないじゃない。」

勝手な予測をして兄に詰め寄る。

私はあの優しさに甘えそつになるのを我慢し、極力関わりを断つている。

なのに、その決意が台無しではないか。

「へ、どうこうことだ？確かに俺はあいつと知り合い？だが、別に遠慮するようなことは何もないぞ。」

全くもって意味が分からぬ、といった風な兄は、戸惑った顔でこちらを見てくる。

「何馬鹿なこと言つているのよ。十分あるわ。あの二人は付き合つてゐるに。」

つい意気込んで、推測を口にすると、ブツと噴き出す音がした。

音の方を見ると、兄が肩を震わして笑つている。

「…付き合つてる？有り得ない、有り得ない。だつてあの二人

」

「…………朝っぱらから俺の睡眠妨害するとはいひ度胸だな、フイオーラ。」

何かを言いかけたフイオーラを無作為に遮る声が突如として現れた。

開け放たれたままだつたドアに手を付けて、不機嫌そうに現れたのは話に上がつていたものその者だつた。

「おっ！ハーレイじゃないか。やつぱり來ていたんだな。この節はどうも、感謝はするが――」

フイオーラはそのままハーレイに向かつて歩いて行き、耳元で何か

を呴く。

もちろん、彼等から離れている私には聞こえるわけない。

兄の言葉に何か反応した彼はチラリと私の方を見ると、何かを言い返している。

なんだうう。

ものすぐく氣になる。

少しして兄が戻って来て、もう行くぞ、と言つて私の手を引いた。

「えつ！何突然、どうしたの。」

ものすぐく突然だ。

何が何だか分からない。

探していた兄が、突然やつて来たかと思えば、次は私の手を引いて早々と出ていこうとする。

兄はハーレイの知り合いなのに、碌な挨拶もしないで去らうとしている。

世間知らずの私でも分かる。

これではかなり失礼だ。

フィオーラはこんなふざけた性格をしているが、礼儀は弁えている。
その彼がなぜここまでぶつ放しているのか。

それほど心を開いている、ということもあるのかもしねり。

だが、これでは失礼窮まりない。

「ちょっとー待って兄様。」

私は兄を急いで引き止めようとするが、兄は聞く耳を持たない。ハーレイの方を振り、仰ぐが彼は気まずげに顔を反らすだけで、口を挟もうとはしない。

さつきまで不機嫌丸出しだった彼だが、今はなぜだか申し訳なさそうな顔をしている。
どういふことだらう。

何があつたかなど、とても聞ける雰囲気ではなかつた。

兄に引っ張られて、ハーレイの隣をすり抜ける瞬間。
私は兄に分からぬよう、こつそり魔法を使った。

ただの、指先だけの軽い魔法。

もう彼には森で見られているので、これくらい支障がない。

これは彼を守る魔法。

実際使える者はほとんどいない。もし使えたとしても、弱いものしか使えないのが普通だ。弱くてもそれを使うには全力をかけなくてはならない。

誰かを守るには生半可にはできないこと。

しかし例外もいる。

私のような。

しかも異例中の異例だ。

軽く、指周りにスペルを書き、指全体に纏まとわり過ぎてから彼に向かって投げる。

効果は一回分だが、ないよりはましだ。
多分彼は、高位の位のある貴族だ。

嫉まれ、命を狙われることもあるだろう。

そんな大変な彼の力になりたかった。

自分は逃げてしまつた道だから。

淡い光りが彼を包み込む。

ハーレイがそれに驚き、こちらを見上げた。

私は兄に掴まれていない方の手で、笑つて唇の前に人差し指を立てた。

口パクで言う。

『あ・り・が・と・う』

声に出したら、兄に見つかってしまう。
今の兄はとてもなく不機嫌だから。

そして兄の背中を追い掛けた。

「ドアを出る前。

やつと兄が振り返った。

「妹が世話をなつた。だけど、もう私には関わらないでくれ。」

そして、じゃあつと手を挙げると、すたすたと行ってしまった。

私も兄の意見に賛成だ。

私に関わると彼に迷惑をかけてしまう。

私には関わらない方が身のためだ。

兄にひとつはハーレイや私の事を思つての言葉。

誰かを巻き込みたくないのは私も同じ。

だからせめて貴方を遠くから見守るところへりこは。

「助けてくれてありがとう」

貴方は絶対巻き込ませないから。

言葉を出せなかつたが、私は強くそつ心に誓つた。

お礼だけ口に出すと、私も兄に倣つて出でいく。

できればヴィオラやアスペなどに別れを告げたかった。
だが、私は未練がましくて。

それができない。

ただ私は運命に従うだけ。

抗うことなど私にはできない。

分からぬ。

やり方が。

怖い。

運命を受け入れることが。

だから一歩を踏み出せないでいる。

逃げてばかり。

運命からも

ハーレイからも

「口口」口と整備されていない森。

そこを小振りな馬車が行く。

もつすぐ毎時になるのだろうか。森の中と黙つても眩しい日の光り
が白昼だと主張していた。

「……」

「……」

向かい席に座る兄。
そして私。

車内は沈黙に包まれていた。

あくまで車内は、だ。

外からは従者、ビジイーラの陽気な鼻歌が聞こえて来る。
だが、音程は合っていないのだ。これでは、とてもじゃないがなん
のメロディーかすら分からない。

「……兄様。」

耐え切れず口を開いたのは私。

「……なんだ。」

二人とも言葉少なだ。

「…………あれ、……なんとかして。」

「無理だな。」

私の懇願に間一髪を入れずに返していく答えは、とても簡潔だった。

「…………」

「…………」

会話終了。

いつもの兄なら会話が滞るといつ」とはなかつたのだが。

今回はそつもいかなかつた。

何が気に食わないのかと聞ければ苦労はしない。

聞けないからこそ、こういう状況になつてているのだ。

もう、誰かこの状況をどうにかしてほしー。

だが、私達の他にいるのはたつた一人。

兄の従者、ビジィーラだけ。

しかもその彼、自分は全く関係ありませんとばかりに、陽気に鼻歌を歌つてているのだからどうしようもない。

それがさうに追い討ちをかけて、沈黙が重い。

本当にビリしようかしら、と考えるが、良い案が浮かぶわけもなく。

おとなしく黙つていふことにした。

しばらくして森を抜けた。

ここは隣国との境すれすれにある。

フケート王子、並びにケイシー王の治める国。

ガイシー国。

鉱山から鉄がよく採れ、それを輸出し、やりわい生業としている者が大半を占めるといわれている。

もちろん国家もそれらで財政を補つている。

その国の中でも、もつとも人里離れた土地との境にあるので、あちらから訪れる人はいない。

そしてこちらも。

月華の森が日晦くひましになつており分からない。

それも、何本もある森の道を正しく通らないと辿り着けないのだ。

そして、正しく通り抜けるとベルシアへと着くのだ。

「 うわあーすゞい、すゞい。」

森を抜けた所から、外の風景を見ていた私は、感嘆して声をあげた。

なぜなら、先程まで森だった風景が野原へと変わったかと思つと、赤黄白で様々な色の花ばなが咲き乱れていたからだ。

いくら自分が可愛くない性格をしていようが、花を慈しむ心はある。

とこゝか、かなりの花好きだ。

あまりの妹の興奮ぶりに、フィオーラも思わず苦笑を漏らす。

「…………綺麗か？」

「ええ。 とってもー！」

そちらに心奪われていて、兄が自分から喋つたとこゝか、すこひらづかなかつた。

花ばなは秋だというのに鮮やかに咲き誇つている。
そのことにとってもおどろく。

それに見たことのない花ばかりなのだ。

後で、良く見て見よう、と降りた時のことを考えるのだった。

それから程なくして馬車は停車した。
止まつたのは少し趣おもむきのある家の門の外だつた。
否、屋敷と言つてもいいくらいだ。

門は頑なに閉まつてゐる。

兄に引き続き、馬車を降りた私は、門と屋敷を見上げた。

「イリはフィオーラ様とモニカ様の母君、エイシャー様の御実家になります。」

兄の従者、ビジイーラが隣に降りたって説明をしてくれる。

「へえ～。お母様の……。」

そう言えば、あまり母からは昔のことは聞かない。
この土地と何か関係があるのでどうか。

「 行くぞ。」

「あつ！待つて 」

先に行つてしまつ兄。

思わず、服の裾を掴んでしまつた。

「 あ、ごめんなさい。」

別に悪い事をしたわけではないのだが、つい決まりが悪くて咄嗟に
謝る。

変に挙動不信になつてしまつた。

なにやつてるんだろ？、私

兄は立派な人だ。

王宮仕えを立派にこなしている。

私も、兄や家族の恥にならぬよう最低限の礼儀作法は身に付けて
きたつもりだつた。

それが例え、滅多と人前に出るこつが無かつたとしても。

なのに、ふとした瞬間不安になる。

自分の存在があまりにも不確かだということ。

それがばれないように仮面を被つて生きてきていた。
優秀な兄、父なのに釣り合えるよつこ。

弱音など吐いたことはない。

どんなに辛くとも。

なのに。
なのに。

兄のいつもと違う様子に。
冷たい態度に
涙が出そうになる。

俯いて涙を出すまいと、必死に堪えている私の頭に優しい手が置か
れた。

「…」

「 わるい。少し素つ気ない態度を取りすぎたな。……別にモ
ニカのことを怒っていたわけではないんだ。考え方をしていたらつ
いイライラして。悪かった。」

思つてもいなかつた事を言われ、思わず顔を上げる。

そこに映つた兄の顔は相当参つてゐるよつこ見えた。

「……考え方？」

「どういうこと？」と問い合わせ返す私に、兄は知らない方が幸せなこともあります、と言われた。

「？」

意味は分かるのだが、意味が分からぬ。

「ほら早くこい。伯父様と叔母様に挨拶するぞ。」

今度こそ兄は進む。
けれど今度はさつきとは違う。

私に手を差し出して来たのだった。

兄が従者に開けてもらつた門をくぐる。

さつきの様子からすると、兄は叔父と叔母のことをしつていのうだ
らう。

いつ会つたんだろう？

少なくとも私は会つたことがない。

どんな人達なんだろう、と考えてみると兄が突然止まつた。

「？」

兄が無言で見ている方を向くと、そこには少し歳をとつた風の老人

がいた。

兄が、嗚呼忘れていた、と呟く。いかにも面倒くさそうに口を開いた。

「……お久しぶりです、ガイバー殿。」

（ガイバー？）

聞いたことのない名前だ。

「フイオーラ様、そのように他人行儀にされて、じいやは悲しううござりますぞ。」

そう言つて泣きまねをする老人はいかにもツツコミ処が満載だ。

他人が聞けばかわいく映るが、親しくなればうざつたいただろ。

「あ～、はいはい。じいや、急いでるんだ。バイトリー叔父様と、アラグレラ叔母様に挨拶しなくちゃいけないから案内して？」

兄も後者のように、面倒くさそうだ。

「嗚呼、旦那様と奥方様ですね。かしこまりまし……おや？」

ガイバーさんの視線が私で止まった。

（あら、挨拶しなかつたのがいけなかつたかしら？）

ともかく、ガイバーさんの肩がフルフルと小刻みに震えている。

「？」

「…………モニカ様で、『ゼロ』ますか！？」

いきなりズイツと詰め寄られ、私はたじろぐ。

「……え、え。 そうですが……？」

「大きくなられましたなあ。 じいやは嬉しう『ゼロ』ますぞ。」

「…………？」

私が、この人と会つたことあるかしら、と瞬時に考える。
だが、それは無回に等しい。

こんなインパクトのある人と一回でも顔を会わせていたならば、嫌
でも覚えているだろう。

「…………あの…………？」

一人で、感慨深げにしきりに頷いているガイバーさんに声をかける。
だが、返事など返つてくることはなく。
隣にいる兄を仰ぎ見た。

すると兄は、またか、と呟いた。

「じつやう、良くあることじしい。

「」の前お会いした時は、モニカ様はまだ6歳で御小さかったです

なあ。その前はモー力様が赤ん坊の時にお会いしました。」

（えつ、そんなに前なのー道理で覚えてないはずだわ。）

それでもキラキラとした、何かを期待しているような目で私を見てくるものだから、思わず謝った。

「「あんなさい。覚えてなくて……。」

「…………やつで「や」こますか…。」

言つたとたん、あまりにも落ち込むもので、少しばかり申し訳なく思つた。

「…………バイトリー叔父様とアラグレラ叔母様に会いにきたんだけど。」

そこに兄が割つて入つてきた。

そしてもう一度用件を言つ。

「嗚呼、そうでしたね。すみません。あまりにも嬉しかつたもので……。」

（嬉しかつたつて……）

この先が少し思いやられる私であつた。

思に出の鄉愁（後書き）

サイトの更新している所までなんとか追につきたいです…

前回の続きです
そして新年初の投稿です
今年も一年よろしくお願いします。

やつと着いた客間。

そこでガイバーは「少々お待ち下され。」と言ひて出て行った。

ぐるりと室内を見渡した私は、用意されたソファへと腰を下ろす。

兄はとこうと。

突つ立つたまま窓の外を見ている。

何かあるのかと思い、私も覗き込んでみると、そこには「これといった物がなかつた。

では、どこを見るのかと云つと、その瞳は遠くを眺めているのだった。

ずっとそんな様子なので少し心配だ。

あくまでも、少し、だ。

心配して揃するのは目に見えている。

そして時はそのまま流れ、もうやややうかな、とこゝの頃合にノックの音が響きわたつた。

入ってきたのはダンディーのよつなお洒落な老紳士と、少しばかりふくよかな熟女だった。

それを見て人目で分かつた。

これが自分の叔父、叔母なのだろうな、と。

なぜなら雰囲気が母と似通っていたからだ。

母が醸し出す雰囲気は、優しく和やかのだが、どこか毅然としている。

正にそのようなのを一人から感じた。

まず、兄が向き直って挨拶をする。

「バイトリー叔父様、アラグレラ叔母様、お久しぶりです。」

「ああ、久しぶりだ。その様子だと元気そうだな。」

「ええ、本当に久しぶりね。元気で何よりだわ。」

「二人とも言い方は違つても言つてはいることは一緒だ。似た者同士、といったところか。『そうですね。お一人ともお変わりないようで何よりです。このたびはお騒がせしてすみませんでした。それから、モニカをよろしくお願ひします。』

このたび?

お騒がせ?

何もやつてもないし、お騒がせした覚えもない。

(どうにうりとかじら?)

「あんなの大したことではない。それにモニカのことなら任せる。」

自分の知らないところで何があるようだ。

兄に促され、私は一人に挨拶する。

「……初めて叔父様、叔母様。母、エイシャーの娘、私です。お世話になりますがよろしくお願いします。」

とりあえず、挨拶をしてみるが、ぎこちなくなってしまつ。

自分の叔父、叔母、といつても会つたこともないのだ。それもそつだろう。

「まあ、そんな他人行儀なこと言わないで、モニカ。貴女は覚えていないとは思うけれど、小さい頃、良く遊びに来てたのよ。だから、初めましてじゃないわ。そこはアラグレラと呼んでくれなきや。」

誰を口を挟む間もないまま、叔母が喋り出した。

なかなか親しみやすいそうな人のようだ。

「私のこともバイトリーと呼んでくれ。」

次いで口を開いたのは叔父だつた。

「こちらも気さくな人柄のようだ。」

「ええと、」

兄もバイトリー叔父様、アラグレラ叔母様、と呼んでいた。

「それじゃあ、バイトリー叔父様、アラグレラ叔母様。」

「ダメよ。叔母様だなんて付けないでアラグレラと呼んでちょうだい。」

他人行儀は嫌なの。

と言われてはそうするしか私にはなかつた。

ベルシアの地に来てから2日が経つ。

叔父、叔母の屋敷には最低限の使用人しかいないことが分かつた。

ガイバーさんはこの屋敷の執事だという事も。

後に聞いて驚いた。

私には特にすることが無く、ぼーっとして景色を眺める事が多かつた。

もちろん自分に宛がわれた部屋からだ。

母達の居た屋敷でもそうだつた。
景色を眺めることが好きだつた。
風に揺れる草花が遠くからでも見て取れ、自然と笑みがこぼれる。

秋風で少し冷たいが、支障はない。

そこへ、ノックの音が響いた。

現れたのは兄、フィオーラ。

「どうしたの兄様？」

開け放たれたバルコニーから室内へ戻りながら、私は尋ねる。
確か兄は、休んでいては溜まる一方の仕事を従者に届けてもらい、
部屋に立て籠もってやっていたはずだ。

「……ビジィーラの言つていた通りだな。」

ポソリと。

兄はそう漏らした。

「ビジィーラが何か言つたの？」

別に言われるようなことしないわよ、と呟く。

そう言ひえば、今朝早くに彼を見た。

馬を駆けて、兄に仕事を持つて來ていたような気がする。

「いや、ビジィーラはどうでもいい。モニカ、少し外に出たらどうだ？天気もいい。」

「外、に？」

「ああ。ずっと部屋に籠つていると聞いて、な。」

自分でつて、ずっと部屋に籠っていた癖に、と思つ。やはりビジィーラから聞いたのだろう。私のことを。

「兄様ほどは籠つてはないわよ。」うして室内に光りを取り入れているもの。」

「ねつこつ」とを言つてゐんじやない。……お前も分かつてゐるだろ?」

いつも増して困惑した様子の兄。私も諦めて腹を括つた。

「…………そうね、分かつて。心が、魂が唄いたいと訴えてくるもの。ひしひしと、ね。」

「だつたら

「できないわよ。」

口を開いた兄の言葉を遮り、否定を口にする。

その言葉に兄は黙る。

「できないの。」

もう一度。

先程とは小さく漏らす。

兄の顔を仰ぎ見れば、痛みを堪えているかのような表情をしていた。

（嗚呼、兄にこんな顔をさせてしまつたなんて……）

「……この土地の意味、忘れてしまつたか？」

「？」

「この土地はハ神将、クレイムの生まれ故郷。空気は澄み渡り、自然が力を貸してくれるから力を制御することもできる。」

言われた言葉に驚いて兄の瞳を見る。

いつもはふざけた調子の兄が、真剣に語つていた。

確かにベルシアの土地は、神将の故郷だというのは母から聞いた。だが、クレイムの故郷だというのは初耳だ。

「力の制御……」

「そうだ。力を制御してくれる。それに、我慢する必要もないんだ。この地で馴らしていけばいい。父様も母様もそうお思いだ。溜まりに溜まつた最後、苦しいのは私だ。そくならなにように、俺達家族はここを選んだ。私が普通に生活でき、普通の幸せを掴めるように、と。だから、ここで制御することを覚えよう。」

私を思ってくれている家族の存在を感じ、涙が零れた。

「……と、う様……も……？」

私のせいで迷惑を掛けってきた存在だ。

「ああ。あの人は外見からは想像つかない人だからな。けど、私のこと、超が付くほど心配してるんだ。」

本当が嘘か、良くわからないうつな言葉を吐く。

「うん。 ありがとう。」

「だから唄つていいんだ。俺だって私の唄は好きだぞ。」

本当に優しい事を言つてくれる。

それが私を促した。

「なら、少しだけ練習しようかな?」

皆の期待に応えよつと思つた。

せめて、力が制御できるようになればいいのだ。完璧といわないまでも、多少は。

私の言葉に、兄は明らかに安心していた。詰めていた息を吐き出しかのよつて、息を吐きだす。

「なら、いつでも外に出かけてきていいぞ。ただし、この辺り周辺にいる」と。出かける時は誰かに言つてから出かける」と。

これさえ守れれば人でもいいと言つ。

こんなこと初めてで。私は無性に嬉しかつた。

端から見れば、私は世間知らずの分類に入るだろつ。だが毎年一、回、コツソリと屋敷を抜け出して街へ行つていた。

家族の誰かに許可されて、一人で外に出るのは初めてだ。

「分かった。」

私の返答はもううんうんだ。

こんなに都合のいい機会は滅多とない。

こんな機会逃してなるものか、と私は取るもの取つて用意をした。

兄に「行つてきます」と言えば、「遅くなるなよ」と返された。

「もううん。」

そう言い残して、私は後ろ手にドアを閉めた。

廊かに出ると隣室に入つて、ドレスを勢い良く脱いだ。

私は宛がわれた部屋の隣。ここには持つてきた荷物などを置いてある。

そこには当然衣類もあるわけで。荷物の中からそれらを出した。

そして、その中で一番シンプル且つ軽い者を選んだ。

そしてまた部屋を飛び出す。

走つてははしたないだらう、とは分かっているが、今の私にはそんなことどうでも良かった。

広がる野原。

所々地面から突き出た大きな岩。

気持ちの良さそうな木漏れ日を造つて いる木々。

そして、名も知らぬ鮮やかな花々。

それらが地平線まで続いているかのような広さ。

風は澄み渡つており、まだ残暑の名残を残した秋風が銀色の髪を揺らす。

私はまず、自然を感じる事から始める。

目を閉じ。

全ての感覚を研ぎ澄ます。

まず耳に入るのは。

鳥の^{さえず}囀り。

擦れ合う木の葉の鈴の音。

そして

大地に吹く、神の吐息。

感じたのは

大地の優しい母の臭い。

最後に

揺れ合う花々の可愛いダンスに。その真上で踊っているのだひつ、
妖精達のヒソヒソ話。

目に見えないもの、それを感じること。

それが大切なのだ。

例えるなら。
風。

それは確かに感じるのだが、目に見えない存在。

すると、私に気がついた妖精達が近づいてきた。

『そうれいじょうしゃ
奏靈弔者だわ。』

『ほんとだわ』

『久しふりに見るわね』

『やつぱり、この波動いいわ』

『クレム様の時並ね』

奏靈弔者とは、亡くなつた人の魂や自然を弔い、かつ自然の力や精

靈や妖精の力を借りた魔法を自在に扱うことができる。今まで公に奏靈弔者と知れ渡り、呼ばれた者はただ一人。八神将にして最強と謠われた、神の担い手、クレム。

この国、アラインダ国の地位はこうだ。

下にレクイエム、上に国守り、そして、一番上には奏靈弔者。

一般的には国守りが一番上だ。

なぜなら、奏靈弔者は初代のクレム以来存在していないとされるからだ。

レクイエム（鎮魂歌）とは、この国では教会などの聖職者などで、ごくわずかな力ある者が妖精などからそう呼ばれることから始まった。

国守りは、その限られたレクイエムの中から国に選ばれし者のこと。両手で数えきれるほどの人しかいない。

そして、全ての生命秩序もを崩しかねないとされるほど、絶大な力を駆使するとされる奏靈弔者。自然に、精靈に、妖精に愛され、力を与えられる。伝説とされる者。レクイエムなど以外の外、国守りなどの力の及ばない存在。

その力は人には隠せても所詮妖精達などにはばれてしまう存在なのか、と私は自嘲してしまつ。

小さな、そして薄い羽根を背に付けた妖精。
愛らしい容姿をし、自然と共にいる。

花の精や風の精。

種類はばらばらだが、この世界には美しいものにはほとんど妖精が付いている。

だが人前にはめつたと姿を現さない。

その、普通なら見えることのないはずの妖精が近づいてくる。

自分から。

だが、慣れてしまえば別段返すリアクションもない。
もつ見慣れた光景にもなっている。

「あなたたちは」の土地の妖精?」

手を差し出せば指先に一人の妖精が留まつた。

「そうよ。貴女が次の奏靈弔者?」

「どうやらやううね。」

「なら、ずっとこの土地に居るのね。」

無邪気に、とてもかわいらしく問い合わせてくる小さな妖精。

だがその質問は、私には予想もしないものだった。

「え? どうして?」

どうしてずっとここに居るのとなるの?

私には初耳だつた。

「……なんでつて、ねえ。」

指に留まつていた妖精は背後にいた、自分の仲間に同意をもとめるかのように振り返つた。

「奏靈弔者は外の世界では生きていくことは難しいんだ。」

その内の一人。

少年の姿をした妖精が答えてくれた。
が、意味が分からぬ。

生きていいくことが難しい?
どうじうこと?

「意味が分からぬ、つて顔ね。」

私の表情を読み取つたのだろう。
再び指先に留まつていた妖精が言つ。

私は肯定のため、「クリと頷いた。

「人間に見つかれば、奏靈弔者の力はものとして利用され、王宮に閉じ込められ、世間から隔離される。……このことは知つてゐるわよね?」

確かに母達から口をすっぱくして、幾度となく言い聞かされた。

だから私は余り、世間に公にされることなく育つた。
私もそれにはたいして疑問を抱いたことはなかつた。

(だつて、それは私を思つてのこと)

けれど、時おり感じる反発心からか抜け出すことはあつた。

が、これはこのさう許してもいいことにしてよ。

妖精の問い掛けに頷き返せば、それを確認した彼女は再び説明を始めた。

「幾度となく奏靈弔者は秘密裏に王宮に隔離されていたの。けど、
彼女らは初代クレム様ほど力もなく、奏靈弔者とはとても言えない
ほどの力ぐらいしかなかつたの。これで、民には公にしなくとも、
貴族たちの支持は得ろうとしたの。」

「……偽の奏靈弔者……」

たしか、奏靈弔者の力を持つた者は初代のクレムを筆頭とし、人は
は異なる者からそう呼ばれたのはわずか5人ほどのはず。

「そうよ。彼女らは良くて国守り、悪くてレクイエムほどの力しか
持つていらない者達だつた。中では国王の妃になりたいがため、金を
積んで自分の娘を嫁がす貴族もいたわ。中でも力などないのに、偽
つて王宮に入つた者もいたの。」

「えつ！？それって、王を騙していたってこと？」

王を騙すことは重罪だ。

「やうとも言えるけど、やうとも言えないと。よ。」

何かの謎掛けみたいだ、と思つた。

「国王は知つていて、知らぬ振りをしたの。……王座がそんなにも大切なかしら?」

その妖精はボソリと漏らした。
きっとそれは本音。

私は政治、権力、財、どれにも興味もないし、執着もない。そんな私には、とても悲しそうに咳く妖精に掛ける言葉が見つからなかつた。

少しずつ主な登場人物が揃ってきました。
グレファーは根は素直でいい子、のはず。

少しは本題にかすつてくれたかな……？

「王は権力を求めるがために、見て見ぬふりをしていたわ。自分が
ら望んでなつたものもいたけれど、残り半分くらいは無理矢理入れ
られた、という方が正しいの。」

私は驚きを隠しきれなかつた。自分の住んでいる国がそんなもので
成り立つていてるのかと思うと嫌だつた。

「王宮は強力な結界が張られていて、人外の者が入ると悪影響を及
ぼすの。ひとたび貴女がの奏靈弔者であるとばれたなら王宮に入る
ことは免れない。私達にとつても奏靈弔者にとつても両者は生きる
糧とも等しい存在。そして貴女も例外ではないわ。」

彼女が言つには、このことで世界の秩序は守られるらしい。

妖精達の心遣いは嬉しい。
だが、私は思う。
守られたい訳ではないのだ。

それに

「
私が奏靈弔者だということは変えようのない事実だわ。
前に進まなければ何も変わらない。進むことでの失敗なんて仕方の
ないことだ。」

今大切なのは

「志を強く持つこと。今の私にできることはそれだけよ。見つかることを恐れてばかりじゃ何もできないわ。だから私はここには残らない。」

私の一言で妖精は驚いた顔をした。

「…………忘れていたわ。私達は奏靈弔者を保護する事しか頭になかったわ。…………ほんと、クレア様に似てるわね。」

「似ている? 私とクレア・バズ・デーランが…………?」

クレア・バズ・デーランとは、神の担い手クレアと言われた彼女のあまり知られていない旧姓だ。

「ええ、似ているわ。…………仕方ない。私達は貴女の意志を尊重するわ。」

（あれ?…………妖精は一人で決定や決断をしないはず。決断するのは…………）

そこに一陣の風が吹いた。

ふわり、と

懐かしい匂いがした。

と、ともに別方向から人の気配がした。

（こんな所に人?）

ここに来てから祖父や兄達以外の人を見かけることはなかった。

少し離れた所に村があるらしいが、こちらではあまり来る事がないとも聞く。

誰だらう、と思つて振り返る。

「…あなたは……。」

そこに立っていたのは。

「やつと見つけた。」

「ハーレイ。どうして、ここに……。」

数日前に会つたばかりの彼がいた。

あんな別れ方して顔を合わせづらい。

もう会うことはない、と思つていたのに…。

私に関わると私にとつても、彼にとつても良くない。

どうしたものが、と彼を見る。だが、何か足りない。

「あれ? ヴィオラは?」

そう、いつも一緒にいる感じの彼女の姿が見当たらない。

「ああ、あいつは

「人間。どうしてここに来た。」

何かを言いかけたハーレイ。

それを遮った迫力ある声。

女性の声なのだが、明かに威嚇を表した声だ。

えつ？、と振り返る。

と、そこに立っていたのは

「 あなた、さつきの妖精！？」

だが、先ほどまでの小さい妖精の姿ではなかつた。

顔立ちは同じなのだが、明らかに今の方が大人びて見える。
そして周りには始めから一緒になつて群がつていた他の妖精達が彼女を守るようにして飛んでいた。

「ええ、そうよ。」

そう答えた彼女から漂つてくる仄かな香。
それがどこか懐かしかつた。

「モニカ、あれは？」

ハーレイが指しているあれとは妖精だった彼女のことだろう。
彼女の周りの妖精は、ハーレイが表れた時点で彼には見えないよう
に姿を隠していた。
当然、奏靈弔者である私には見えるのだが……。

だからといって私にその質問が答えられるわけもない。
なぜなら、彼女は今し方まで妖精だったのだ。
だが、今は妖精ではない。

この姿は

「人間風情が私の事を指差すな。私は誇り高き精靈よ。」

「精靈…」

まさか、精靈が姿を偽って、妖精の姿になつてゐるなんて思いもし
なかつた。

「お前、ここから私を連れて行くつもり?」

あれ? つと思つた。

(私、彼女達に名前を教えてないはずなのに……。)

「……なにがうする。」

なぜかハーレイは精靈を挑発するような言葉を言つた。

「ここからは出て行かぬつもりか。」

その問いに彼は頷き返す。

「ならば消えろ。」

瞬時に気温が下がった。

私は瞬時にヤバイと思った。

私には強力な結界を張ることができる。だが、精霊の魔法壁が私の周りに張り巡らされており手を出せない。

「 つ……逃げてつ！」

精霊から田を外し、ハーレイの方を見る。

彼も身の危険を感じたのだろう。身を強張らせていた。

ああ、だめだ。

彼は精霊の魔力に充てられている。

逃げられない。

精霊から放たれた力の塊はハーレイに向かって一直線に向かっている。

目の前に起つてゐるであろう惨事を予測し、私は反射的に田を閉じてしまつた。

だが、想像していた音はしない。

代わりに、何かが弾けて跳ね返す音がした。

「え？」

田を開けば、そこに映つた物を見て思わず素つ頓狂な声がでた。

致命的な一撃を受けていると予測していた彼には、なんの外傷もな

く。

ただそこに立っていた。

いや、突つ立つていた、という方が正しい。

おそらく、彼も訳が分からぬのだろう。

戸惑つた顔をしていた。

「何故私の攻撃が効かないの。私の攻撃は同一の力を持つ者、もしくはそれ以上の者でなければ防げないはずなのに！」

精霊が言つた言葉にハツとした。

そういえば。

ハーレイとの別れ際、彼に守りの魔法を掛けた。

あれのおかげだつたのだろうか？

だが、あれは国守り一人のモノよりは強いが、簡単なモノだ。

そんなモノで精霊の力を防げるとは、私も思つていない。

何故

という疑問が残るが、私は精霊の魔法壁が緩んだ隙にハーレイに駆け寄る。

「ハーレイ

そつ呼べばすぐさま彼はこゝりを振り返つた。

「モニカ……」

何とも言えない戸惑つた表情だった。

いつも優しいが、毅然とした表情をしていた彼からはとても想像できなかつたので瞠目した。

「ねえ、どうしてこの人を傷つけるの。さつき、私の意見を尊重すると言つたじゃない。」

元は妖精の姿をしていた精靈。
彼女に向かつて言つた。

初めと言つていたことが違う。

「そいつは王家の血を引いている。あの虫酸が走る、血をね。」

すると、思つてもいなかつた言葉を聞いた。
位は高い高いとは思つていたが、そこまでとは思いもしなかつたのだ。

それに、よっぽど不快なのだろうか、精靈は顔を歪めて吐き捨てる
ように言い放つた。

「ハーレイが王族……」

それも、直系に近いのだろう。

私の呴いた言葉に反応するかのように、彼の肩はぴくぴくと揺れた気がした。

「でも、だからと言つて彼を攻撃しないで。王族かどうかなんて関

係ないわ。ハーレイは私の命の恩人よ。

—

精靈達の眞実（後書き）

微妙に本題にかすりました（苦笑）

sa idハーレイ（前書き）

sa idハーレイ
視点が変わります。
といつても1ページですが
：

saidハイレイ

訳が分からぬ俺の所に駆け寄つてくる少女、モニカ。

彼女を改めて見た瞬間、安心すると共に体が強張るのがわかつた。

それは、彼女を見た瞬間ファイオーラの顔を思い出したからだ。

別れ際言われた言葉が脳裏に横切る。

だが、自分はそれを覚悟でここまで来た。

しかしその場に、神々しいまでの精霊の一言に全身が凍る。

その言葉からは自分は逃げられないのだと、知つてゐるからこそ動けなくなる。

自分の逃げられない宿命、とも言えるべきもの。

こんなもの望んでいない、と幾度となく思った。

だが、思うだけではなにも変わらない。

変えるために動くんだと知つたから、自分はここにいる。

自分の胸が疼くような感覚や気持ちの名前をまだ見つけられていないが、分かつた時に何かが変わるような気がするから……。

だから、自分は立ち止まらない。

俺の前に立ち、華奢な身体で俺を守りつとする彼女に、ふと笑みがこぼれた。

自分と少し似ている。

そう思つた。

逃れられない運命に嘆く姿も、まるで昔の自分のようだった。

saidハイレイ（後書き）

s a i dハイレイ e n d

この人の性格は作者にもあまりわかりません

人の手、精霊の手（前書き）

視点戻ります

人の手、精霊の手

自分の言葉には嘘偽りはない。

確かに、王族に私の力のことがばれたら私に未来はない、とも言えるだろう。

だがそれ以上に、彼なら大丈夫だと、本能とも言える直感的なモノが伝えてくるのだ。

それは、私の恋心からくる羨妬かもしれないが、私はそれでもいいと思った。

「な、に・・・命の恩人」

「そうよ、それでも貴女が彼を攻撃すると言つならば、私は貴女を許さないわ。」

その言葉は、奏靈弔者を守ると言つた精霊ではなく、人間の手を取るという意思表示。

それが、どうすることを指しているかは分かっているつもりだ。

「う……！」

そして、私の言葉に、意志に怯んだ精霊。明かに動搖、と見て取れる。

私は、ただ言葉もなく彼女を見つめる。

と、まさ先に身じろぎしたのは精霊。
そして言葉を紡ぐ。

「……それほどに貴女の意志は固い、と云ふことなのね」

それは質問でも疑問でもなく、確認。

私の一言で全てが変わるような気がした。
だが初めから私の答えは決まっている。

「ええ、変わらないわ。」

精霊の金色の瞳を揺らぎ無く見つめ返せば、今度はそれに答えるか
のよひに見つめ返された。

底光りする金色の光りは先程と違い、どこか優しさを感じられや
た。

「……いいでしょ。貴女の好きにしなむ。」

どこか突き放すような言い方。

だが、口調はそぞろなのだが、やはり田だけは優しかった。

彼女の言葉は絶対だ。

彼女の周りに群がるようにして居た妖精達は、自身から身を引くよう一歩後ろに後退した。

嫌いなものは…

あれから騒ぎを聞き付けた兄がやつて來た。

そして、私の傍らに立っていた人物を見て足を止めた。

ハーレイと兄の視線が睨み合っているように見えたのは氣のせいではなかつただろう。

屋敷に戻つた私は、2階の部屋にいるよつこ、と言われのけ者にされてしまった。

(兄様のバカ!)

2階へと続く階段を登ながら、思わずため息が零れた。

今頃、応接間ではあの二人が話をしているはずだ。

私は最後まで、残ると言い張つたのだが兄の睨みを効かせた一声で

「のざまだ。

（はあ…、情けない。）

一人の会話に自分が関わっているのは一人の態度を見れば、火を見るよりも明らかなのに。

それに、聞かせたくないことでもあるのだろうか。

ハーレイにまでフィオーラと一人だけで話させてくれ、と頼まれた。

けど、一番バカなのは私だ。

兄を説得することも、ハーレイと向き合つこともできない意氣地無し。

こんな自分嫌だなあ、と呟きながら今入つて来た部屋の窓を開け放つた。

ふと何かが聞こえる。

何を言つているのかは分からぬが、風にのつて人の話し声がしたのだ。

何だろ？

窓から身を乗り出し、下を見れば開け放たれた窓が見えた。

そして気がついた。

「」は応接間の真上に位置するのだと。

（「」から話を聞けないかしら）

そう思い先程よりも大胆に身を乗り出す。

中の様子が気になつたのだ。

「 危ないでしょ？ モニカ。何してるの。」

突然背後から声が聞こえた。

諭すような、どことなく呆れたような声。

「えつ……わあ、あやあー」

当然私はびっくりしてバランスを崩しそうになつたが、窓枠を掴んでいたのでなんとかバランスを崩すことなく踏み止まつた。

我ながら情けない声だと思つ。

なんとか落ち着きを取り戻した私は、落ちそつになつた原因である背後の人物を突き止めるため振り向いた。

そこにいたのは

「 あなた、さつきの…精霊。」

精霊と言つことにためらつたのは、また妖精の姿をしていたからだ。

それよりも思いもしなかつた人物だった。

「 その精霊という呼び名、やめてちょうだい。あたしの名前はグレファーよ。」

姿も変われば言葉遣いまで変わるようだ。

「 グレファー…？」

その響は、どことなく不思議で、懐かしく感じさせた。

それに、そう呼ばれたグレフターせじーとなく嬉しそうだ。

「ナビ、グレフターって言こへんこへいわね。レフター ドビリハ.

妖精の姿をしてこる時のグレフターは少しもせりやな女の子のようだ。

精霊の時にはあんなにも威厳があるのによく不思議なものだ。

「ここわよ、モーかがそつしたいのなね。」

「……ねえ、」

「なに?」

「もしもして私達にこんなことしちゃうの？」

私は思わず疑問を口にする。

せひ、今私達がしてこないとはなんとも滑稽だとこころるだらう。

私は床に膝を付け、床に耳を押し当てるところだ。

これで話しが盗み聞きしきりとこりわけだ。

それにしてもなんとも古典的な方法だ。

しかもそれを勧めたのはレフラーなのだ。

その本人はと言つと、

全く同じ格好で床に耳を押し当てる。

全く同じ格好で床に耳を押し当てる。

（私が聞いたのもなんだけど、精靈がそんな格好をするのはどうなの
よ……）

まあ、自分もレフラーに言われるがまま、同じことをしているのだから声には出れない。

だがんな古典的な方法でも聞こえるものは聞こえるのだ。
格好だけがはしたないだけで……

(こんな姿誰にも見せられないわ……)

「どうかしたの?」

不思議そうな表情をして、こちらを向いたレフラーに、何でもないと
首を振り、再び床に耳を押し当てる。

「 で、話つてなんだ。」

私が去つてから沈黙し続けていた部屋。

はじめに沈黙を破ったのはフィオーラだった。

「仮にも主にそんな口の聞き方していいの?」

「……残念ながら俺は私公混合し質たちなんでね。それより、疑問を

疑問で返すなよ。」

今までにないくらいぴりぴりした雰囲気をまとい、言葉を発する彼に仕方なく、ため息をついた。

でもまあ、仕方ない。

自分が無理矢理おしかけたからだ。

「……まあお前に謝らないといけない、すまなかつた。月華の森でお前達を襲つたのは元老院の奴らの精銳隊だつた。」

元老院とは高位・年齢が高く、人望のある功臣のことだが、今の王宮に仕えている元老は欲望と野望で荒んでいる。

ある意味自分のためだけにしか動かない。

能力は優秀だというのに嘆かわしい限りだ。

「……予想はしていたが、…まさか本当に元老院だつたとはな。」

やはり。

頭のまわる彼のことだ、想像はしていたのだろう。

「だから、すまない。家臣の監理ができるいないのは俺のせいでもある。」

そこで頭を下げる。

端から見ればなんとも珍奇な光景なのだらう。

普段からあまりたじろぐことはないフィオーラなのだが、さすがにそういう訳にはいかなかつたようだ。

自分の主ともあらう人が頭を下げて許しをこいつてくるのだから。

戸惑つた瞳と真意な瞳とが交差した。

実はと詰つて、フィオーラはここまでは思つていなかつた。
ハーレイにも元老院にも。

自分が長年仕えてきた主なのでその性格は知つてゐるつもりだった。

ぶつきらぼつだが優しくて、自分偽り、おもて面を取り繕つ。優しそうな笑顔をする割には腹黒で、内心何を考えているのか分からぬといふ厄介な性格。

はつきり言つて性格は知つてゐるが心の内は知らない、といったところだ。

まだ小さい頃は素直だつたよつて記憶している。
自分と彼は幼なじみなのだ。

「頭を上げて下さい。主が部下に頭下げるひびくんですか。」

言葉遣いを正し、ハーレイに頭を上げろと。

確かに自分は怒つていた。

だがそれはほぼハつ当たりだつたのだ。

そう、自分へのふがいなさ。それを身に染みて感じたのだ、今回の奇襲を通して。

モニカを関わらせないようにするために馬に乗せ、あの時逃がした。だが逆にそれしか方法が無かつたのだ。
確かに彼女は強い。

剣の腕も、精神も。

あのままモニカがいても追跡者からは逃れられた。
しかしそれではいけなかつたのだ。

追跡をしてきた者の中には国守りもいた。

国守りは独特な雰囲気をしている。なので彼等は自分達の同胞を見分ける術を持つている。

モニカはまだ完全には覚醒しきっていない。
なのでそんな術は使えない。

だがフィオーラは違った。

なんでもそつなくこなせ、その実力も人並み以上だ。

それに妹のモニカと日々過ごしていれば能力者の見分けがつくぬうにっていた。

これも、フィオーラが天才と言われるゆえなのだろう。

そして追跡者の中に国守りがいると悟ったゆえにモニカを一人で逃がした。

あのままいればモニカは確実に王宮へと連行されていただろう。

「いや、謝る」とはありませんよ。向こうはモニカのことを感じていましたから、仕方なかつたんです。」

「な、に！」

「追跡者の中には国守りもいましたから。」

「そんなこと…ありえない。」

それを聞いたとたんハーレイは頭を振りながら言った。

ハーレイが信じられないのも無理ないだろ。

国守りは一度王宮に入れれば一度と戻る」とは叶わない。
そんな存在だ。

「だが私には馴れた氣配だったので間違いありませんよ。モニカにはまつたく及びませんがね。」

「おまつー。氣配で分かるのか。」

明らかに驚いた声音のハーレイ。

無理ないだろう。普通ならば分かるはずのない氣配だ。

「一応は、ね。これでも伊達に兄妹として育つてきてしませんからね。」

そんなフィオーラの言葉に、ハーレイは飽きれるばかりだ。

「それにしても……どこから情報が漏れたんだか……。」

「俺もそれが気になるんですよ。ばれているならしかなたいですけど、どこから漏れたかが気になるんです。今後もこのようなことがあつては困りますからね。」

「フィオーラはいつそ清々しいほどに開き直り、情報の漏れ所が気になるようだ。」

「なら俺も動ける限つのことよ。」

口こした言葉に嘘偽りはない。

だが、

「俺でさえフィオーラに妹が居たことを知らなかつた。なのにどうして元老院がこんなにも早く情報を掴めるのか。」

「さうですね。俺でさえ陛下にばれなことひじてこたぐりになに……」

「…………。」

沈黙の後、ハーレイとフィオーラがため息をつく。

「どうやらお前の従者は好奇心旺盛なようだな。」

客間の扉を見つめながら呟いた言葉。
それは相手にも聞こえていたようだ。

緩く開いていたドアからビジィーラはひょっこりと現れた。

自身の従者なのだが、その軽率な行動に呆れて物も言えないフィオーラ。

「いやあ、フィオーラ様すみません。報告しにきたんです。そしたら殿下と話なんかしているじゃありませんか。入る機会を逃してしまいましたね、つい」

「出来心で盗み聞きをしたと。」

己の従者の言葉を途中で遮り静にその先を紡ぐ。

ハーレイはフィオーラが無言で怒っているのを感じていた。

まあ、普通はそれが当たり前だ。

彼等一人が話していたのは国の機密にも入るようなことだ。

「いえ、盗み聞きをなす同罪者がいますよ。ホラ?」

そう言って彼が指した先。

そこにはモニカがいるであらう階の部屋。

私は真っ先に、兄の従者であるビジャーラに睨みを効かせた。

だが彼はそんな私の視線を痛くも痒くもありません、とばかりに素知らぬふりして口笛をふいた。

そんな様子に腹立つた。

けれど今はそんなやつに構つて居る余裕はない。

だつて……

「モニカ、盗み聞きつて居るのはマイシのよつなびつよつもないヤツがするんだ。可愛い妹がそんなことを覚えてお兄ちゃんは悲しいぞ。」

うん。

前半はよしとしよう。

だが後半はいただけない。

「でもそんなことを言いながら、フィオーラはモーカが盗み聞きしていたことじつてたよ。」

横からそう助言をくれたのはハーレイだつた。

その言葉に私は「え？！」と驚いた。

「勝手に、何暴露してくれるんですか。せっかく俺がお兄ちゃんヅラじょりとしてたのに。」

そうなると私はまんまと兄の手の平で踊らされていたことになる。

「何がお兄ちゃんヅラよ。サイテー。」

その一言で大ダメージ。

フィオーラは床に撃沈した。

でもフイオーラが私のことに気がついていたと言つたハーレイ。なら彼も知つていたといつことになる。

(どつちもどつちね。)

内心呆れながらため息を吐く。

「それにしてもモニカがそんな大胆?なことするなんて思わなかつた。」

そう

私にしては珍しい行動だ。

屋敷にいる時ならばそんなことはしなかつた、……はずだ。

そもそもその発端となつたレフラーは隠れてしまつた。

彼等が来る前に。

今彼女が居る場所は私の髪の毛中。
中と云つても首の根元辺りだ。

しかし、なかなかこそばい。

どうしても身じろぎして首を動かしてしまつ。

途中、いつぞのじとばらしてしまおうか、と幾度となく考えた。

私の意志を無視してハーレイを傷つけようとした事。

このことだけでも憎む理由になりかねない。

だが何故だか憎めない性格を彼女はしている。

「だつて知りたかったんだもの。それにしても…………」

じつとハーレイを見つめ帰せば彼は少しだじろいだ。

「…………貴方、王太子殿下だったのね。」

しみじみとそう呟けば彼は「」となく寂しそうだった。

（これで辻襷が合つわ。）

月華の森で助けられたと聞いた時。

連れて行かれた先、そこが隠された土地ベルシアからそれほど離れていない場所に位置した屋敷だと知った時。

兄の事を知っていると言われた時。

兄が敬語を使った時。

私はこの答えを頭のどこかで知っていたのかもしれない。

月華の森になど、人は数えるほどしか踏み入らない。
そんな中に彼がいたのだ。
普通ならありえない。

「兄様も人が悪いわ。なんで教えてくれなかつたの。」
と問えば、関わらせたくなかつた、となんとも簡潔な答えが返つてきた。

(関わらせたくなかつた、つて。自分の主に?)

いつもより真剣な表情。

そんな表情をされると何だか不安になる。

ふとビジィーラの方を向けば、彼は何の反応もしていなかつた。

(あいつ……全部知つてたわね!)

何だか自分が仲間外れにされたようで、何だか悔しい。

確かにビジィーラは兄様の従者だ。だからつて、私だけ知らされていなかつただなんて……。
……兄妹なのに。

そんなに私は頼りないだろうか。

「まあとにかく、モニカはどこまで話を聞いた?」

「えつ？えツと……、王太子殿下でさえの情報を掘むのに苦労したのに、元老院が私の事を知った上で動いていたってところ、かしら？」

そう言いながらも私も考える。

情報通である王太子殿下。

それには劣るがなかなかの実力を持ち合わせしている元老院。彼等が同時期に私の情報を得た。

誰かが流しているとしか思えない。

もちろん屋敷にいる家人だという方法もあるのだろう……一般は。

だが私はそんなことを全く疑っていない。

私の屋敷で働く彼等はもちろん、家族との絆は生半可なものではない。

それだけは言い切れる。

私の家。

フローランス家の使用人は一時期から全く入れ代わりをすることはない。

それからは信頼できる者しかいない、と言つても過言ではない。

考えながらもハーレイの方を向け、何となく何か言いたげだった。

「どうかした？」と聞くとすれば兄の言葉に先を越された。

言葉を発するために開かれた唇は何をするでもなくまた閉じた。だが自分の瞳が何とも言えない悲しい顔をしてることに気づきはしなかつた。

「問題は誰が情報を漏らしたということじゃなく、何が漏れたかということだ。」

しかし兄の一言。

「何が……」

そこまで呟いてハッとした。

兄の言いたいことが分かつたのだ。

「……私の力。」

「そうだ。それがどこまで相手が知っているかをこちらも把握する必要がある。」

（けどこの様子じや）

ハーレイも同じ事を思つたのか口を挟む。

「君達一人を追うのに国守りを使つてきたぐらいだ。あいつらも国

の要に近い存在を動かすと必ずこうした存在を相手にしてくるかは分かつてゐるようだしね。」

ビリビリの存在

その言葉にビクッと肩が揺れた。

それは奏靈弔者のことを指しているのだ。ひつ。

「だから俺は屋敷には帰らない方がいいと想つ。」

それは私に向けられた兄の言葉。

「屋敷に……帰らない……。」

まさかそんなことを言われるなんて想にもしなかつた。

「フィオーラ、それでは

「わかつてゐる。」

何かを言おうとしたハーレイをフィオーラは遮つた。

「わかつていなだらうーお前は妹に、家族と離れて暮らせと言つてゐるも同然の事を言つてゐるんだぞ。」

「……これしか方法はないんだ。」

苦し紛れにそう呟かれた言葉。

そこから私は兄の覚悟を汲み取った。

「探しもしないで決め付けるのか。これしか道はない、と。その上モニカの幸せまでもを決め付ける。その方法が正しいと何故言い切れる。」

普段の柔軟な雰囲気など何処へや。ひ。

触れたら切れそうな、鋭く鋭利な刃物を思わせられた。

「ちょっと待つて、殿下！ 殿下の言つた通り、自分のことなら自分で決めるわ。それが私の力のことなら尚更ね。」

「……モニカ。」

普段私にベッタリな兄の困惑しきつた表情。そんな表情をさせてい

るのは他でもない私だ。

「なら、どうしたい?」

言ひのをためらつてゐる私を優しく促したのはハーレイ。

「私は……私は王宮に行くわ。」

これは私が悩んだ結果だ。

「待て、何でそつなるー。」

兄の焦つた声がした。

次いで隣を見れば、驚愕した顔をして私を見るハーレイ。

「ちひは驚きすぎて声も出ないよつだ。」

「モニカがあの偏屈ジジイの巣窟魔に行くなんて……。」

そう言ひて口口と倒れる、振りをする兄。

それを受け止める、振り、をしたのは、何とも嘘くせに声を出したビジィーラだった。

「ああ、フィオーラ様お可哀相に。こんなにも心配なさつてゐる兄君を、放つて行かれるのですか。」

今まで黙つておいて、傍観者を決めこんでいたのに今さらだ。

（うわあ。なんて嘘くさいの。）

そんな私の気持ちを知つてか知らずか、ハーレイが制止の声をあげた。

「止めてくれるかい？ ビジィーラ。… 空氣が悪くなる。」

躊躇つた彼が口にした言葉。ある意味凄いことを言った。

「それにしても、自分から王宮に行くなんて正氣かい？」

これは純粋な疑問なのだろう。

「正氣に決まってるわよ。けどね、ノコノノ元老院について行くってわけではないのよ。相手に氣づかれないように王宮に入るの。」

いくら元老院といえど、世間知らずの小娘が自分から敵地に乗り込んで来るとは思つてもいだろ。いや、世間知らずだからこそか。

いくら目を外に光らせてこようとも、外にダーゲットがいなければ

意味のないことだ。

まさか自ら敵地に乗り込んでくるなんて思いもしてないはずだ。なので必然的に王宮、内、は手薄になる。

これが私の狙いだ。

（何より、このままここに居たら迷惑がかかつてしまつ。）

「俺は反対だ！」

ヨウヤ・シヨックから立ち直つたのか、フィオーラが喫きだす。

「べつに兄様に反対されようが、私は行くわ。」

元から、反対されるのは予測の内だ。

そのままツンとソッポを向けばジイーラが目に入った。
そして思いつきり顔をしかめる。

（「コイツ、気に食わないわ。）

気まぐれで首を突っ込んでは、ひっくり回す。

しかも自分の利益、不利益は全く関係なく。

腹に何かを据えているようで、全くその真意をあらわにしない。

そして

助けるふりをして、本当は助けようなんてしていない。

だから嫌いだ。

「行くつて言つてもどうやって潜入するんだい？」

「私は使用人として入るつと思つていんるだけだ、どう？」

「どう？と聞かれて……」

輝いた目をした私に話しき振られたハーレイはとても困つてゐる。

「だつて貴方、王子様じゃない？」

それを言われた彼は困つてゐる。

何をそんなに渋る必要があるのか、私には分かりかねない。確かに兄、フイオーラが渋るのは分かるが。

「俺を置いて話しき進めるな。」

そこでふて腐れたフイオーラの呴き。

一瞬にして空気が軽くなつた。

嫌いなものは…（後書き）

モニカはビジィーラが嫌いな様子。けど、嫌いとは少しづがいます。

今回でやっとサイトと同じ所まで追いつきました。
今度からは同時進行でければな、と思つておつます。

触れ合い（前書き）

サブキャラ数人登場

です。

触れ合い

あれから10日経ち。
一ヶ月がたつた。

今私は王宮の一角にある室内で支度をしていた。
一般人には少し豪華で、金持ちは少し物足りない、そんな部屋だ。
(別にこんなに綺麗な部屋を使わなくてもよかつたのに)

思い出しだけでもため息が出る。
自分の兄の強引さには。

そう。

私は王宮に行く宣言をした後、すぐにベルシアを起つた。

しかし王宮をれど王宮。

入り込むには身分証明がいるし、使用人となりたければそれなりの
身分もいる。

それを、兄はツテで私を王宮に招き入れてしまつたのだ。
まったく、これじゃあ頭を抱えてしまつ。

ため息をまた一つ。

なんだか近頃頭を悩ませることが多い。

どれもこれも兄様のせいだわ、と責任転嫁をしつつも身支度を終えた私は余裕を持って部屋を出た。

私の王宮内いのでの仕事は侍女だ。

侍女とは自分の働く場所が自分の位のいのようなものだ。
例えば厨房と洗濯。

どちらの仕事が上かというと厨房での仕事の方が上だ。
もちろん厨房には専用のコックがいる。だがそこに立ち入ることが
できるのは「ックとその料理人、そしてそれ専用の侍女だ。
料理とは宿舎泊りの兵士から貴族、王族が口にするも。だからこそ
信用されている者にしか携わることができないということなのだ。
掃除にもいろいろある。

公共の場では下の位、すなわち下しもの侍女じめいが使われ、貴族の屯す場たむらには中の侍女。

そしてその上有じょうにあるのが上の侍女。だがそれはいくわざか限られた
者にしかれない。なぜなら王族付きの侍女ということになるのだから。

私は中の侍女。だがこれにはまだ細かく分割された身分があるのだ。
それは正侍女と民家侍女。

正確にいえばこれを口に出す者はほとんどいない。いや、いるが、
これを口に出す者は、分別が付かない馬鹿ばらけだと私は思っている。
正侍女とは家柄が良いか、貴族でないとなれないのだ。それと比べ
民家侍女とは、その名の通り一般の者がなる侍女のことだ。よっぽ
どの賄賂や大層な功績を残さない限り、正侍女になることは難しい。

(生まれで、自分の将来が決まってたまるかつてのよ。

……あ～嫌なこと考えた。）

とやけで廊下の向こう側からやつて来る人影が見えた。

「あ～っ！モニカさん、今から仕事ですか？」

そう気をくに声を掛けてくれたのは第3王子付きの侍女マルーシャだつた。

「え、ええ、そうです。マルーシャさんも一仕事終えて、移動中ですか？」

もしよければお手伝いします、そう言つたのだが、大丈夫よ、とやんわり断られた。

彼女は一応、上の侍女になるのだが、出が一般家庭なので正侍女にはなれず民家侍女のままなのだと。

だが上の侍女のなかでは親しみやすく、気さくに話しかけてくれる。

私は中の侍女なのだが正侍女なので後輩、先輩、同僚共に特別視されていた。

なので彼女のような態度はとても嬉しかつたのだ。

「そうですか。また何かあれば何でも言つてくださいね。そう言えば、……王子は、いえ、王子様は寝起きが大変だとお聞きしますが大丈夫ですか？」

このことは王宮に遣えるようになり、初めて聞いた話しだ。

「始めは大変だつたのだけれど、段々慣れてきましたようだわ。

「 そう言い、苦笑するマルーシャもんはビリとなく懐かしそつだ。
彼女もいろいろ苦労していたのだな。」

その後、彼女は次の仕事があるから、と洗濯物を持ち慌てて駆けて行つた。

（私も次の仕事しなきゃね。）

「 うわあ！」

そう思い振り替えたとたん、声と共に衝撃があつた。
なんとか持ちこたえ転倒しなかつたものの、瞬時に何があつたのかはわからなかつた。

衝撃に反射的に閉じていた目を開ける。
だが私の目の前には、これといった物が無かつた。
それに驚き目を見開くが、目線の下に向かうずくまつっていた。

「 ……えつ？」

「 ……つ……」

その何かは小さな男の子だといふことはすぐわかつた。

「 『めんなさい。大丈夫、……ではなさそづね。』

ちよつと待つてね、そう言い手に持つていた物を通路の脇に除けた。

「 なにをするんだ！」

「 あら、開口一番にそれはダメよ。そんなんじゃ女の子に嫌われち

やうわ。」

「向でお前にそんな心配されなきやならない。」

(確かにその通りなんだだけ)

「……の? 逃げなくて?」

じゅうに向かってぐる気配が複数あることに気付いた私は、彼にそいつを叫んだ。

途端に彼の顔はポカーンとなる。

それもそうだろつ。

突然ぶつかつた相手に、いきなり女子に嫌われるどりいづられたり挙げ句。自分が何かから逃げてることを示唆されたのだから。

「ほら、早くしないと追いつかれちやうわよ。はい、立つて。ここに入ってるといいわ。オネーサンがなんとかしてあげるから。」

そう叫んで私が指したのは、使われてない一つの部屋だつた。

「すみません。」

「はー。向でしょいづ。」

私に声を掛けってきたのはやけに容姿の整つた男性2人だつた。

一人は紫紺色の長髪を後で一つに括られていており、黒色の瞳をしていた。中性的な顔立ちの男性だろうか。着ている服は文官のような出で立ちだ。

そしてもう一人は、赤髪に緑の瞳だ。緑の瞳をしているせいか、少し親近感が湧いた。

服装はTシャツにパンツといつ、動きやすさを重視したものだつたが、むさ苦しくは無くむしろ気品を感じさせられた。服の上からでも分かる程よい筋肉は、ここに他の侍女がいたら黄色い悲鳴が飛んだであろうと思われる。

「ひかり、このくらいの小さな男の子は来ませんでしたか？」

「丁寧に、身丈までもを手で示してくれる。

そんな文官の男性に申し訳ないと同時に、内心舌を出した。

「男の子、ですか？侍女のわたくしにはあまり縁の無いお話ですね。

ですが、先程見かけましたわ。その先の廊下を右に曲がり、駆けて行きましたけど。

何やら切羽詰まっていた様子でしたので、少し御容赦して差し上げてくださいな。」

勿論これは出鱈目だ。

「丁寧にありがとうございました。仕事中引き止めてしまいね。だが助かつたよ。

よかつたら、名前をお教えてくれない？」

こちらは赤髪の男性の方だ。そんな格好をしてるので、騎士だとは思う。

が、荒っぽさを感じさせない身のこなしと言葉遣いをみれば女たらシだと分かる。

「いいえ。

どうつてことあつませんわ。困つた時はお互い様ですもの。ですが私は一介の侍女ですので御容赦を。」

名前を聞かれては後先後悔しそうだ。

私は無難な方法で切り抜けようとする。

「そうか。それは残念だ。

けど、次に会つた時には是非教えてね。」

（しつこいわね。）

割と丁寧な物言いなのだが、なにせしつこいのだ。

少しの間渋つたものの念を押され、仕方無しに頷いた。

それに満足げに微笑むと、文官を引き連れて私の言つた右を曲がり、消えて行つた。

それをしつかりと目で確かめて、私は一息ついた。

しつこい男は嫌いだ。

仕方ないわね、と口の中であき、荷物を持つて彼らとは真逆の方向へと進み出した。

その様子を物陰から伺つていた二人。

私が自分達が元来た方へと歩んでゆくのを見て、彼女を影から覗き見るのを止めた。

「シオン、だから彼女は白だと言つただろう。なんでも疑うのは止めろ。」

自分と同じように彼女を覗き見ていた男、シルガーが口を開いて自分に呆れを含んだ物言いをしてきた。

「まだ白と決まつたわけじゃない。」

それにもしても、俺達は殿下の命を受けて王子の教育係をしているのに、王子は相変わらず脱走するし、困ったものだな。」

「わたし。」

「。」

「ワタシ。」

「。」

「俺、ではなく、私、です。」

幾度となく言葉遣いを訂正していくシルガーに渋々口を開いた。

「わたし。」

「そうです。良く出来ました。」

「どこか子供に言い聞かせるような口調に嫌気がさした。
昔つからじつこうヤツだった。」

「そんなことばかり言つていいのか。今夜が楽しみだな？」

不適に笑つて言つてやつた。
が、近くを歩いていた侍女が見てあらぬ疑いをかけられたことは全く本人の知らないところだ。
不適にも見える笑いは、妖艶な艶やかさを感じさせるモノとも見て取れたようだ。

会話でさえ誤解を招くものだつたとは本人も気付いていなかつた。
たいていシオンがシルガーにこんなことを言つてくる時は、腹いせのためにシルガーの寝室に女を勝手に待らす時だ。

そのことを長年の付き合いで理解しているあたり、ため息を吐き出したい気分だつた。

そんなことをシルガーが考へているとは露ほど知らず、シオンは先程の少女を思い返す。

前髪が邪魔をしてよくは見えなかつたが、整つた顔立ちだったよに思つ。

髪の色も綺麗な黒だつた。

だが、近くを通り過ぎる瞬間、仄かに薰つた匂いを思い返せば眉をしかめる。

あれは髪染め粉の匂いだ。

女性とよく触れ合う機会が、この上なく多いので良く分かる。

娼館に通うと顧客の要望に応えるために、髪を染める女性は多々いるのだ。

安物であれば、1ヶ月以上は普通に匂いが付いてまわる。

だが良質の物は1ヶ月もあれば大分消え、匂いは薄れていくのだ。

彼女は常人ならば普通に薰らない程度の残り香のような物だつた。だが、近衛の並外れた五感を持つてゐるシオンには分かつたのだ。

それに、染めているならば普通はあんなにも綺麗に色が出ることはありません。

なぜならばこの国、アラインダ国の人間は色素が濃い者が主なのだ。だが、彼女の髪の色素がもし淡泊なのであれば、綺麗な色彩が出るのも頷ける。

では何故容姿を変える必要があつたか……

そこまで考え、シオンは報告をするべきか考えた。主に。だが、ただでさえ忙しい主の手を煩わせたくない。

なので独自調査をしてから報告しようとい、そう考えシルガーと共に王子を探すべく身を翻した。

触れ合い（後書き）

皆様お久しぶりです。

次の更新も間が開きそうですが、頑張ります。

初登場のシオン君、意外に腹の中黒いです。

抜け目のない男ですね

それに比ベシルガーさん、ある意味被害者です（笑）
ですが侮れません

それからとこりうもの、私は王子と会う機会がかくだんに増えた。

それは意図的に、といつても過言ではない。
私から、と言う訳ではない。

行く先々に王子が出没するのだ。
だから私は首を捻る。

（わたし、怨まれるようなことしたかしら？）

王子と私は今、書庫にいた。

私は女官長に許可を取り、王宮に入つてからとこりうもの、ここに出て
入りしていた。

そのことを知つてるのは許可してくれた女官長と幹部である女官
の数人だけ。

女官とは侍女の上の上にある特別な管理職のことだ。
それはごく数人しかなれない。

何故数人なのか、と言うと身分に關係なくなれる代わりに、それな
りの実力が伴つていなければ成ることは叶わない。

箱入り娘だつたり、どこぞの権力を駆使して入つた輩などは以つて
の外。簡単には成れない役職なのだ。

並大抵のことではなることのできぬ仕事。

その代わりとは言つてはなんだが、優に10年は苦労しないだけの
給与が払われる。

なので平民でもなれるが故、血の滲むよつた努力をしてきた者が多い。

「 ナニを読んでいるんだ? 」

物思いに耽っていた私は、かけられた言葉に意識を戻した。

「 ああ、これですか? 『精靈戦争論考』です。王子も読んで御覧になられますか? 」

「 僕は、遠慮しどく。 」

私に会わされた田線を氣まずげに反らすその様子に首を捻る。

「 どうかしたんですか? 」

そう聞いてみたは良いが、相手から答えは返つてこず、視線は反らされたまま。

ずいぶん前までは威勢がよかつたのにどうしたとか。

私はそれを少し淋しく思つ。

書庫に沈黙が満ちる。

今日はこれくらいにしてひと立ち上がり立つたところで、真つ正面に座っていた王子が眠りこなしてゐることに気づく。

「あ、眠かったのね。」

しかし季節の移り変わりの時期にこんな所で居眠りしていると風邪を引きかねない。

困ったわね、と思案していると背後に気配がした。
見知った気配に振り返ると、そこには見知った顔があった。
見知った、と言つても一度会つたつりの関係だ。

赤髪に隠れた瞳が鋭利な輝きを見せる。

一応挨拶はするべきかしら?と考へたが、結局口を開くことはなかった。

シオンは瞳を隠すように伏せていた頭を上げ、一いちらを見る。
だがその瞳には先程の鋭い光りはなかった。

私は、内心舌を巻いた。

瞬時にその瞳は敵意を隠してしまつたのだ。

「これはこれは、先日御見かけした侍女殿ではありませんか。」

わざとらじい言葉。

「これは奇遇ですね。」

「どうしていらっしゃる?」

「あら、私もお聞きしたいですわ。」

「こ」は書庫だ。

それもあまり人の寄り付かない。
そして偏見になるが、彼のよつた騎士の職につく者は滅多に近寄らない。

「いや、ただ本を調べ」。

「やうですか。けれど調べ物でしたら図書館の方が最適ですよ?」

「少くとも微笑みながら言つたが、笑つてゐるのをだけだと十分理解してゐる。

王宮にはとつもなく大きな図書館がある。各国のひとや地方の気候を記した書物。もちろん歴史書なども数多くある。
ならば調べ物は、そちらの方が最適なはず。

「やうでもないですよ。しかし、貴女の名をお答え下さるといつ約束は守つて下せますよね?」

「その似合わない口調、どうにかして下せらな?」

名を再び尋ねられたことへの苛立ちが、私のそれを言わす引き金となつた。

「でしたら貴女もやめてくれません? 同等の匂いがするからね。正直めんどくさかつた。」

口調が途中から変わつた。

そして、そう言つた彼の瞳には再びあの光が宿つていた。

「 ちゅうどいいわ。私も面倒臭かつたから。」

はつきり言つて、敵意を向けてくる相手に敬語を使うのは癪だつたのだ。

「 。」

「 。」

「それで、どうしてここにいるんだ。」

沈黙の後、意外にも先に口を開いたのはシオンだった。

「貴方こそがどうして。」

どちらも譲らない。

否、譲れない。

私は先に口を割るつもりはさらさらない。

「 なら質問を変えるよ。」

それは、

そこで寝ている少年が誰であるか、知つているのか。あるいは、その子の口から何かそれらしきモノを聞いたか。

とこゝもの。

私は迷わず首を振った。

あの子は、一切自分のことは話さない。

私が王子、と呼んでいるのは“あくまで推測”だ。

私が首をゆるゆるのを確認して、シオンは王子を肩に担ぎ上げた。
米俵のよっこ。

あえて指摘したりはしない。

男同士でお姫様抱っこをされても困るからだ。
リアクション
に。

「 邪魔したね。」

私の方をチラリと一瞥したきり、シオンは振り返ることなく扉を潜り、書庫を出ていった。

その彼が、扉を閉める直前。

私はボソッと漏らした。

その子の弱やもぢやんと見つめあげて、と。

その言葉が、彼の耳に届いたかどうかは定かではない。

そして扉は閉められた。

沈黙の戻った書庫で、私は一人呟いた。

「 強い面ばかりを求められれば、あの子はいつか壊れてしま
うわ。」

相手がその弱さを知つていいだけではいけないのだ。
大切なのは、見つめてあげること。

手は貸さず、見守ること。

手を貸すことは、いけないことではない。
だが、その貸方かしがた、度合いを間違つくるいならば、貸さなくていい。

（私はそう思つから ）

視点がシオンに変わります。
少しですが

王子の私室に着いた頃。

よつやくシオンが足を止めた。

先ほど会った彼女の言葉が耳に残つてゐる。
けつして大きな声ではなかつた。

そして、独り言のような声だつた。

「その子の弱さもひやんと見つめてあげて。」と。

あれは、どうこつ意味だつたのだらう。

そして、思い返す。

彼女の事を。

自分が探していた小さな王子は、書庫の机に突つ伏して眠つていた。
初めは、向かい側に座つていた彼女が何かをしたのではと、一瞬ヒ
ヤツとした。

が、直ぐにそれは思い違ひだと理解することになつた。

書物を真剣に、だが、どことなく楽しそうに読んでいた彼女。
だがフと顔を持ち上げ、立ち上がる。

翡翠のような、淡い瞳に目の前で眠つてゐる王子が映し出された。
瞳の色は、どこか冷たい冷めたような印象を持たせるそれだつたが、

目の前の人物が眠っていると知ると瞳が和らいた。

「あら、眠かったのね。」

聞き間違いでなければ、彼女はそう言った。

そして何故か、困ったような表情をしているものなので、シオンは部屋に一歩踏み出したのだった。

そういえば、尋常じやない五感を持つている。でなければ第六感だらう。

書庫に足を踏み込んだだけでラシオンが入ってきたことに気がついたのだ。

では、外にいた時は気づかれなかつたのだろう。

まるで、テリトリーを張つているかのようだ。

ますます怪しい。

そう思えてならない。

視点戻ります。

「あ～あ～あ、完璧壊こまれてるわねー。」

「あ～びしきしょ、と書ひよひ、口手を並べて私は書つた。
それを聞き付け、グレファーもとレファーが、首筋の髪の影から
ヒョーリと顔を覗かせた。

「その言い方、まるで傍観者の台詞だわ。私が言いたくらうよ。
まあ、いいじゃない。傍観したくなることもあるのよ。」

自分の事でもね、と付け加える。

「貴女は傍観しそぎよ。」

レファーの言葉に、まあね、と笑いながら返すと呆れられた。

「それより、私が書庫に籠つてて、何處に行つてるの?毎回よ
ね?」

「ん?ああ、あれのこと?まあ、社会見学つてことで多めに見て。

「妖精、いや、精霊に社会見学もクソもないと思つ。
あえて口にはしないが。

「それより、どうするの?あのホルモン撒き散らし男、貴女のこと
探つてるわ。」

再び口を開いたレフラーの言葉に、聞き慣れないものがあった。

「ホルモン撒き散らし男?」

「あの、色香を振り撒く騎士のことよ。」

「もしかして、赤髪の騎士の人の事を言つてこらの?..」

「わうよ。それ以外に誰が居るって言つての?..」

「あまり良い、ネーミングセンスでわないわね。せめて“歩く公害”、辺りにしどかないと、品位を疑われるわ。」

「 実際、品位とかそんなもの、これっぽっちも考へてないでしょー?それに、“歩く公害”ってのも十分酷いわよ。」

私はその言葉にさうね、と笑い、ただ苦笑した。

それは中庭でのことだった。

貴族の室内にあつた「ミ」を焼却炉に持つて行つてゐる途中。

木の下に、誰かを見つけた。

影になつており、分かりにくく、俯いてるので顔は分からぬ。

だが、田も覚めるような鮮やかな赤だけははつきりと見えた。

赤い髪と言えば、あの騎士しか思い浮かばない。

けれど、身長かしても、雰囲気からしてもどちらとも当て嵌まらない。

おかしいわね、と思いつつ足を進めると、申し訳程度の声が聞こえた。

近づけていた足がピタリと止まる。

そして、また再び動き出す。

「 世の中、人間は人の足元を見るヤツばかりだ 」

「 あなたは? 貴方はそうではないでしょ? 」

思わず、口を挟んでしまつた。普段なら有り得ないのに。強い自己犠牲の念に、私は顔をしかめた。

赤髪の少年は、突然表れた私にビックリして固まっている。
それもそのはず。

この場所は滅多と人が通ることはないのだから。

私は少年の元までコックリと足を進めた。

その間も、少年は動く気配はない。

否、動けなかつたのだ。

突然表れた少女。

そして言われた言葉。

どちらも予想外だつたのだつ。

「そんなに辛氣臭い顔してると、善いことなんて何も起きないわよ。
嘆くだけじゃ何も変わらないわ
はないけれどね。」

そして少年が口を開く。

だが、そこから言葉が出てくることは無く、ただ返つてくるのは頼
りなさげな瞳がけだ。

何度も口を開閉したが、結局言葉が出てくる事はなかつた。

そして私は、ただ少年を見つめ返すだけだ。

少年が痺れを切らし、こちらに動いたとした時。
どこからともなく悲鳴が上がつた。

何事かと思い、私も少年も辺りを見、出所を探そうと視線をさ迷わ

せた。

すると小15人ほどの、柄の悪そうな男が武器を持ってこちらに駆けてくるではないか。

手には何かの袋だろうか。
リーダーらしき男以外は、全て皆金田になりそうな物を持っていた。
だが、先頭切つて走つて来るリーダー（定着）は、生地は良いが小さな袋だけだ。

（何かしらあれ？）

そう疑問に思い視線を向けていると、なんとこちらに走つて来るのはないか。

（あらら、何だか面倒臭い事に巻き込まれそうな予感）

そして男達は一人に気がついた。

「おい、女がいるぞ。」

「調度いい。連れて行くか。」

勿論私の隣に居る少年には目もくれない。

少年一人、たいしたことないと思つていいのか。それとも、本当に気がついていないだけなのか。
どちらにしろ無い物として扱われている。

「あらいやだ。」

口を手で隠し、わざとさりげなく聞こえる聲音を発した。

小声で、呟き程度だったそれ。けれど少年の耳にはしっかりと聞こえていたようだ。

アラインダ国は、こんな不屈き者の侵入を許してしまつほど、警備が手薄だと詫つたのだろうか。
いや、そんな事は無いはずだ。
何故なら腕の利く者が沢山居るからだ。

ならば可能性が大きいのは初めから内部にいた、考えるのが妥当だ
ら、

陰へと消えた彼女へ（前書き）

視点があやふやに
すみません。

赤髪青年の方ぽいです。

陰へと消えた彼女へ

「 んな野蛮な奴らの言ひ方なんて聞くわけないじゃない。」

ボソッと私はそう漏らした声は以外とハツキリ聞こえた。

まさか城内にまでこんな言葉を吐くやからが居るなんて思わなかつた。

いつも類いの者は十中八九卑劣なことしか考えていない。

だが、他の者の瞳が鈍よりと濁っている中、先頭を行く男のそれだけは濁つていなかつた。

比較するものがあるからこそ、それは一目瞭然だ。

人の心は瞳に現れる。

良く耳にする言葉だ。

「ねえ。」

反応は

ない。

「ねえ。」

「 ?

「あ～もつ。貴方のことよ。」

“貴方”の所を特に強調していった。

指された本人はビックリしている。

「先頭の人以外になら手を出していいから。どうにかしましょ。」

すっかり戦闘意欲丸出しだった彼に。

その言葉がよっぽど以外だったのだろう。

当然だ。

私は女性であつて騎士ではない。それは外見で見ての通り。

しかし私の発した言葉は、彼に頑張つて、とホールを送るものではなく、指示を出し、同じように戦闘意欲を剥き出していた。嘘ではない証拠に、瞳に彼等に対する敵意が剥き出しにされていた。

「まさか、あいつらを相手にするつもりですか！？」

「あら、そう聞こえなかつた？」

疑問を疑問で返す私。

「いえ。そう聞こえたから尋ねているんです。女性なら、普通身を隠すことを優先しますよ。」

普通の女性のような行動をしない私を前に、青年は敬語になつてしまつ。

「普通の女性、ならね。」

質問の問い合わせに答えた私の表情は、どこか憐れで、陰をまとっていた。

「それより、貴方は右側をね。私左するから。ほら、直ぐそこよ。」

質問よりも辺りに気を配っていた私は、その言葉を言い切るか切らなかの内に走り出していた。

「あつ！…ちよつと

」

「待つて」口にしようとしていた彼は、口を閉じるしかなかつた。チツ、と短く舌打ちをすると、自分から見えにくい死角から襲つてきた剣を避け、相手の手首に手刀を落とす。

そして人体の急所である鳩尾に容赦なく拳を叩き込む。

「ぐつ！」と、くもぐつた声を出して男は地に倒れた。

しかし彼は、最期までそれを見届けることなく次へと向かつた。そして、蹴りを入れて何人かを地に沈めた所で、遠くを走り去る人影に気が付いた。

その正体は、私が手を出すな。と暗に言つた、先頭を行つていた男。それに気付いた青年は、それほど離れていない場所で男達の相手をしていた私に初めて顔を向けた。

すると偶然なのか、必然なのか。私が調度青年に顔を向けたのとは同時だつた。

そしてもう遠くなつた人影に目線を向け、私は首を振つた。

それは追うな、と言うことなのか、諦める、と言つことなのか。青年には分からなかつたのだろう。

だが、一つ頷きまた男の相手を始めた様子を見れば、追うことだ

けは辞めたことが分かる。

そして、最期の一人を地に沈めたのはどちらが先だったか。それを確かめる前に、前方から駆け寄つてくる人だかりを一人は確認した。

「来るのが遅いのよ。」

誰に悪態をつくでもなく、私はため息を零した。

そして重要なことに今気付いた、といつ風に慌て、青年に一喝した。

「「」とは内密にしてね。」

自身を指差しながら、私は口早にまくし立てた。

そして私は木陰に放置してあつた「」を手に、木々の合間を縫つて駆け出した。

青年が口を開いた時には、時既に遅し。
私の姿はそこには無かつた。

嵐は唐突に

あの日以来、侍女達は落ち着きなくソワソワしている。それは城に不逞なやからが持ち込んだ不安もあるのだらう。だが、城を巡回する者が変わつたり、警備隊の配置の総入れ替えなどが余計に不安感を搔き立てているのだ。

そして極めつけは、その不逞なやからと一人で対峙したと噂される、目身麗しい赤髪の騎士。

仕事仲間のマルーシャさんによると、彼はそのことを否定も肯定もしていない、だそうだ。

その謙虚さがたまらない、などと叫つフアンが続出。そして今に至るのだそうだ。

（別に肯定しても良かつたんぢやないかしら。）

何故なら、私も手を出したが、彼も戦つたのだから。

（まつ、そういう所が実際謙虚なんだろ？）

そんな人事のような事を考えながら歩いていると。噂をすれば何とやら。

前方から赤い髪が際立つて見えた。

一瞬、引き返すという選択肢が頭に浮かんだが、相手はこちりに気が付いていないようだつた事もあり、そのまま進む事にした。

もちろん、顔を俯ける事も忘れずに。

これならば勇姿を褒めたたえられた彼を前に、少し恥じらいながら横を通り抜ける少女。と言つた所か。

しかし、物事は上手く行かないものだ。

後に、何故隣に並んで歩いていた人影に、気付かなかつたのかと、
問い合わせたくなる。

「やあ、今日は非番かい？」

耳元で聞こえた声に身体が戦慄した。
せんりつ せんじやく

「 つ～！ 」

耳を押さへ、顔を俯ける」とも忘れて勢い良く振り返れば。声の主
が、いけしゃあしゃあと微笑みを浮かべて、こじりを見ていた。

「 ひ、何すんのよ～？」

「 何つて、挨拶だよ。 」

赤髪の青年の事など、頭の中から綺麗にすつ飛んだ。
そしてその変わりに、歩く公害。もとい赤髪の騎士がそこに居た。

あつとこの笑顔の下には、悪魔的な黒い笑みを浮かべている。など

と、勝手な確信を持つてそう思った。

「こんなのが挨拶なものですかー貴方の頭、沸いてるんじやなくて
もつ表面を取り繕つことにすら忘れ、応戦していた。

もつ表面を取り繕つことにすら忘れ、応戦していた。

「ああ。はじめの挨拶が良かつたんだね。なら期待に応えるしかないな。」

そう言つや否や、唇を塞がれているのに気が付いたのは3秒後。

「（）馳走様。」

そう言つた彼を思い付く限りの言葉で愚弄してやりたい、と思ひながらも、グッと口を噤んで、そして一言言つた。

「沸いていたんじやなくて、溶けていたようね、あなたの脳ミソ。」

そのままフンシと顔を背け。そこを後にする。肩を怒らせながら。

後に廊下の巡回をしていた騎士団員が言つた。廊下で鬼を見た、と。

嵐は唐突に（後書き）

モニカが災難としかいいようのない
本当に唐突に来た嵐（タイトル参照）でした。

始まりの音

「うつしても腹の虫がおそれなくて野外に出た。すると、どこから来たのかレフラーが飛んできた。

一体今まで何処に居たのだろう。あれ以来、夜には私の元に帰つてくるものの、昼間はほとんどと言つていいくほど居ないのだ。それは彼女自身が言つた社長見学、とやらをしてくるらしいが、私はあまり信じていなかつた。

「モニカ、どうしたの? 何かあつたわけ?」

第一声から物を射た物言いだ。

そんな顔して、と言われば条件反射のように今まで以上に顔が歪むのは仕方ないと思つ。

「何も。何もないわよ。」

何もない、と言つ割にその口調はそこはかとなく苛立つている。それを聞いて、小さなレフラーは私と同等のまで飛び田線を呑わせる。

私はと詰つと、真つ正面から面と向かつて見つめられ、たじろぐ。

「なに、してるの。」

それも間近で。

「モニカ、嘘ついてるでしょ。田を見ればわかるんだからー。」

突然そう言つたレフラーには驚かされた。

間近でガン見されていたのは、こいつの訳だったと知り、驚かずにはいられない。

軽く目を見張る私に比べ、対するレフラーは少し頬を膨らませている。

「話して、とまでは言わないわよ。だけビームかすことだけはやめてよね。」

「いい？」と念を押されれば、頷くしかなかった。

「何があつたのか話して！」と言われるかもしない、と何処かで思っていたのは否定できない。

「どうして何も聞かないの？」

気が付いたらそのまま口元していた。

「聞かないわよ。話しづらうことなんでしょう。話してくれるまで待ってる、だなんて大層なことはしないから。だから、吐き出したい時は、誰かに聞いて欲しい時だけ言つてくれたらいいわ。言わない、と貴女が決めた物だけ胸に仕舞つておいて。私が言いたいのはこれくらいよ。」

何故だかレフラーの背中が小さく見えた。
強気な発言。なのに、ビートなく力無く。

ただ、自分のせいでレフラーにそんな顔をさせていることだけは分かつた。

「『』めんね。」

これは何に対する謝罪なのか。私には分からなかつた。

あれからレファーと会話をしていない。
いや、正確にはいつものような会話をしていない、と言つことだ。
今は単語で話しているようなものだ。

では、どうすれば元の様に戻れるのか。それが私の悩みだつた。

そして頭の中にはシオンにされたこと。そしてあの時隣には、赤髪の青年が居たと言つ事など微塵も頭には残つていなかつた。

「モニカ、手紙が届いているわよ。」

そう言つたのは誰だつたか。

なかなか取りに来ない私に渋つたのか、隣に居たマルーシャが代わりに手紙を持ってくれた。

「どうしたの？ 気もそぞろうね。」

「はい、これ。」と手紙を差出ながら、マルーシャが口を出した。

「 あ、ありがとうござます。」

反応もワンテンポ遅れている。

「誰かと喧嘩した？ なら、あまり良いアドバイスをしてあげられないわね。」

一か八か、彼女に相談してみる。と言つ選択肢が頭には浮かんだが、マルーシャは、確かにアドバイスをしてあげられない、と言つた。

何故喧嘩した事が分かつたのか。そして相談しようかと悩んでいた事を知つているのか。疑問はかなりある。

その疑問が口を突いて出る前に、マルーシャが口を開いた。

「けどね、疑問をぶつけてみるのもいいわよ。」

「え？」

「貴女は今さつき、私に疑問を持つたでしょ？」

「違うっ？」と聞かれれば頷くしかない。

「そんな感じに、喧嘩した相手にもぶつけるの。よっぽど不利人な質問でなければ、相手は答てくれるはずよ。」

「疑問を？」

「そう。分からなければいいの。聞かない、人の思いは知ることとはできないわ。」

ストンと心にその言葉が入つて來た。
一気に自分の視野が広まつた感じだ。

「なんだか納得です。」

「でしょ、まあ、これはある人の受け売りなんだけどね。」

普段の仕事熱心な彼女からは、想像もできないような笑みだつた。
悪戯が成功した時のようなそれ。例えるならばそうだ。

「それはそうと、もうそろそろ敬語、止めない？」

悪戯っ子のようなそれに、私は思わず笑つてしまつた。

「そうね。じゃあ、改めましてこれからも宜しくね、マルーシャ。」

「宜しくね、モニカ。」

私は、清々しい気持ちでその場から駆出す。

目指すはレファーの所。

もう迷いのない私は、振り返ることなくその場をさる。

瞬間、一気に風邪が吹いた。寒い季節の予感を知らせて来るような
それに、マルーシャはひつそりと笑みを作つた。

もうすぐ冬だ。

雪が積もり、この世界を真っ白に塗り替える季節。

「あれから、もうすぐ2年になるかしらね。」

誰も居ない廊下に、彼女の言葉がやけに響いた。
だが、それを耳にする者はいない。

それを冷たい風だけが、言葉を何処かに運んで行つた。

さあ冬の始まり。

季節を変え、人を優しく見守つている。

どこかで始まりを知らせる音がした。

始まりの音（後書き）

もういい加減メインキャラが揃つてきたことなので、そろそろ本題に入らうかな、と思つております。

第3章からはしつかり頑張ります。

漏れ出す事実（前書き）

ここからは第3章です。

漏れ出す事実

明け方に少し開けた窓の隙間。そこから寒気が音も無く入りこみ、じわじわと室内の温度を下げる。

私は、冷えた体にグルリとショールを巻き付けると、床に足を付けた。

なぜだかこの季節に入つてから、あまり夢見が良くない。悪夢を見る、などとそんな物ではない、と思うが。何かを夢で見て、目が覚めるのだ。

そしてこの季節は室内の空気が滞つてしまいがちで、私は気分が滅入る。

寒いのと、気分のどちらを取るかと言われば気分だ。
なら夜間ではなく昼間換気をすればいいのでは、と思うが、昼間は仕事に出ている。なので、自室を無防備に開けるところとは嫌だつた。

「散歩でもしようかしら。」

思いつきに口にした言葉。
それが妙にしつくりした。
部屋に籠っているのは嫌だ。

ならば早い方が良い、と思い立つたら行動だ。

自分の足音が反響する音。

ほとんどと言つていいほどそれしか聞こえない。

あと、聞こえる物と言つたら、風が葉を揺らす音ぐらうこと言つたところだ。

「これは下手したら私、夢遊病者が徘徊しているだなんて思われそうね。 あながち間違つていなかかもしないけど。」

だつて夢見が悪く、宛もなく歩き回つてゐるのだ。違こと言へば、意識がしつかりしているくらい。

空を見上げれば、先ほどよりは僅かに明るくなつてゐる。

（そろそろ夜が明けるか。）

このままここに居る訳にはいかない。

見回りの者に気をつけながら歩つてはいたが、夜が明ければ騎士の者達がどつと増える。

変なところで疑われかねない。

今私のにがしなければならぬことは、目立たないで顔を覚えられないようになりますこと。

その上で安全を確保しなければならない。

足早に廊下を通り抜ける。

もうそろそろレファーが帰つてきてゐるかもしない。

問いただされる前に戻らないと。

（見つかれば説教物ね。）

レファーが頬を上氣させて怒つてくる姿が容易に想像でき、思わず笑いを噛み締める。

次いで想像してしまつた事があまりにも笑えなくて、顔からは笑いが消える。

何となしに、レファーが妖精の姿から精靈に代わつて説教をされた事はないな、と考えたのだ。小言で済めばいいが、レファーが力を奮つたらと、ぞつとする。

自分の身は他者にバレない程度に守れるからいい。だが、建物はどうだろうか。私の見立てでは、この華奢で纖細な装飾の施された富は精靈の力に、威圧に堪えられない。

この国に居る国守りが束になれば、精靈の威圧は何とか抑えられるが、力までは取り抑えられない。

そうなれば、私自身の力を解放しなくてはならなくなる。精靈の力を滅除できるのは一級品の奏靈弔者だけだ。

この四面楚歌な中、その力がバレずに使えるだろうか。

（あ～、やだやだ。何でこんなにも、悪い事ばかり思い付く。）

頭を一振りして気分を切り替えようと試みる。

まあこの悪条件の中、マイナスに考えてしまつのは仕方ないとは思うが。

いくらなんでもねえ、と呆れ混じりに息を吐き出す。

それはため息として出て行つた。

足音が前方から聞こえたため、回り道をして帰るひとつ道をそれたがそれもハズレだつた。

人の気配が、また前方からやってきている。

引き返すにしても、先程の通路にはもう無理だ。

先程の通路から向かって来ていたのは、騎士ではないはず。しかし
こちらの通路からは気配しかしない。ならば騎士なのだろう。一般
騎士と言つたところか。

騎士に見つかれば厄介だ。

ならば引き返すべきだろ。

そつ思い立てば、身を翻していた。

そして先程の通路に戻る手前にあつた部屋。私は何の迷いもなく、
そこに足を踏み入れた。

扉から顔を背け座り込み、床に膝を付ける。

何か、何か嫌な予感がする。

気配を消し、念には念を。結界を張つた。

きつとレファーは、私が力を使ったことを感じとつただろ。

一息ついて、軽く深呼吸する。そして扉に向き直り、手を当てる。
耳を当てれば声が聞こえる。

まるで、ベルシアでレファーと盗み聞きをしていた時のよつだ。た
だ違うのはレファーが一緒ではないことと、あの時よりも遙かに緊
迫した状態だということ。

「　　は まだ見つかっていない。だが、　　様は力
を感じたと言つていた。」

「しかし、本当に王宮にいるのか?」

「 様が居ると言つてゐたのだ。間違いないだろ。それとも貴殿はそれを御疑いになられるのか？」

「 まつ、 まわか。 そんなことなかろう。 私の忠誠を疑われるのですか？ それにしても、 ここの事を王には？」

「 言つてはおらぬ。 他の国守りにも、 他言無用だと釘を刺してはいる。 だが一人、 ヌーベル女史が信用ならんがな。 」

「 ああ、 あの。 女のくせに、 我らに口出しする叫めぬまじこ国守りか。 」

「 やつである。 他の女史の国守りのよつて、 口を挟まなければ良いものを。 」

そのまま私には気付かずに、 廊下を曲がつて行つた。 もう声は聞こえない。

だが私は座り込んだまま、 動くことができなかつた。 心臓が、 早鐘を打つよつに早い。 自分の血液の音が聞こえるかのようだ。

「 あの人達、 つー！」

なんて言つた。

「 王前に面ひつて 。。。 」

確かに言つた。

顔から血の気が引いていく。 きっと効果音があつたなら、 サーと音がしていただろう。

(もしかしてバレた！？)

けど、そこまで大きな力は使ってない。

ナゼ

なぜ

何故

内容からして、先程の二人は王宮に居ることを確信しているそぶりだった。

見つかるのも時間の問題だと呟つことだらけ。

見つかれば

そんな考えが頭を横切る。

「　　だめ　　」

「　　ナニが？」

背後から突然声がした。

突然のことでの、ビクリと肩が震えてしまった。顔を見なくても誰だか分かる。

シオンだ。
だからこそ振り返れない。

今振り返つたら、情けない顔を見られる。

返事をしない私を不信に思つたのか、こじらひ歩んでくる返配があつた。

「こないで…」

とつと口を開いて出た言葉。

相手に拒絶を示すそれは、思つたより部屋に響いた。

私の言葉に、彼からの返答はない。

だがそれ以上は近付いてくる気配は無かつた。

これは私の問題。

いくら馬が合わない相手でも、気に食わない相手でも、彼を巻き込むわけにはいかない。

グッと手を握りしめ、今にもブラックアウトしそうになる自身の意識を叱咤する。

ゆつくりと立ち上がり、シオンの影が見えた。そちらの方向に顔を向けないよつに氣をつけながら、私は声を出した。

「何でもないわ。手間とらせてごめんなさいね。」

謝罪の言葉を口にするものの、それは突き放すようで、他人行儀な口調。

今の私には、これしが精一杯だ。

悔しいけれど、これ以上関わらす訳にはいかない。

相手は騎士。

それも、全ての下の者を纏める位にいるのだ。それがシオンの責任。そして役割。

これ以上、彼等に甘える訳にはいかない。
(これは私の問題だもの。)

グッと奥歯を噛み締め、力を抜かないように氣を付けながら、室内から出ようとする。

だがドアノブを回す瞬間。
手を掴まれた。

振り払う気力すら残っていない私は、声を振り絞つて叫ぶ。

「離して。」

だがそれに返答はない。

いつもなら嫌味の一いつや一つ、軽々と口にするはずなのがそれすらもない。

「離して。私、仕事があるから。」

シオンから見れば、きっと私は違和感ありありだろ。

手を掴まれても振り向かず、扉を見たまま言葉を発するのだから。

仕事と、言葉に反応したのか分からぬが、シオンの掴む手の力が弱まつた。

ドアノブを掴んでいない方の手。シオンには掴まれていない方の手で、ドアを開ける。

部屋を出て、手を強く引っ張れば、掴まれていた手はいとも簡単に外すことができた。

「 一応、お礼は言つとくわ。 ありがとう。 けど、もつ私には
関わらないで。 」

「 もう関わる事もないでしきだ 。 」と小さな声で呟いた。
そして息を吸い込み、口に出す。

「 あよひなう。 」

一度も相手の顔を見るることは無かつた。
そして振り向くことさえせず、その場を去る。
向かう先は自分に宛がわれた部屋だ。

たとえ相手がシオンでも、一目見れば相手に縋つてしまいそうになるから。

誰にも会つことなく、無事に部屋にたどり着く事ができた。
明け方、部屋を出た時と何ら変わりはない。
ホツと安心したその時、視界の端が歪んだ。
何だらうと、思い手を当てれば気が付いた。
涙だ。

「 可笑しいわね。 何で今更、涙が出るの。 」

笑えてるつもりだった。

だが、田の前にあつた鏡を見れば情けなくなつた。
弧を描き、笑みの一部を造つてゐるのは口だけ。眉は頬りなさげに
下がつてゐるし、瞳には意欲がなく、光もない。そしてあるのは涙
だけ。

笑う事を諦めて、ベッドに顔を押し当てる。

笑う事を諦めた顔には、いつも簡単に田尻に涙が溢れた。

今だけは

涙を流すトキを下さい

夜になれば

明日になれば

私は強く

前を向くから

その夜。

私は王宮を離れた。

足枷を付けた鳥は、鍵の付けていなかつた鳥がごから外へ。

足枷は鳥の足に。

本当の自由が得られる時はあるのだろうか。

銀色の鳥はいすこへ。

シオン said (前書き)

視点が変わります

「 だめ 」

「 ナニが? 」

咄嗟に声が出てしまった。

少女の肩がビクリ震える。しかしへきらには振り向かない。いつものような破棄も、意欲もない。

心配になつた。

何時ものように余裕なんかは観られない。

彼女の事を怪しいと思うのは、今でも変わらない。

だが別に敵意を持っている訳ではない。

シオンは、そつ思つ自分のことも良く分からなくなつた。

彼女に近づく一步を踏み出していた。ほぼ無意識に。

だが、聞こえた言葉は拒絶。彼女を見れば、震えを無理矢理押し殺しているようにも見えた。何時もは強く見える彼女。一度もこじらを振り返らず、その顔色は伺えない。

わずかな光りでも反射し、自分の色にしてしまえる白銀の髪。その髪からわずかに覗く肌。顔は見えないが、赤みなど全く無く、むしろ青白い肌が見えた。

ゆっくりと彼女が立ち上がる。

それでも「ひらりを振り向かない。

「何でもないわ。手間とらせてごめんなさいね。」

彼女の言つた言葉に、ただ疑問を持つ。
それは謝罪の言葉。

謝られるような事をされた覚えはない。

彼女を追い詰めるのは何か。

見落としているような気がしてならない。

気が付いた時には、彼女のドアノブを回す手を掴んでいた。

それは驚くほど冷たい手だった。

何時からこの部屋に居たのかは分からぬ。だが、長い間外気に包まれていたことは分かる。

「離して。」

咳くくらこの大きさの声。寒さで声が震えているのかと思った。しかし匕首やら違うようだ。

「離して。私、仕事があるから。」

もう一度。深く息を吸い込んで、堅い声が発せられた。

このまま彼女を見失つてはならない気がした。
姿ではなく、彼女の決意を。

騎士であるシオンはあの背中に見覚えがある。

あれは、何かに立ち向かおうとする背だ。

きっと表情は強張っているのだろう。誰かに見られるふとせす、ただ自分だけの足を頼りに立っているのだ。

シオンは手を緩めるしかなかつた。

自分の足で立つことを望んでいる彼女を引き止める訳もなかつた。彼女は掴まれていな方の手でドアを開けると、素早くシオンの中から手を引っこ抜いた。

元々無理強してまで引き留めるつもりはなかつたので、仕方ないと言えば仕方なかつた。

「 一応、お礼は言つとくわ。 ありがとう。 けど、もう私は
関わらないで。 」

そう口にした彼女は、やはりこちらを見ることもしない。斜め後ろから、伺い見ていた口元が僅かな動きをする。しかしそれは言葉としてシオンの元には届かなかつた。

思わず手を伸ばした。届かないと知りながら。そしてその手は彼女に届くことなく空を切つた。

「 さよなら。 」その言葉だけを残して、彼女は明け方の微かな闇に溶け込むかのようにその場から立ち去つた。

伸ばした手で頭をかき、顔を覆つた。

（今日の自分はどうかしている。）

その夜。

一羽の鳥が王宮から去ったのを、シオンはまだ知らない。

銀色の鳥はいざこべ。

明けゆく空を見上げながら私は言った。

「今頃心配してゐるかしら？」

そう。

言つてきてないのだ。王面を抜けることを。そして侍女を辞めたことを。

兄にもハーレイにも、ヴィオラにも一言も告げてはいない。

唯一知つてゐるのは仕事仲間のマルーシヤさんくらいだ。あえて言えば、後田屋敷に届くであろう手紙には私が侍女を辞めたいきさつなどを綴つた物が母達の元に届くはずだ。

そしてそこには、自分を捜すことはしないで欲しいと言つ内容が暗に書いてある。

同じ王宮内に居ながら、相談もなく辞めた事をフィオーラは怒つてゐるかもしねりない。

しかし容易には王子の側近であるフィオーラに近づけなかつたのだ。けれどそれは言い訳にしかならない。近づくにつけずすればできない事も無かつたのだ。

「やつぱりお咎めはあつやつね。」

（ああ、嫌だ。）

フィオーラの説教はねちねちとしつこいのだ。そして的確に核心を

突いてくるので、『まかしようが無いのだ。

思い出しだけでも戦慄してしまひ。

「ねえ、モニカ。」

「ん？」

「何処に向かつてゐるの？」

頭上から聞こえてくる声。

「何處つて れ、レーフああアーーー！」

私のすつきょううな声が辺りに響く。

「 五月蠅いわ。」

そんな私にもグレーファーは冷静に突つ込む。

「何時の間に付いて來てたのよ。だつて私、レフラーが居ない間に
出でたのよ。」

しかも私の頭に乗つかつていただなんて、と落ち込む私を余所にグ
レフラーは飄々と言つてのけた。

「私が気づかないとでも思つた？」「

「わよねー。」

もう呆れるしかない。

いや、気づかなかつた自分もどつかと思つたが 。

「で、何処に行くの？行く当てがあつての行動でしょうね。」

「勿論行く当てはあるわよ。だけど場所が分からないのよね。」

「は？」

「え？」

疑問に疑問を返してしまつた私。

言つなれば、反射的にとでも言つた所だ。

「何で当てはあるのに場所が分からぬのよ。しかも場所が分から
ないのに、何ふらふら出歩いてるの！」

「大丈夫よ。」

呆氣爛々と言つてのけた私に、何が大丈夫なのかと問い合わせるグレ
ファー。

しかし、大丈夫と言つた私の顔は、何か裏のある笑みを作つていた。

「向こうが見つけてくれるの。」

心底楽しそうに、そして何故か意地悪そつに言い切る私に、グレフ
ターは何が大丈夫なのかと問い合わせる。

「見つけてくれるつて何抜かしてんのよ。そんなことあるわけ

」

ザツツ

私の目の前に黒が広がる。

それは黒い人影が舞い降りた。 ためだ。

一瞬後にグレファーは妖精の姿から精霊へと変化した。

「ダレ。 あんた。」

冷たい声が私の隣から聞こえた。

だがそれに答えず影は地に片膝、片肘を付けて顔を俯けている。 尚も黒いフードを深く被つており、私達からは全くと言つて言ひほど顔は伺えない。

それに業を煮やしたのか、グレファーは私より前に出ようとした。

しかし私はそれを手で挺した。
そして口を開く。

「見つかってしまったわね。 案内してくれる？」

少し残念げに放つた言葉に影も気づいたのだろう。
少し困惑げな雰囲気を醸し出していた。

そういえば、とグレファーは思い出した。

私は王宮を出てからと言つもの、人気の無い所ばかりを選んで歩いていたのだ。 それはこの影から逃れるためだったのだろうか？

初めは、影がグレファーの事に物凄く警戒心を持つて接していたが、彼女が戦う戦意を失い物騒な気配を解くと影も警戒を緩めた。

グレファーはこの影が私の言つていた「見つけてくれる相手」だという事は直ぐに分かつたし、私に対する殺意も何も無かつたので妖精の姿に形を潜めた。

「そういうば、場所はまた何処になつたの？　この道を行けば町外れになるはずだけど。」

話掛けた私に影は頷くだけで、出会つた時から一度も声を発していない。

（これは交渉しなければいけないわね。）

その対応に予想はしていたものの、忠実過ぎて呆れるしかない。

「こちら向いて。」

影は私に言われたように後ろを歩いている私の方を向く。

その時に彼女は、影の頭から黒のフードを剥ぎ取った。

身のこなしが軽やかな影が私の手から逃れられないはずもなかつたが、影は甘んじてそれを受けたのだろう。

「これで声を出して話してくれるわよね。」

私のそれは、もはや問い合わせではなく確認だった。

グレファーは相変わらず私の肩の上で傍観を決め込んでおり、我関せずと言つた様子だ。

「ねえ、失礼だと思うのよ。案内人が一言も喋らないだなんて。」

尚も食い下がる私は思つてもいな事を口にする。
彼女にそこまで言わして、影は喋らない訳が無かつた。

「失礼しました。私は党首様より案内を仰せつかっています。」

「分かつたわ。よろしくね。」

そう差し出した私の手を、影は困惑げに手に取つた。

彼女が更なる事を思案しているとは氣づかずに。

(名も名乗れるよつ、頼んでみるかしら。)

私の言つた通り、進んで行つた先は町外れだった。

町の華やかさなどとはかけ離れた郊外。

案内されたのは数件ある内。一軒の古びた、けれど古風で風格のある屋敷だった。

敷地内に踏み入り、玄関をくぐれば床の木材がギシッと音をたてる。しかしそれは私が踏み込んだ時だけのことで、影の人の場合は何の音もたてなかつた。

流石と、言つた所か。

（影の人は男の人なのに、何だか負けた気分。）

しなやかな身体に、目立たず付いた筋肉が影にはあるのは分かる。なのに、だ。

これは経験の差だろう。

「モニカ。久しぶり。」

通された部屋のソファード、優雅にティーカップを掲げながら彼女は言った。

年齢から行くと一十歳はとおに過ぎてはいるが、三十路には全く見えない。

「久しぶりです。やっぱり今回も見つけるのは早かったですね。」

「ふふ。私を誰だと思っているの。」

「花影の党首サマですかよね。」

「分かっているじゃない。」

呆れるた私が嫌味を込めて様付けしたのに、軽く答えられて私はがっかりだ。

「じゃあ貴女の事だから、何で私が王宮に居たのか、どうして王宮を出たのかはお見通しなんでしょうね。」

残念だわ、今回は大丈夫だと思ったのに、と嘆き呟いている私に彼女は凄く楽しそうに笑う。

「当たり前よ。これくらい朝飯前だもの。」

国会機密を調べるのを朝飯前と言い切つてしまつ知人に、私はもはや言い返す言葉がない。

ようやく言いたい事は言い切つたのか、雰囲気が少し変わった彼女。

「どうかした？」

「どちらをじつ、と見てくる彼女に胡乱げに尋ねるが、返ってきた言

葉は予想外だつた。

「 気に喰わないわ。」

てか、憎い！..などと呴かれ、私は意味が分からぬ。

「 はつー..?」

何を考えていて、どう言つ思考回路に陥つたのかは知らないが、彼女の脳内ではきっと突拍子もない事を考えていたに違ひない。

「 その男が氣に入らないの。」

その男と言われて、どの男？と聞き返すも、この部屋に男性なんて居ない。

そもそも、此処まで案内してくれた影の男性は、私が室内に入るのを見届けてから何処かに行つてしまつた。

「 まず、どう言つ判断でそういう考へに陥つたのか教えて下さい。」

（切実にそう願います。）

「 だつてねえ。モニカ綺麗になつたんだもの。」

何か突拍子もないことを言われた気がする。

「え？」

「女が綺麗になつた時は、決まつて男が出来たりする時よ。」

「ちよつ……待つて。」

（なぜに男が出来た限定。）

けれど嫌に納得した。だから男が関係してきたのか、と。

「ダメよ。まだお嫁には出さないわ。」

何も言つてないのに、話しさは嫁ぐ話しにまでジャンプしていた。

「もう…私の話しも聞いて下さい。」

あまりの話しの進まなさに、私は苛立ちをあらわにする。

端から見れば、会話は噛み合つてこないよつて噛み合つていらない。

「聞いているわ。私に黙つて男を作つた罪は重いわよ。」

（これはダメだわ。）

なかば諦めかけた時、彼女が不意に押し黙つた。

「……そう言えば気になつてたんだけど、彼女はナニ？」

鋭い瞳で見据えてくる所は、さすがと言つた感じだ。

その先に映し出されたものは、妖精の姿になつてゐるグレファー。

ひとえに、今までグレファーの事を指摘しなかつたのは、書の

無い者だと判断したからだわ。

彼女の事を説明しようとした私を制したのは、グレファーだった。先ほどまで乗つていた肩を降り、私の目の前に立つと姿を変えた。グレファーの本来の姿。精霊の姿へと。

「初めまして、かしら。隠された土地の精霊さん？」

花影の党首、ネイラーが口にした言葉は意外だった。

「どうし　　」

「　　なるほどね。そこまで分かっていれば十分よ。お察しの通り、私は隠された土地の精霊。グレファーよ。」

私の言葉を遮り、口を挟んだグレファーは何時もに増して饒舌じょうぜつだった。

「そう。私は花影十三代目党首ネイラー・グラン。よろしくね。」

花影とは、金錢では決して動くことを是としない裏組織。歴史の仲で花影が陰で暗中飛躍してきたのは数知れず。だが自ら組織全体が動いた事は一度たりともないと言われている。

「花影、ねえ。　　上等だわ　　」

（　モニカを守るぶんには。）

声にこぼ出せなかつたが、グレファーの表情からネイラーは読み取

つたらしい。

花影の由来は、自分が従つと決めた主【花】の下もとで暗躍する【影】であるから【花影】といつ。

光影のいわれ

仲間に引き入れる分には不足はない、と判断したのだらう。

「やつぱりネイラーは博識ですね。何でレファーが妖精じゃないと分かったの？レファーも隠れてたのに」。

普通は分からぬわよ、と呟けば、ネイラーはふと妖艶な笑みを浮かべた。

「うふふ、普通じゃないもの。伊達に花影の党首をやつてないわ。」

それもそんなんだけじね、と渋々納得するが、あまり釈然としない私は渋面だ。

「親御さんには、そのまま連絡を絶つつもり？」

やはりと呟つか、流石と呟つか、知っていたようだ。

「言える訳ないわ。」

絞り出すように言葉を紡げば、頭に手を置かれた。

そして軽く数回頭を叩かれる。

それは幼子を宥めているそれに似ており、少しムツトである。

「こじけないの。」

諭すようにネイラーに言われれば、そんな顔していったかと頬に手を

当てた。

しばらくネイラーにわれらがままになつてゐると、だんだんと黙くなつてきた。

ネイラーは頭に手を置く際に隣に移動して來たので、調度良い感じ隣に肩がある。

二つの間にか私はまじりこんでいた。

その頃正面の一端ではちよつとした騒ぎとなつていていた。

「これはどういふ事だ。」

荒げた声を発したのはフィオーラ。

「うひと、落ち着けよ。」

「うひですよ。少し落ち着いて周りをみれば違つ觀点から物事を

「

先程からシオンとシルガーが宥めるように言葉を掛けるが、全く成
果は無い。

シルガーに至っては、話しが合っているようでは合っていないが。

事の発端はシオンの一言だった。

「 せう言えば 。 」

シオンが言葉を発するのを途中で止めた。

今は第一王子、ハルギレーヴの側近が集まり、近頃の王宮内の不穏
な動きについて知り得る全ての情報を話し、情報交換をしていた。

「 ？ 何があつたのか？ 」

それをいかぶしむようにフィオーラが先を促す。

「 いや、あるにはあつた んだが 。 」

フィオーラはシオンの上司。

だが公式な場では敬語を使うが、普段は砕けた口調だ。 。

シオンは第一王子、ハルギレーヴの持つ第一部隊の指揮者兼隊長だ
った。

そしてフィオーラはハルギレーリの持ち得る全ての軍隊の最高指導者。

実はと言つと、二人は同期で実力もどつこじやつこじと言つたところ。 そう大差ないのだ。

だがシオン本人たつての願いでフィオーラが上司になつた。

その事にシオンは一切後悔していない。

「何かあつたなら、逐一報告するのが我等の役目ではないですか。」

今まで口を挟む事のなかつたシルガーにまで言われてしまえば、シオンは報告するしかなくなる。

そしてシオンは話した。

早朝に高官の国守りが話していた事。侍女が、その話しへ聞くために入った部屋に居て、座り込んでいた事。

「 なあ、それはどんな侍女だつたか覚えているか?」

しばしの考える仕草の後、フィオーラは言つた。

国守りが言つた言葉よりも、彼が侍女に興味を持つ事は大変珍しく、シオンは不思議に思つた。

今まで、フィオーラが侍女に興味を持つ事はないはず。

ならばあの侍女が、ならば何かの鍵なのだろうか。

「前髪が少し邪魔で、あまり容姿は良く分かないが大体なら覚えて

容姿はかなり整っていたように思うよ。瞳は薄緑でだつたが、あまり黒髪に馴染んでいなくて違和感を覚えた感は否めないけどね。」「

あまりそこまで容姿に注意していなかつたせいで、彼女の雰囲気しか直ぐには思い出せなかつた。

手繰り寄せるように思い出せば、フィオーラは名前の事まで尋ねてきた。

シオンは珍しい事でもあるものだと思いつつ、彼女の名を口にした。

それが間違いだつた。

後にシオンは後悔することになる。

その後、フィオーラがパニクつたのは言わずもがな。

「なんでお前がそんなに焦るんだ。もしかして 恋人だったのか。」「

自分の言つた言葉に有り得ない「冗談だと思った。だがあなたがち間違つていなかもしれない。

歳はそう離れているように見えたから。

「は？ 何を言つていいんだ。私は俺の妹だぞ。」

フィオーラの口から何か有り得ない言葉が飛び出したように思つ。

「 すまないがもう一回言つてくれ。」

「だから、私は俺の妹だ。」

「 [冗談だよな。」

「 何故俺が[冗談をつく必要がある。」

心底呆れた、と言つ風に言つられてシオンはムツとして言い返す。

「 だつて似てないだろ？ 髪色も瞳の色も。しかも兄妹ならもつと知れ渡つているはずだ。俺の耳に入つてくるくらいにはな。」

フィオーラの髪は焦げ茶色に、瞳は漆黒。一方私は違和感のある染めた黒髪に薄緑色の瞳。

全くと言つて共通点がない。

しいて言つなれば、容姿が一人とも整つてゐる事くらいだろ？。

「 あまり周りに知られるのを是としない性格でな。」

あながち間違つてはいない。そして嘘は付いていないぞ、と内心細く笑んだフィオーラ。

一方シオンは納得したが、何故か違和感が否めなかつた。

ハルギーレイの執務室に向かう側近組3名。

言わざもがなフィオーラ、シオン、シルガードある。

「フィオーラ、こちらは執務室の方向ではありませんよ。」

いつもと違う道を進んでゆくフィオーラに、その後から着いて歩くシルガードが疑問を顕わにする。

「ん？執務室には向かってないぞ。」

「なら何処に向かってるんです？」

「JUTちの方は貴族の客室しかないだろ？。」

まさか妹に会いに行くつもりか、と呆れて言ったシオンの言葉など無かつたものと扱われた。

廊下でとある侍女とすれ違う際、フィオーラは彼女に声をかけた。

「モニカが何処に居るか知つているか？」

「モニカ、ですか？　彼女なら、辞職されましたよ。」

「 「 「 」 」 」

思わず三人は息を呑んだ。

そんなに簡単に辞職をするようには見えなかつたからだらうか。

「 辞めた、つていつですか？」

一番早く立ち直つたシオンが、戸惑いを隠しきれない面持ちで尋ねるも、返ってきた答えはなんとも素つ氣ないものだつた。

「 何故第一王子の側近であるあなた方に御教えしなくてはならないのです。

何時辞めよつと彼女の勝手ではありませんか。」

「 俺は、ハルギレイの側近である前にモークの兄だ。今までも、これからもそのつもりでだ。」

「 その言葉、嘘偽りはございませんね。」

真意にフィーオーラが頷けば、鼻の頭にそばかすのある侍女は幾分か目元を和らげた。

「 分かつてはいるとは思いますが、彼女はもう此処にはいません。」

フィーオーラもシオンもそれは想定内だつたので、取り乱す事はなかつた。

「 モークは昨日、私に辞任の届け出を出しました。上の者には明日提出してほしい、との事で。そして明け方近くに出て行きました。」

「 。 」

シオンは黙り込んでいた。

頭の中では昨日の朝の出来事が原因なのだろうか、と今更どうしようもない事を考えている。

あの時の様子は今でも覚えている。それくらい衝撃的だったのだ。

「 そうか 」

それ以降、フィオーラは口を開く事はなかった。

それ以上騒ぎ立てない所を見ると、彼女の身に危険は無いと判断したのだろう。

だが、ハルギレイの執務室に向かうとそこには珍しく先客がいた。

「 ヴィオラ様、 どいしてここに? 」

ハルギレイの座っている所に詰め寄り、机を挟んで胸倉を掴んでいた。

そんなヴィオラにシルガーの声が届くわけもなく、一人は睨み合っている。

「 説明なさいよ。 これはどうこう」と…。

何時もは上品そのもの、その対象としかなりえない彼女の激昂を聞いたフィオーラ達3人はその場で思わず立ち止まる。

「どうして止めなかつたの。貴方が力を奮つていれば、それは避けられた事態。分かつていながらそれをしなかつた!! あんたなんて最低よ!!」

そのまま入口付近に居る3人に目もくれることなく、彼女は出て行つた。

室内には、ドアの露骨にも大きな音を立てて閉まつた音以外何もなかつた。

「 ヴィオラがこの部屋に来るなんて珍しいな。」

誰に言つでもなく、シオンがぽつりと呟いた。

それに促されるように残りの二人も口を開く。

「何あんなにも怒つていたんだ?」

フィオーラは疑問を口にした。

「 そうですね。彼女があんなにも怒りを顕わにするのは珍しいです。

」

シルガーが執務用の椅子に座つたままのハルギレイを促すかのように言つた。

「 フィオーラ以外、少し外してくれ。」

静かな、少し消沈したかのような声が空気を震わす。

いつもの丁寧語をのけたハルギレーイの言葉。ただそれだけで、全く雰囲気が変わる。

何處か頑なにも聞こえるそれに、2人は従わざるをえない。

パタンと2人が出て行つた扉が音をたてて閉まる。

二人分の気配が遠くなつたのを見計らい、フィオーラは口を開いた。

「どういう事だ。」

それは仮にも主に対する口調ではない。
しかしハルギレーイはそれを咎める事はしなかつた。

「先に謝つておく。すまなかつた。」

そしてハルギレーイは話し始めた。

王宮を出たモニカの行方が知れない事を。

ハルギレーイ曰く、馬車も何も喚ばず王宮を出たモニカ。それに身を察したため、ハルギレーイは影を付けて安全に屋敷まで連れ帰るよう命令を下したらしい。

だが、王宮を出てしまはなくたつた所でモニカの行方が分からなくなつたと報告が入つた。

だからすまない、と。

「なんだと！」

それを聞いた瞬間フィオーラが始めて声を荒げた。

「 残念ながら、事実だ。影の実力は知っているだらう。それに、この事をお前に話したのはモニカが自分から行方をくらました可能性がないか聞くためだ。」

「 ない、とは言い切れないだらうな。」

「 そりか 。。」

再び沈黙がおどずれた。

両者とも、それぞれ思う所があるのであらう。

不意に天井から一枚の紙がふつてきた。

それを慣れた様子で拾い上げるハルギレーイはそりとそれに手を通す。

「 フィオーラ、あの一人を呼んできてくれ。」

普通なら、誰かが天井から降ってきた紙について突っ込まないとおかしいだろう。

だが彼等にとってはそれは日常茶飯事の事。

「 話したい事がある。光影からの情報だ。」

影とは主のために遣え、暗殺から間諜、命じられた事なら忠実にこなす忠実な裏の存在。

主となつた者に【影】と付く名を受けられた時から、その者の影となり手足となつて動く存在。

それは王族にしか遣える事を是としない。

その事を知っている側近組はさして驚く事はない。

ハルギレイは早足で部屋を出て行ったフィオーラの気配と複数の気配を感じとり、閉じていた目を開けた。

「全員揃つたな。始めに聞いておく。 影花を知っているか。」

繋がる糸（前編）（前書き）

6／3より 月鈴

「 花影を知っているか？」

その問いに、側近である彼等は戸惑いを隠せない。

この王宮内で花影の事を口にしないのは、暗黙の了解と言つて等しかつた。

王家は昔、花影にひざまずく事を命じた。すなわちそれは王家に着け、と言つこと。

だが彼等はそれを受け入れなかつた。理由は簡単なことだ。王家の上からの物言いが気に食わなかつた。

ただそれだけ。

それに花影の党首は代々女性だ。それは決まり事ではなく、単に女性の方が実力を握つっていたと言つだけの事。

そんな花影だからこそ、王の物言いが余計気に食わなかつたのだろう。

当時は女性の社会進出が進んではなく、党首が女性ということもあり見下ろされていたのだ。

なので、無理もないと言えば無理もない。

しかし花影はそれに見合つだけの実力を有していた。

それは政を行つ王家には、喉から手が出るほど欲しいものだつた。当然手に入れようとする訳だが、その手を優にかい潜つた。そして

元から姿を見せる事は殆どなかつたが、全く姿を見せなくつた。

いかに詮索の手を広げようとも、見つかる事のない花影の事はいつしか王宮内では禁句用語と化していった。

「口にしなくとも、誰もが知つてゐるだらうな。」

「それは言へてゐる。大体侍女達くらいしか今は口にしないからね。」

「いいえ。若い文官達の間でも口にされますよ。」

侍女が口にするのは、女性が力を握つてゐる花影の事が憧れと等しいからだ。

そして文官達の間では女性の社会進出についての議論をするたびに、それとなく出てくる話題でもある。

「まあ、大体は予想していたが…………。まあ花影について知り得る情報には大差ないだろ。なにせ情報 자체が少なすぎる。だが、フイオーラの妹、モニカの姿を見失つた辺りで光影がこれを見つけた。

」

そう言って差し出したのは深紅の薔薇。

きちんと棘は取られている事から、誰かが摘み取つた事は確か。

そしてこの薔薇はただの薔薇ではない。

「…………これは……！」

文官であるガイシーは博識なので、目にしただけでこれが何なのか理解したようだ。

「名前ぐらいは聞いた事あるだろ？ 影花、別名女王の戒めとも呼ばれている。」

「確かに花影の党首しか咲かす事のできない、幻の花と言われているはず。まさか実物を目にする日が来るなんて。」

その実物を見たことのないシオノンが口を挟む。わざと架空図書の書物でも読み漁つていたのだろう。

「これが世にも珍しい影花。由来は花影からとったのか。」

フィオーラが推測氣味に話せば、答えは直ぐに返つてくる。

「そうみたいだな。【花影】は花を主と例え、花の影として暗躍するから。【影花】は影（花影）の咲かす花だから。」

本当に良く付けたよ、ヒシオノンが言えば周りも同感らしい。

「で、なんでの、世にも珍しい影花が、ハーレイの手元にあるのか御聞かせ願おうか。」

全員が一番気にしている所はそこだ。

「まさか、【花影】と接触したのですか？」

「いや。違う。接触したのはモードなんだよ。」

「」「」「...」「」

返ってきたのは、3人にとって予想外なものだった。

「なるほど。花影とモニカが関係があるかもしれない、と言つ
わけだな。」

なるほど、と頷くフィオーラ。
当然それに食いつく者もいる。

「…兄である貴方が否定しないと言つことは、何か知つているとい
う風にとつてもいいんでしょうか？」

シルガーの言葉。

それに一斉にフィオーラの方を振り向く。

「いや。肯定も否定もできないぞ。」

「理由を聞いても？」

珍しく彼は食い下がる。

それは単に花影と接触しているモニカにから、新しい情報を知り得
る事ができると言う期待からか。それとも、接触をしている疑いの
あるモニカを不信に思つての事が定かではない。
たとえそれが同期の妹であるうとも。

フィオーラは苦笑して口を開いた。

「モニカは普段、自室で本を読んでいてな。」

言葉少なに話すフィオーラ。

幾人かは首を捻る。

接触の有無の事を話していたはずだ。

「その自室の窓からは裏門が見える。そして部屋の窓側には立派な木がある。」

ますます関係性を感じない内容になってしまった。

「もしかして、その窓から出入りをしていたのか？」

ふと考える仕草をしたシオンは、何か思い当たる事でもあったのだろうか。そんな事を口にした。

「何を馬鹿な」

「良く分かつたな。」

「なつ……」

絶句して固まつたシルガーはそのままに、話しさ進んで行く。

「遠回しに言つていたんだろう。借りにも名家の令嬢が窓から出入りしている、なんて言えないだろう。」

シオンがしんづらに言葉を返せばフィオーラは同意を示す。

「お前、“借りにも”ってな。」

本人の知らない所でモニカはお嬢様が借りだと言われている。それに憐れみを持ったハルギーレイは口を挟んだ。

繋がる糸（前編）（後書き）

皆様、久しぶりの更新で申し訳ないです。

サイトのままで新しい小説を書いておりました。

続きをなるべく早く仕上げられるよ、頑張ります。

たぶん

6月3日

繋がる糸（後編）（前書き）

6／19（日曜日）
に更新

月鈴

繋がる糸（後編）

「それより、お前は窓から抜け出していたのを知っていたんだな。」

「それが、つい最近知ったんだな。」

「誰もその回答は予想していなかつた。
当然驚く。」

「お前が？」

上司でもあるフィオーラを、お前と呼びながらもいささか驚いた風にシオンは口を挟む。

「そりなんだがな。モニカのヤツ。あいつはあれでも手練れだぞ。」

またもや驚きを隠せないでいるシオン。
シルガーはもはや例外だ。

残る一名は。

「なるほどね。納得したよ。」

「納得するなよ、ハーレイ。」

一応妹の事なので言い返してみるフィオーラ。

「ちなみに実力は？」

再びフリーズしているシルガーを横目にシオンは尋ねる。

文官であるシルガー。武術は全くと言つても過言ではない。それなのに令嬢であるモニカが武術が出来る事に軽くショックを受けたのだろう。

「一応、俺と対等には戦えるんだがな。ただ、力の差があるだけだ。」

「それは男女の差で、フィオーラには一歩及ばない事を暗に指している。」

「なら俺とも対等か。」

「それは私とも一緒にだよ。」

軽く落ち込むシオンにハルギーレイは労りの言葉をかけた。

シオンは改めてモニカは規格外だと、失礼な事を考へるしまつ。

「でもな俺が、モニカが窓から出入りしていると気がつかなかつたのは、屋敷の者のせいでもあるんだぞ。」

「といつと?」

「召し使いが手を貸していたんだ。正しくは一方的に、だけだな。」

「なら、モニカはその事に?」

フィオーラは首を振る。

「実際のところは知らないだろ？。」

「例えばどんなふうに？」？

興味をそられたのか、今度はハルギーレが口を開く。

「主に 天氣のいい日はモニカの部屋にあまり近寄らなかつたり。外を眺めていると、召し使いの者は足早にその場を後にして、何時頃には再び来ると予告をしていたな。」

「わかりずすぎるだろ？。」

「文句でもあんのか、シオン。」

「そんなわけないだろ？。ただそれだけの彼女の行動では、わかりづらいと言つただけだ。」

シオンがそう言つのも当たり前だろ？。

天氣の良い日は、異常気象がない限りよくある事だし。彼女が窓の外を眺めるのは、日常の生活の中に幾度とあるだろ？。

「それはそうだかな。分かるんだよ、感じで。」

「感じ？」

「つまりは使用者が見て、今日辺り行きそうだな、と思つと行きやすくしてやるんだ。」

「 なおさら分かりにくい。けど、屋敷の者は彼女の事を良く見ているんだな。」

「 そうだな。」

しみじみと言つた風なフィオーラは、顔に少しの影を落とす。

それに当然シオン達も気付く訳だが、とても聞けるような状態ではないのが分かる。

悩み、と言つ今突き当たつてゐるものではないのかもしれない。この王宮仕えの人には様々な事情があり、政治的な思惑が交差している。

それは大抵の人には軽く当て嵌まることだらう。

悩みのない人なんていない。

顔に出すことはあつても、話せない悩みもあるのだ。

いくら仲がよくとも、彼等は話せる事とそうでない事を区分して話している。

それは決して信用していなかではなく、信用しているからこそ話せないのである。

それを彼等は良く理解している。
だからこそ気が合つただろう。

「しかし、その後は誰も付き従わせず街に行くみたいでな。当然足取りも、誰と接触したかも分からぬ。」

「フィオーラのそんな言葉に3人は絶句。言葉も出ない。」

モニカが妹だと言う衝撃の事実を、つい数時間前に聞いたシオンもシルガーも、彼は過保護かと問われれば揃つて首を縦に振るだろ。ハルギーレイも言わずもがな。

その過保護な彼が足取りすら確かめないなんて。と驚く他ない。

「だけど、フィオーラが焦つていい所を見ると、彼女が無事だと言つ確信はあるみたいだね。」

必然的に、一番彼と接する機会が多いシオンはなんとく理解できるようだ。

しかし文官であるシルガー。

文官だからこそ証拠がないと信じられないようだ。なので、その証拠はなんだ、と問つてくる。

当然フィオーラが証明出来る訳なく。

結局は家族だから当たり前だ、と言う始末。

それにシオンとハルギーレイは呆れ返り。シルガーに限つては何やら煮え切らない顔をしている。

結局その不毛なやり取りは数刻続いた。

繋がる糸（後編）（後書き）

6月1~9日の更新でした。

花影と光影？（前書き）

6/21(火)の更新。

前の更新から空けずしてなんとか
氣力が湧きました

ガヤガヤと五月蠅く感じる事が一般の街の騒音。けれど私にはそれすらも「女らぎ」に感じる。

しかし肩に乗つてゐるグレフラーは違つようだ。眉間にシワを寄せて、眉を潜めている。

（ああ、もう。せっかくの顔が台なしぢやない。）

見える人は「」にはいなければ、どうしても彼女の整つた顔が歪んでいふと「」にせずにはいられない。

内心苦笑しつつ、質屋で物を見繕つていた私は重たい腰を漸く上げた。

「お邪魔しました。」

結局何も買つ事なく店を出たが、一応挨拶は忘れない。

むしろ何も買わなかつたのに、長時間居座り続けて居たことに罪悪感を持つ。

そんな私をグレファーは不思議そうに見上げる。

「どうして買わなかつたの？」

「欲しい物がなかつただけよ。」

にべもなく言い返すが、嘘だ。

それなりに良い物はあつたし、買つてもいいと、思うような品はあつた。

しかしグレファーは余りそこには居座りたくはなかつたようで、気分が悪そうに見えたからだ。

実際あの店の雰囲気がダメだつたのだろう。

品もそれなりに良かつたし、揃えも悪くなく、店主もいい人だつた。しかし欠点が一つ。

そこに在つた物が本物だつた、という事だ。

解りやすく言つと、そこに在つた品がグレファーには合わなかつたのだ。

魔力の籠つた品は、力のある神官などが作り出せる。

しかし彼等の数は少なく、それなりの物を作るとなれば時間が取られる。

多忙である彼等の中で、それらを作るのはほんの一握りの人だけ。

そうなれば魔法具が不足する。

そこで何処の誰が思いついたかは知らないが、妖精を遣う事に思い当たつた人がいたのだ。

つまりは道具を遣つたために妖精を遣う。

それは妖精の殺生をしたと「**ハリハリ**」と表す。

正直私が知ったのもつい最近。

それはグレファーに指摘されて気づいた。

グレファーは精霊だ。

同族とも言える妖精を遣われた品々に故意的には近付きたくはないのだろう。

改めて無理をさせてしまったか感が拭えなくて、我ながら至らないばかりだと唇を噛む。

そんな私をグレファーは無遠慮に見た後、ため息を付いて「**ハリハリ**」た。

「別に私に気を使わなくていいわよ。それは今に始まつた事じゃないもの。」

グレファーのその言葉に、私は目をひん剥いで振り返る。

「なによ。そんなに驚く事?」

軽く聞こえる言葉だが、私には苦痛を我慢しているようにしか見えなかつた。

それが悔しくて、私はまた下唇を噛む。

「そんな事言わないで。」

「え？」

「そんな事思っていないのに言わないで……」

グレファーはハッと思を飲む。

私の大声に街の人々が振り返る。
しかしそれに気づく訳もなく、私は滲み出てきた涙を拭う事なく走り出す。

「 つ、モニカ！」

グレファーの声がするが、止まれない。

止まりたくない。

今追いつかれたら、思っている事全て吐き出してしまいそうで。
そんなこと言えるわけ無かつた。

よく前も見ず走っていたからだろう。

思い切って角を右手に曲がった所で、頭上に影が落ちた。

気が付いた所でもう遅い。

ぶつかると思い、足にストップをかけるが。人間そう安々と止まれ

るわけがない。

案の定、私は出していたスピード分の勢いで相手にぶつかった。

しかし予想していた衝撃とは少々違った。

「え？」

相手にぶつかった衝撃で自分の身体は跳ね返るはずだった。

そして相手も、跳ね返りませずともよろひけるだらう。

だが私の身体は、地面に投げ出される事なく受け止められたのだ。

「おっと。危ないねえ。モニカお嬢さん。」

見知らぬ人に名を呼ばれた事に驚き、相手の顔を確かめる。

「 ビジィーラ。」

あまりにひょんな出会いだったので、私は呆然と呟く。

いつもなら、彼に会った瞬間に逃亡を謀ったかもしれない。

だが今はそんなことをする気力すらない。

二の次が告げなくて、絶句している。思いがけずビジィーラから声が掛かった。

「どうしたんっすか。」

「こんな所で。と言われて。

私は答えられる訳が無かつた。

そんな私を不思議に思つたのだろう。

当然だ。

彼は私よりも身長が遙かに高い。

そして、街に出る際にネアーラに渡された帽子がある。

さつと髪色と容姿で素性がばれないうに、との配慮だらう。

しかし兄の従者でもあるビジィーラには、じまかしは効かなかつたようだ。

沈黙を守る私に、困つたよつてビジィーラが頬を搔けば、何時もとは違う仕種に私は目を見開く。

普段の彼ならば、私がどんな状況でも気にはしなかつただろう。

ただ気にするのは私の、フローラル家の末娘としての心配。
そして安全だけだ。

それが今はどうだらう。

様子のおかしい私を見て、困っていた。

その時に少し俯け気味だった顔を上げたせいだらう。

きっと顔がはつきりと見えてしまった。

私は先程グレファーから逃げる時に、涙を零した事をすっかり忘れていたのだ。

「どうして泣いてるんですか。」

まだ乾ききっていない涙を見ての言葉。

私は急に気まずくなつて顔を逸らす。

さつきと同じ沈黙がまた続くが、雰囲気が軽くなつたのは気のせい

だと私は思いたい。

すると不意に気配が増えた。

ぱつとそちらを振り向けば影花の影だ。

ほつと安心するも、ビジィーラは警戒しているようすで、
敵ではないことを伝えようと、口を開いた、が。
視線を外すことはない。

思わぬ邪魔が入った。

シウン

空を切り裂く音。

キン

何かに当たる金属音。

音の正体は、花影に投げ付けられた飛び道具。

飛び道具は空を切り、花影に向かつたが。

花影が田にも止まらぬ早さで手刀を抜き、

それは城の光影。

いわゆる影の存在。

(もしや何かの牽制?)

実際に光影を見たのは初めてだが、気配に城のレクイエムや国守りの気が充満している。

それは清浄な気配。

きっと影華は聰いので気付いてはいるだらうが、敢えてその姿勢を崩す事はない。

どうしようかと、考えあぐねていると。予想もしない人物が口を開いた

「モニカ・フローランス様ですね。」

(嗚呼、今日はやけに思いもしない人に名前を呼ばれる田だわ。)

「違いないわ。」

「我が主の命により、王宮まで御同行お願いします。」

彼の言う主、だなんて分かりきつている。

しかし王宮の影。しかも光影が言葉を発するとは思わなかつた。

花影の方を気にじつしも、任務を真つ当する彼は凄いと思つ。

（そりゃあ氣になるでしょ。）

なんて言つたつて花影だ。

当たり前だけど、黒で統一した黒衣。それにある左胸の紋様。

銀の刺繡で、棘の付いた薔と薔薇を象つたものだ。

詳しい人にしか分からぬだらうが、その薔薇のモチーフは影花。

きっと光影の人もそれを知り得ていたのだらう。

花影と光影？（後書き）

6月21日の更新でした。

B Y月鈴

知りたくて（前書き）

7/3(日)
の更新

知りたくて

一般の人は知り得ない事。

むしろ物語に出て来る登場人物、としか思つていなかろう。

だからこそ王族からしか聞き得た事のない存在に、興味を示す事は不思議ではない。

まあ、割と女性の中で花影の名は浸透してはいるが。

どうやらこの時代、女性の社会進出を目指す人達からの注目が絶えないのだ。

なぜなら花影の頭首は実力行使主義で、代々女性のほうが地位が高かつた。

なんでも花影の技術は、力のない女性でも努力しだいで容易に扱えるような物に開発されている。

いわば女性のために出来たような物だ。

花影が引き受けるのは、これが国のためになる。と判断し、自分の正義を貫くためにある。

ネイラーに聞いた事があった。

「どうしてあんなに頑張るの？」と。

「花影は、社会で虐げられた人達ばかりなのよ。」たから頑張るの、
と言われた。

ぼんやりと、訓練所での影の訓練を見ていた私は、何度も相手に向
かって行く女性に心を打たれた。

戦っている相手は男性だ。特有の腕力で女性を捩じ伏せる。
それでも彼女は諦めない。

自身の素早さと、軽さを生かして何とか反撃を繰り出す。

そして、それは一瞬の出来事だった。

女性が相手の動きを利用して、地に叩き付けたのだ。自分よりも力
のある男を。

私は呆気に取られ、それを見ていた。
心のどこかで、敵うはずないと思っていたから。

だが実際は違った。

力を物ともせず、彼女は相手を倒してしまった。

「す、すじい。」

意図せず口からは感嘆の声が漏れる。

それを横目にネイラーは言った。

「理由なんて、一見単純なのかもしない。」、と続けて言うネイラーに、私は何も言えなかつた。

それは^{しいた}虜^{さへ}げられたから頑張るのが、と言つ意味なのか。

私には、そうであつて、そうでないよう^{じよう}に聞こえた。

ただ分かる事は、彼女もその虜^{さへ}げられた内の一人だと言つこと。

いつも自信に満ち溢れ、余裕の表情を見せる事もしばしある彼女の言葉とは思えず、しばし私は口を閉じたのだった。

閉じていた瞳を開けば、目に映る銀色が見える。

風で煽られた私の銀髪。

息を飲んで私と光影のやり取りを見ていたビジイーラ。

なんの同様も無しに私達を傍観する花影。

そして私を王宮へ連れていこうとしたしる光影。

私はやれやれ、と息を吐き出す。

「悪いけれどお断りさせと頂くわ。」

「どうやら彼は、私の返事を聞くまでもなく、その返事を予想していだようだ。」

「では、我が主の事とは誰かを存知で？」

私は何を分かりきった事を、と鼻で笑つてしまつた。

「そんなの知らない人の方が珍しいくらいよ。」

「そうですか。では私が半国守りなのは存知で？」

「ヨイツは何が言いたいんだ。」

「そう思わずにはいられなかつた。」

「光影なんて、みんなそんなものでしょ？」

「実はこの内容は国家機密だ。」

何故そんな機密を、国の何も担つていらない私が知つてゐるかと言つと、そんなの簡単だ。

「なぜそれを?」と別段焦つたふうもない彼は、大体予想はしていだと見る。

「それは貴方が想像してゐる通りだと思つけど。」

チラチラと花影の影を田を向ければ、田元しか出でていない装束。そこから覗く一対の瞳。

その瞳が「まだか」と問つてきているのを私は知つてゐる。

そう、わたしの情報網。

それは花影から譲り受けるもの。

当日、ネイラーは言つたものだ。

「これは花影からの恩恵だと想いなさい」と。

悪いけど、私はこれ以上を光影と話す氣は無かつた。

「ビジィーラ。」

そして花影、光影共に表れてから口を開いていなかつた兄の従者に声をかける。

「兄様には大丈夫だと伝えといて。私、今は会えない。 きっと

「捗してくれてるんでしょ?」

「毎度毎度、何かがあつた度に過剰に心配する兄の事だ。
きっと従者であるジジィーラに捗索を頼んだろう。」

「やつぱりと言つか、何と言つか。予想はしてたツスけど、帰
らないんですね。」

私は頷く。

「なら俺が言つ事は何もないですね。ただ、大丈夫だと、その
言葉を本当にフィオーラ様に伝えていいんツスか。」

「心配かけたくない。」

「もう十分してますがね。」

ビジィーラに切り返された言葉に、つと詰まる。

オブラーに包まれてはいるが暗に、これ以上心配かけようがかけ
まいが大差はないのだと。そう言われている気がする。

「なら本音を貰つた方がフィオーラ様はよっぽど嬉しいと思います
が?きっと大丈夫、だなんて言つた所で、それが上辺だけの言葉だ
と見透かされるとは思いますがね。」

本当にコイツは痛い所をついてくる。

自分に否があるのは分かつてるので、全く反撃ができない。

この従者は至上主義者だ。

主であるフィオーラを悩ます私には、容赦が無かつたのは重々承知はしていたはずなのが。

だが私にも譲れないモノがある。

「それでも、大丈夫だと言つて欲しいの。大丈夫にするから私はこの言葉を兄様に届けてもらう。兄様に宣言したからには“大丈夫”にするしかないじゃない？」

きつと大丈夫じゃないと思つた日には、道は断たれる。だから私は“大丈夫”と言葉にする。

コトバは力となり、原動力となるから。

ついに折れたのはビジィーラだった。

「 分かりましたよ。貴女がそう言つのでしたら信じましょう。貴女はあの人に言つた事だけは守るんでしょつから。」

その言葉に私は笑った。

本当に私達兄妹を良く見ている。

「 だったら俺はこれにて帰ります。 」

花影が居る」とも、光影がしゃり出て来た事にも何にも触れずビ
ジーーラは身を翻して去った。

その姿を見送りながら、私は心の中で謝る。
自分勝手な事をして、心配をかけてごめんなさい、兄様、と。

一つ息を吐き出しつゝ、クルリと振り向けば、残る「奴」がそこにはいた。

「 分かりましたでしょう、私が王宮に行くつもりがなうこと。 」

「 しかし 」

きつめの言葉で暗に、いい加減帰れと言えば。相手も食い下がつて
くる。

しかし、遂に業を煮やした私はぴしゃりと言った。

「 主の名だらうが、何だらうが、私は行かないと言っている
の。分かつたならさつと帰りなさい。 」

雰囲気が一辺し、纏う雰囲気までもを変えてしまった私に、辺りの妖精が反応する。

胸元のペンドントが熱を持つて淡く発光はじめた。

それにいち早く気付いたのは華影。

「　　彼女は我等が必ずお守りすると心に決めたお方。そんなに連れて行きたいのならば、私と一戦を交じわうか。」

光影でさえ怯む威圧を投げかけ、華影は毅然と前を向く。

深いフードから、ギリギリ口元と鼻が少し覗くくらいに見据える。もつ少しで髪が見えるのかと言つほどだ。

そうして威圧に耐えられなかつたのか、それとも華影の言葉に納得したのかは分からなが、華影は静かに去つた。

たが私は固まつたまま、未だその場を動けずにいる。

驚いた。その一言に死せる。

話さないはずの華影が喋つた。

それよりもその声に私は驚くしかなかった。

だつてあの声は

「 マルーシャさん? 」

信じられる訳無かつた。

だつて彼女のいつも零困氣とせ、あまりにも掛け離れ過ぎていたから。

「 。 」

何も答える事のない彼女に、私は悲しくなる。

どうして、と。

それはその事を話してくれなかつた事に対してなのか、華影に属している事なのか、それとも王宮の侍女を辞めてしまつた事なのか、私には分からなかつた。

気が付けば走り出していた。
彼女の手を掴んで。

彼女は抵抗しようと思えば、きっと私なんかをものともせず振り払う事は簡単だろ？。

たがそうしないのは、甘んじて受けている他ない。

走つて走つて走つて。

手からは彼女の戸惑いが感じられる。

握り返す力は控え目で、どうしていいのか分からぬようないが感じ取れたから。

漸く屋敷に付けば、私は一気に2階まで駆け上がる。

勿論、手は繋いだま。

必然的に彼女も階段を駆け上がる嵌めになるわけで。

屋敷内にいた物は胡乱氣にそれらを見送るのだった。
うらん

扉をなんの淑やかさもない開け方をして、私は部屋に飛び込んだ。

知りたくて（後書き）

初めからここまで読んで下さった方で、【モーク】の名前を呼ぶ言葉が【私】になつていたら連絡を入れて下さると嬉しいです。文字列入れ替えをしたせいでそのようになつてしましました。

一応は確認したのですが、見逃し等ありましたらよろしくお願ひします。

7月3日の更新でした。癖で6月にしてしまったうになる管理人

7／8（金）
の更新。

そつして、威圧に耐えられなかつたのか、それとも華影の言葉に納得したのかは分からないが、光影は静かに去つた。

たが私は固まつたまゝ、未だその場を動けずにいる。
驚いた。その一瞬に死せる。

話さないはずの華影が喋つた。

それよりもその声に私は驚くしかなかつた。

だつてあの声は

「 マルーシャ？」

信じられる訳無かつた。

だつて彼女のいつもの雰囲氣とは、あまつとも掛け離れ過ぎていたから。

何も答える事のない彼女に、私は悲しくなる。
どうして、と。

それはその事を話してくれなかつた事に対してなのか、華影に屬している事なのか、それとも王宮の侍女を辞めてしまった事なのか、私には分からなかつた。

気が付けば走り出していた。
彼女の手を掴んで。

彼女は抵抗しようと思えば、きっと私なんかをものともせず振り払う事は簡単だらう。

たがそうじないのは、甘んじて受けている他ない。
ほか

走つて走つて走つて。

手からは彼女の戸惑いが感じられる。

握り返す力は控え目で、どうしていいのか分からぬような思いが
感じ取れたから。

漸く屋敷に付けば、私は一気に2階まで駆け上がる。
勿論、手は一方的に繋いだま。

必然的に彼女も階段を駆け上がる嵌めになるわけで。

屋敷内にいた物は胡乱氣にそれらを見送るのだった。
（つらうき）

バタン

扉を、なんの淑やかさもない開け方をして、私は部屋に飛び込んだ。

「ネイラーーー！」

案の定、その場にはネイラーが執務机には向かわず、ソファーに腰掛け覗いでいる姿があった。

彼女は、私の呼びかけに方眉を上げこちらを見る。

「私は言わないわよ。」

相変わらず何の脈絡のないままそういう言われれば、眉をしかめるしか

ない。

「……彼女は、…マリー・シャ・グラフィッシュですか？」

「…………。」

その無言は肯定を表すか、否か。
答えはそんなの分かりきっている。

なぜなら、ネイラーは答えない、と初めから断言していたのだから。

「……なら、華影の影に喋る事を許可して下せ……」

きっと私は自分勝手な事を言っている。と、分かっていても、そう言わざにはいられなかつた。

依然繋いだままの手は相変わらず冷たいまま。

彼女と最後に笑い合つたのはいつだつただろう。

++++++

仕事の合間の、ほんのひと時の休憩時間。

まだ仕事の片付かない私を手伝いに、彼女は洗濯場まで来てくれた。干していた洗濯物を半分私の手から受けとった彼女の手が、あまりにも冷たかったから、私は言った。

「マルーシャはやつぱり心が温かいんだね。」

「……えつー？」

触れた瞬間に、洗濯物を持つて手を引っ込めてしまった彼女を見ても、私は尚も言つ。

「あのね、町で良く聞くの。手の冷たい人は心の温かい人の証拠だつて。私は残念ながら心が冷たいみたいで、手が温かいから印象に残つてたのよ。」

笑いながらそう言えれば、マルーシャは強張らせていた表情を少し解いた。

「……そんな」と、初めて聞いたわ。」

自身の手を見つめながらそう言つ彼女は、何か思う所が合つたのだろう。

「けどね、なんか嬉しく感じちゃうわよね。」

「嬉しい？」

「そりなの。だって私達って何でも見た通り、触れたりして感じた通りに受け取るでしょう。私なんか、外見から勝手に性格まで予想付けらるのよ。そりなるとね、その枠の中に入つていないと何かく感じてしまつて嫌だつたな。だから、感じ取つたままじやないこの話を聞いた時嬉しかつたの。」

今まで思つて いた本音。

いくら社交的な場面で顔を見せずとも、フローランス家であることには変わりがなく。どうしても決められた枠に入らなければいけないような疾走感に駆られる。

焦れば焦るだけ遠くなるそれは、私にとつて重いプレッシャーのような存在。

正直、街の市場でこの話を聞いた時は、私は見事に食いついた！
…と思つ。

父の娘だから聰明で、母の娘だから慈愛に満ちていて、兄の妹だから秀英だと。

そう言われる度に、そう在らなくてはいけないようじて感じて苦しむ事だけ。

だから本当に、あの言葉を聞いた時はうれしかつた。
例え心が冷たいと言われても、温かいと言われて期待されるよりも
断然良い。

「ありがとう。」

「？」

「温かいくつて言つてくれて、ありがとう。」

今でもその時のマルーシャの顔は忘れられない。

++++++

そう、あの時の笑顔と比べてしまつから。
だから悲しく感じるんだ。

影となつたのは最近ではないだろう。
だからと言つて、表情が固まるくらい無表情な彼女は見ていて嫌だ。

「私は別に、喋る事を禁じた覚えはないわ。喋る喋らないは個人の勝手。義務付けるのは趣味じゃないもの。」

「え？」

思いもしない事を言われた。

当然、喋る事を禁じて居るのだと想っていたかい。

「喋らないのは自身の意志によるものよ。…………私は別にどうちだつていいけどね。」

ネイラーから視線を外し、マリー・シャを見ればやはつ眼は合わしてくれない。

「やうなの？」

問い合わせても返つてくる返事はなく、それはもはや肯定しているも同然だ。

私はそつ、としかと呟く事が出来ずに部屋から退室したのだった。

宛がわれた部屋に帰れば、何も無かつたはずの窓際には一輪挿しがあつた。

部屋を出た時には無かつたはず。

興味を引かれて近づいて良く見れば一輪の薔薇。

だが、普通の薔薇ではない事は当の昔に教わった。

これは影花。

影の花となつた花。

この国で存在するのは花影の側だけだ。
そして花影はこの花を扱う事を許された存在。

「……見守つて来たのね」

この花は。

長い歴史を、そして人々を。

時代が変われば人々の生き方も違う。

争いは幾度となく存在し、消える事は無かつた。

その争いを自分の信じる道へと導くために花影は動いた

人々のため、
未来のため。

祈ることだけでは嫌だと行動に移した人達。

その人達は、何を思つていたのだろうか。

さつとマルーシャも何かを思つて入つたのだろう。

だったら私はあの時、なんて言葉を投げかけてしまったのか……。

かけるべきはあんな言葉ではなかつた。

「酷い」とさつちやつたわ 」

マルーシャにも、
グレファーにも。

改めて思つ。

なんて自分勝手なんだろ、と。

自分の理屈、自分の理念。

いろいろな考えがあつてこそ人間だと思つただけれど、やっぱり感情に左右されてばかりだ。

さて、どうしたものか……。

頭を悩ませ、考える。

あれからグレファーは帰つてはきてるなりしが、顔を見るにとはなく。

マルーシャはと鹽つて、何処かに引っ込んだらしき。

時々思ひ。

ついていないな、と。

一度に一人の人と拗れてしまつなんて、と。

今更悩んでもどうしようもないのだけれど、今はどう改善すべきかで頭を悩ませる。

どうやつてなんぞいいのだらう。

「おはよう、モニカ。話がしたいんだけど、少し良い?」

「あ、うん。……って、えつー?」

掛けられた言葉に返事をしてから気付いた。

いつの間に入つて來ていたのかは分からぬが、話かけて來たのはグレファーだ。

「二つの間に……。」

全く気配など無かつたではないか、と言えば気配を消してきたのだといけしゃあしゃあと答えられる。

「だつてそうでもしないと逃げられると思つたんだもの。」

「は？」

ものすゞく心外だ。

例え避けられる事はあつても、こちらが避ける事はあまりない。

「だつてあの日、走つて逃げちゃうんだもの。言いたい事も言えないわ。それにあれば言い逃げよ。反則だわ。」

「意外にもすげすげ言つてくれるわね。」

「当たり前でしょ。モニカに限つては、思つてゐることをハッキリと言わないと云わらない事が分かつたわ。」

「それじゃあまるで、私が鈍感のよつな物言いだわ。」

「その通りじゃない。」

段々と喧嘩に勃発してきてくるよつな炎がするのは決して炎のせいではないはずだ。

「だつて、あれの時はつーー。」

「あの時は?」

「……。」

とつねに言つたやうになつた言葉を飲み込むも、何かを言つとじた事は明確で、追及されることは免れない。

でも、言える訳がなかつた。

“あの時、魔法具を見つめるレフラーの顔はとても哀しそうで、瞳

には陰を孕んでいた”だなんて。

そこに憎しみの感情を閉じ込めるべからず、どうして口にしなかつたのか、と。

どうして話してくれなかつたのか、と。

これはマルーシャに対して持つた感情と同等の物。

さつと私は悔しいんだ。

なにも出来ない事よりも、気付いてあげられなかつた自分に対する怒りや勢いどり。

「……何に対しても思つたの？」

静かな問い掛け。

「多分、私は貴女やいろんな人の苦痛に堪える姿や表情を見たくないんだと思つ。だからあの時のレファーを見て堪えられなかつた。」

歪む面差し（後書き）

なんだかモニカが暴走気味。
お、おちついて。

7月8日（金）の更新でした。

7／15（金）
の更新

尚も私は言い募る。

「ああいう感情は、誰もが持っているものだわ。だけど、負の感情は他人やその人本人に悪影響を及ぼすものよ。持つな、とは言わないわ。だけどそれを一人で抱えるのはやめて。」

私は改めて自分が口不調法な事を思い知る。
結局会話の主旨が上手く言えない。

「あはは、」

「な、何よ。」

突然こちらを向いて笑つてくるものなので、つい焦つた。

けれどもグレフラーはとても楽しそうに笑う。

「あは、だつてねえ。……でも、誰もがそんな考えを有しているわけではないのよ。それをモニカは分かつてる?」

笑っていた時とは一見、ガラリと雰囲気は打って変わり、何とも言えない顔をしたグレファー。

「それは、この世界に生まれた時点で理解しているつもりよ。」

「そ、う。ならいいけど。……それから」

瞳に現れるのは悲しみ。
顔に滲み出るのな悔しさ。

その動きは何処か怠慢で。

彼女はゆっくりと降下して、私に近づいて来た。

そしていつもの通り肩に乗る。

「めんなさい。

声にならない声が聞こえた気がした。

(眠れない……)

「ゴロソと寝返りを幾度となく打つた。

それでも眠気が訪れる事はなく、むしろますます田が冴えるばかり。

いつもこの時はいつもより感覚が研ぎ澄まされていて、よく気配を探ると、何やら不思議な感覚が騒がしい事に気づいた。

(何事かしら?)

気になつて仕方ないので、そつとベッドを抜け出す。

まず先にネイラーの部屋に明かりがまだ灯つてゐる事に気付き、やつと近づく。

「 もひやる…、潮時…、……かしら?」

あまり良くは聞こえないが、ネイラーの声だった。

(潮時?…なにが…、…。)

ガチャ

そのまま一人考え耽つてしまつていたらしい。

私が気付いた時にはすでに遅く、部屋のドアが開く所だった。

隠れようと心みるも、そんな努力など虚しく中から人が現れた。

「立ち聞きするくらいなら、始めから中に顔を出しなさい。」

呆れた風にそんな事を言つのは、勿論ネイラーだ。

一方、私はと言つと。

ばれた事を恥ずかしいと思つも、やはり気配を消していくてもネイラーには分かるんだと納得。

促されて室内に足を踏み入れた私は、思わぬものを田にさむはめになつた。

「…………。」

「へどうしたの。」

驚きのあまり声も出ない私。

そんな私に話しかけるネイラーの言葉すら頭には入つて来ない。

数秒の沈黙を守つた私は、意を決してその真意を確かめるべく言葉を発した。

「……ネイラー、」この藁人形はナニ?」

そう、藁人形。

まだ普通の藁人形なら良かつた。いや、良くはないが……。

だが、今私の目の前に有るソレは、『ト寧にもフードを被つた上、何体もある。

ざつと両手では足りるほどだが、等身大ほどの大きさの藁人形が何体もあつてはますます異様な光景だ。

極めつけは、その全ての格好が違つていて、言つ所。

リボンを付けているのも有れば、眼鏡を掛けているのまである。

(ちょ、ちょびヒゲ……)

フードから覗く顔を見てから後悔したのは言つまでもない。

その異様な光景に絶句している私は更に驚く事となつた。

なんとその藁人形、動いたのだ。

まるで人間のよう。

「ね、ネイラー……。」

一步、また一步と近付いてくるそれに焦って、私はネイラーに助けを求める。

だが振り返った先のネイラーは緩く笑みを浮かべたままこう言った。

「じゃあ、あなた達の目的は達成したでしょ？満足したなら今まで以上に頑張つてもいいわよ。」

「……御意。デハ、我ラハ行ク。」

機械的な声が何とも言えない。

怖くはないが、その異質な存在に得体の知れ無さが私を警戒させるには十分だった。

私の前に出たネイラーの裾をクイックと引けば、彼女は大丈夫だと言う。

そして嵐は去つた。

静寂の満ちる室内。

外からは何の物音もしない。

当然と言えば当然だるう。

今は深夜だ。

今だに、田にしたが非現実的すぎて頭がフリーズしている。

(藁人形が、…服着て、立つて、動いて、喋つて…、えつ?)

思わず頭を抱えてしまいそうになる。

「ほら、後の事はあの子達に任せて。私達は傍観に徹しましょうか。

」

(相変わらず、脈絡の無さが何とも……)

そう思わずにはこりれないが、気になる単語を聞いた気がする。

「あの子達？」

聞き捨てならない一言だ。

まるで可愛この子供に云つよつなそれに思わず食つべ。

「やうよ。まだ会つた事無かったのね。あの子達は私の子よ。」

「うえつーー？」

どうこう事だと詰め寄れば、少し語弊は含むけど、と陽気な返事。

「藁人形が子供的な存在つて……。」

つべづべ、私を基準にして考へると、彼女は決定的に何かが違うよ
うだと改めて認識せざるをえない。

しかし、よく考へれば藁人形に氣を取られて、ネイラーの言つ

た“傍観に徹する”といつ宣言を聞き逃していた事に私は気付いたのだ。

だが、尋ねはしなかつた。

尋ねた所で、思いどおりの返答が合つた試しはなく。むしろ何の脈絡もない言葉が返つて来るか、答えてくれないかのどちらかだ。

彼女の言葉は、ある程度時が経てば見えてくるものばかり。
意味を知りたくば時を待つ必要があるのでした。

あれから3日目

「変化なし。」

ネイラーは傍観だとか言つてはいたが、第一傍観するよつたモノも無い。

いつも通りの町並みで、これと言つた騒ぎもなく、この華影の拠点も至つて平和。

何もないぢやない。そう思つてゐる矢先だつた。

「王宮から煙りが！！」

誰かがそう叫んだ。

街の活氣が揺らぎ、至る所で悲鳴が上がる。

今まで歩いていた人々が立ち止まり王宮を振り仰ぐ。

だれもがその光景に釘付けだつた。

短期間宮仕えしていた私には分かる。あれは焼却炉の辺りだ。
赤い髪の少年と出会つた場所。

その周辺には林があつたはず。

当然そんな所に火の手が回れば大事だ。

ただ救いはこの季節は湿氣が多い、と言つこと。
乾燥している冬の季節より、幾分かはましだろう。

「大丈夫、よね……。」

兄は城には居るが、まずこの火事に巻き込まれたとは考えにくい。
それに、兄の管轄ではないはずなので安心して大丈夫だろう。

出会つた人々面々を思い返してみるが、巻き込まれる心配はないだ
ろうと決めつけた時だった。

一人だけ居た。

正確に、何処に居るのかは分からぬが。王宮の何処かに居るであ
らう彼女

「　　ヴィオラつ！　！」

私はそう叫ぶと共に走り出していた。

向かうは玉箇。

ヴィオラの元

傍観の行く末（後書き）

句切の良いところからで一日更新。

ネイラーの個性がチラリと垣間見えています。

等身大の藁人形……。

自分で執筆しつつ、チョビひげのある藁人形に少々ドン引きしました。

そして、お気に入り登録、小説評価（ポイントを入れて下さった方）して下さった方、ありがとうございました。

7月15日の更新でした。

8 / 27

の更新です。

はア、はア

はア

心臓が早鐘を打つように拍動し、息は切れ切れ。

早く進まなきやと気持ちばかりが焦つても、身体は思うようには付いて行かない。

こんなことなら田頃からもつと運動しどくんだった。などと考える自分が少し情けなかつた。

「 あと、……少し、つ……」

少しうねつている前髪が汗で張り付く。邪魔なそれを手の甲で拭えば、また新たな汗が流れ落ちる。身体は暑いのに流れ落ちるそれは少し冷たくて、まるで氷解が流れ落ちるかのようで、背筋が凍る感覚に陥る。

慌てて頭をふるも、そのなんとも言えない感覚に苛まれればなかなか頭を離れない。

よつやくたゞり着いた離宮の奥まつた門。

「あ、の…」

「あれ？ あんたは」

「と、もだち… がまだ、中に、いるんです。」

すらりと口をついて出た言葉。この門は余り人通りはなく、ここを使用する者はごくわずか。
入れる望みがあるとしたらここだけだった。

「そうか、今日は非番だつたんだな。だけど中は危険だぞ。」

二人の内もう一人が言った。案の定、私がまだ辞めたことを知らぬいようだった。

「それでもいいんです。お願ひです中に入れて下さい！」

二人で顔を見合させて悩むそぶりは見せたものの、結局は“危険な所には近付かないように”といい聞かせてから中に入れてくれた。

「ヴィオ、ラ……ビー?」

そういえば王宮に入つてから彼女を見かけた事もなければ、話しこも聞かない。てっきり私は王宮で彼女が過ごしているのだと思つていたのだが。

しかしハーレイと恋仲なのにいないと言つのはどういふことだらう。

結局、門番一人の言い付けは守らず火の元に来てしまつたが、見渡す限り辺りは野次馬と消化活動の隊員だけだ。

だけど人混みから見えるその奥、炎があがつている辺りにたむろす妖精の様子がおかしい。やけに興奮しているというか、例えるならば、猫がマタタビを嗅いだ時のあれだ。

「どうしてこんな事になつてゐるの。」

王宮には国守りが居るはずだし、レクイエムもビーの街や宗教団体よりも揃つてゐる。なのに何故こんな事態が起つたのか。レクイエムはレクイエムでもその人達は寄り選りの精鋭だ。いくら国守り

が多忙で手がはなせない事があろうとも、駆け付ける事ができるはず。

私が街から走つてくる間にも大分時間はあった。その間に来れなかつたということは、何か不測の事態でも起こつてゐるとしか考えられない。

「だれかっ！－中に私の子供がいるの－助けてえええ！」

隊員に押さえ付けられながらも、必死に炎の上がるそこに手を伸ばそうとして足搔いている。きっと下働きの人だ。自身の子供を連れてくる人は少なくはなく、むしろ多いくらいだ。

自分の子を助けてと求める彼女を見て、私は心臓をわしづかみにされた気分になる。自分は何をやつてゐるんだ、と。救うべき命がそこにあるなら、何故救わないのかと。

「叔母さん。安心して、私が助けるから。」

気が付いた時には走り出していて、彼女とすれ違いざまそう言つた。背後で悲鳴が上がり、隊員の人人が何か叫ぶ。だけど今の私にはそれは全く耳にはいらなかつた。

ただあつたのは目の前の成し遂げるべき事だけ。

ただ、助けなきや、という思いが私を突き動かした。
そこには強い意志があつた。

何も考えずに走り出した私はなんの準備もなく炎に飛び込んだ。もはや自殺行為だとも周りは叫ぶだけど炎に身体が焼かれるることはなかつた。

むしろ炎はアーチを作るかのように避けてゆく。そして熱風に煽られて髪がはためいているのかと思ひきや、風はあるが熱くはない。

(もしかしてこの炎、幻?)

なら消化活動の隊員がいくら火を消そうと試みても火が消えないのも説明できる。だがそれでは何故炎が私を避けるように動いたのか分からぬ。

それに今焼けているのは焼却炉近くの小屋。作りは木で、ぱちぱちと木のはせる音がする。リアルに現実としか思えなくて、私は疑問を持つ。

とそんな時だつた。

小さく咳き込む音と、荒い息遣いが聞こえたのは。

「セレニーヌのー?」

「……だ、れ?」

案の定、聞こえてきた声は幼い男の子の声。
しかし、誰か?と言つ質問に何と答えていいのか分からなくて苦笑
するしかない。

よつやく煙で見えなかつたその子を見つけ出すと、次はその姿に驚
く。そして慌てて駆け寄つた。

「大丈夫!! あなた、これ……」

「?……おねえ、さんこそ、だいじょ、ぶ?」

「え、うん。私はなんとか……。」

(こんなの聞いてない。)

私だけ火が当たりもかすりもしないのに、男の子は足に火傷を負い。
そしてその下半身部に辺る胴の辺りに物が倒れてきており、床に押
し倒されていた。

そんな状態に置かれているのに彼は私の心配をし、されるなんて思
つてもみなかつた私は戸惑つた。

しかし火の手はすぐ側まで迫つて来ており、下手をすれば男の子の
上に倒れている棚にまで火が移りかねない。

「少し痛いかもしけないけど、我慢できる?」

コクリとわずかにだけど頷くのを確認した後、私は棚を退かすために膝を着いて持ち上げようとする。

幸い扉はガラスで出来た物ではなかつたし、中身も割れ物ではなかつたので安心したが、意外に思い。

「う、重いわねえ。」

下から見上げてくる彼の心配そうな表情を見ると、そんなことも言つてられない。安心させるように軽く笑うとまた作業に取り掛かる。棚の端の方を横にずらし、彼の身体に載つていてる部分を浮かす。

「どういへ出られそう？」

「なん、とか。」

脚はやはり痛むのか、腕力で身体を引っ張り出す。

ようやく抜け出せれた男の子の息は荒い。煙を吸い過ぎたのだろう。そして辺りを再確認すれば大分火の手がまわり、抜け出せたとしても無傷では無理そうだ。

それに彼は怪我を負つていて立つて歩けたとしても、それほど早いペースは望めなさそうだ。

だがやるしかない。

ぐっと力を入れ立ち上がって下を向けば、男の子の瞳とぶつかった。そして燃え盛る炎を見て一つのアイデアを思い付いた。

「ねえ、少し準備に時間が掛かっちゃうかもしないけど、二人とも無傷で脱出する方法を思い付いたわ。私を信じてくれる?」

王富奥深くの一室。

そこにようやく入つて来た情報。

それを知らされたヴィオラは情報を持つてきた者に激昂した。

「何故もつと早くに知らせなかつたのですか。貴方はそんなにも自分のプライドの方がお大事で?人の命よりも?ならそんなプライド捨ててしまいたさい。ついでに地位も権力も無くして差し上げますわ。」

「し、しかし私は……」

「……上に従つただけ、とおっしゃりたいのですか。」

「そ、そなんです……私はただ言われた通りに動いただけで

「

「だからそんな変な意地もプライド全て捨てなさいと言つたのですわよ。」

いつになく険しい表情のヴィオラはその瞳で十分に人を射殺せそうだ。

そして震え上がる男。そしてまざまざと見せ付けられる実力の差。

今まで自分が馬鹿にしてきた存在がどれほどのものか、今さら思い知つたのだ。

「いいでしょ。」こう言つ非常事態の時だけわたくしを頼ろうとするあなたたちに、今日だけ力を貸して差し上げますわ。ただし……

…条件があります。」

奥の部屋だろうか、建物が崩れる音がした。恐らく、もう残り時間はわずか。急がなくてはならない。

視線をさ迷わせ、辺りを見る男の子。きっと先程の音で不安になつ

たのだね。

あれから、私を信じると言つてくれた男の子に私は安心し、作業を開始したのだった。

この迫り来る炎から背を向け、今にでも逃げ出したいであつて、私の目を見てしまふと頷いてくれた彼に勇気をもらつた。力を、使う勇気を。

だから今度は私が助けたいと思うのだ。

「大丈夫、もう少しだから。」

だから我慢して、と不安に晒されているであつて彼に話し掛ける。それにバツとこちらを振り向いた彼の瞳は揺れていた。

私は額を流れる汗に気を取られないように意識を手元に集中する。

「魔法……陣？お姉さんレクイエムなの？だけどこの陣、少し違つ……。」

「……やつ、ね。」

内心びっくりだ。こんな小さな子が魔法陣の形式を覚えているなんて思わなかつた。

レクイエムと違うのは陣の縁にある小文字のスペルの違いだけ。この非常事態、そんな所まで観察するそ田敏さに驚きだ。

「正しくは魔法陣ではないわ。自己流だけど、即席よ。」

自己流！？だと言つ事に田をひんむく彼に私は目線だけずらしてクスリと笑う。

まあ確かに、これが普通の人の反応だろう。

「だ、だつて魔法陣は　　」

「　　定められた形式でしか発動しない、でしょ？」

知つてているわ、と苦笑するも、彼は信じられないと言つ風に私を見る。

普通は描いた魔法陣に、術者が力を送り続ける事で効果を發揮する。そして力の注入を止めれば効果は失う。それが一般常識だ。しかし私が使つてているものは違う。描いている陣自体に力を送り込んでおき、貯めたそれを使うのだ。なので注入をするのは初めだけ。後は注入が無くとも力を發揮する。

「多分私の他に知つてている人はいないわ。第一他の人に使える保証はできないの。」

「そんなことつて……。」

「残念ながらね、一人は試したの。術者の腕もたしか、力もある。だけど出来なかつた。……単に条件が揃わなかつただけかもしけないけれどね。」

頼りと信頼（後書き）

久方ぶりの更新でした。
長い間をあけてすみません。

8月27日の更新でした。

一度目痛感（前書き）

9/17 の更新です。

一度目痛感

「じゃあ、お姉さんはレクイエムじゃないんだね、国守りなの？」

「まあ……どれでもないわ。」

この子は私が今作業中のを忘れてないか、と疑問をもつが、きっと忘れているだろ？と判断する。

「どれでもない？そんなばかな！だつてお姉さん」

「…………だまつて。『汝の名はモニカ。汝の名はモニカ。聞こえし我が守り手よ、今ここに集まつたまえ。』」

魔法陣が一気に膨張するかのように広がり、瞬くような光を発する。その時私はしっかりと男の子の手を握る。もつ一人にさせないようだ。

元から集まっていた野次馬が拍車を掛けたように増えたのは、一人の少女が炎の中に飛び込んでからだ。

周りの空気は不安に揺れ、もう助からないだろうと人々に言う者までいる始末。その言葉を耳にした一人が叫ぶ。

それは、中に息子がまだいるんだと泣いていた女性。まだ頬は涙に濡れ、眉は下がっていたが、だが確かに瞳は諦めていないのだと訴える。

「あんたは信じられないのかい。信じて待つてもいいやつがこんな所で嬢ちゃんを待つんじゃないよ！ そんなただの野次馬根性丸出しのあんたがこんな所にいたってこっちはちつとも嬉しくないね！ 今すぐここを出ておいき！ 他にも言つたやつもだよ！」

なまじりは釣り上がり瞳はそこ知れぬ鋭さを感じさせる。

ただの泣いているだけの女性かと思っていた周りの者は驚く。そしてそれに気圧された幾人かは悔しそうに早足に立ち去る。

「そうね、ほかにもいたのじゃなくて？ 私は他にも言つた者を見掛けましたわ。」

ねえ、と言つていた者数人に視線を向ける新たな登場人物。灰色の髪にシンプルだが上品な装いをしている少女。それを目にした隊員は目を見開く。

「「「ヴィオラ様!?」」」

幸いなのか不運なのか、ヴィオラに言われ逃げるよつに立ち去つた者はその名を聞くことはなかつた。
そして名を呼ばれても肯定も否定もしなかつた。だが中には沈黙を肯定と受け取る者もいた。

「中には誰がいるの。」

「私の息子と、助けに入つた少女が……。」

「そり……。」

一度も炎から田を離すことなく一人はやり取りを交わす。

「隊員は救急道具を手配してあるわね。」

「はいーーに用意しております。」

それを聞いたヴィオラは田を閉じる。次に開いた時の瞳は灰色から赤になつていた。

その事に彼女の後ろにいた者は気づかない。だが、それより前に出ていた隊員は気付きギョッと田を見開くも、状況を理解して詰めていた息を吐き出す。

「久方ぶりにネイン様を見たぞ。」

「前に見たのはいつだつたか。」

「2ヶ月前じゃね？」

「ばか！半年前だ。」

ヒソヒソと話す彼らの声は丸聞こえ。

しかしそれを敢えて聞こえないふりで通す彼女、ネインもどちらかと言えば生まれ持つた性分だ。付け加えるならば自分からはめつたと話し掛けない。興味を示すものがなければ基本無視だ。そして気まぐれ。

悪く言えば自分勝手、良く言えば物静か、と言つ所。

そんな彼女が誰に言つでも無く、目を開いて言つた。

「……………来た。」

その瞳が据えられるのは炎の中。だが確かに炎の中の何かを捕らえていた。見えるはずのない何かを。

一瞬、全て者には時間が緩やかに止まつたかのよに感じた。高く飛んだ物が落下する前に空中で停滞し、落ちてくるあの間のよに。それに動搖しなかつたのはネインただ一人。

そして時はまた時間を刻み始める。

ただ、出来事の前と違つたのは、彼女の腕に一人の人間が抱えられていたことだつた。

お姉さんはいつ起きる？

ん、そうですわね……あなたが幸せそうに笑つていれば目を覚しますわ。

微かに聞こえるその声を聞けば、そんな事あるか！？と詫び様な内容が語られていた。

誰だか知らないが、その“目の覚まさないお姉さん”は責任重大だな、と笑う。

しかし両者とも聞き覚えのある声で、一人は小さい男の子の様な声。もう一人は少女の声だ。

それも独特の。

ぐっと力を入れ、あまり感覚の感じられない自分の身体を起きあがらす。

田の前には案の定見知った顔があつた。

「な、な、なんで私にそんなに責任重大な事押し付けるの…」

「あら、田を覚ましたわね。 ほら、あなたのおかげでモニカが田を覚ましたわ。」

「ほんとだ。王女さまも凄いね。 なんで分かつたの？」

なんて無邪氣なんだろ？ 逆に突っ込む気も失せた。 しかし男の子はそんな様子に気付いた様子もなく真に受けている。 しかし何かを聞き逃した感じがする。スルーしてしまつてはいけない何かを……。

「…………はつえつ！ 王女様！！」

「あら、今せらだわ。」

「ちよつとまつて……今さらも何も、私は今初めて聞いたわ。」

「だつて言つてなかつたんですもの。」

「いや、やうは言こましょつよ……。」

「モニカを信じて待っていたんですね。」「信じる以前の問題だと思うのだけれど……。」

もはや頭をもたげてしまった

「それじゃあヴィオラはハーレイと

「兄妹になりますわ。年子になりますの。」

「なんだ……。そうだったの。」

今まで勘違いをしていた自分が恥ずかしい。ベルシアの近くの屋敷で侍女に言われた言葉をようやく飲み込む事ができた。仲が良い、と言つのは決して恋人同士でと言つ訳ではなく、兄妹としてだつたのだろう。

それに翌々考えれば髪の色も瞳の色も全く同じで、似通つてゐる。どうして今まで気づかなかつたのが不思議なくらいだ。

「お姉さん、もう大丈夫?」

「……あなた……。」

「うん。助けてくれてありがとう、お姉さん。」

男子に言われる“お姉さん”と言ひ言葉が何だかむず痒い。

兄妹は一人つきりだし、私より下はないのでその呼び名は新鮮だ。

「ねえ、その……お姉さんっていうの恥ずかしいから名前で呼ばない？」

「名前で?」

「せうよ。私の名前はモニカ。改めまして宣しくね。」

「うん……僕の名前はアリス。よろしく。」

「アリス君?」

男子でアリスと言ひ名は初めて聞いた。けれど意外に似合ひものだとも思う。

彼の目はクルリと大きく、下手をすれば私よりも大きいかもしない。

そして鼻筋は整つており、綺麗な顔立ちをしている。

可愛い顔ね、なんて言えば気を損ねてしまうかもしれない。

危うくそれを言わない内に口を手で押さえる。一人にはううん気な視線を向けられたが、笑つてごまかした。

「それよりここは何処なの?見た感じ、何処かのお屋敷つて感じがするけど……。」

「あ、」僕の家だよ。って言つてもお母さんの家の方なんだ。」

「お母さんか？」

「今はここにはいないよ。」

そう言えば叔母さんは助けると啖呵を切るも、ろくに助けられない。ああ言つた手前、顔が合わせらるのも事実。

「お母さんとお父さんは一緒に住んでいないんだ。だからここはお母さんがいないんだ。」

「それってやつぱつ、…………。」

「仲が悪いって訳でもないんだ。むしろ仲が良いくらい。だけど一緒に住むことができない。」

仲が悪いの?と言つ言葉を寸前で飲み込むも言いたい事は伝わったらしい。むしろ私が気を使わせてしまったようだ。伏し目がちに事の経緯を話すアリスには色々と思つ所があるのであるのだろう。眉間に僅かながらシワが寄つている。

それを深く尋ねていいのか分からなくて、私は口もつた。

「お姉さんもしかして気にしている?」

「え、いやつ。そんなことは……。」

「大丈夫だよ。何でも聞いてくれても。」

「命の恩人だからつ」 そう言って笑う彼が、とても私の目には強く映る。

「す」いのね、アリス君。」

その言葉に「どうして？」と首を傾げる彼に「とても強いから。」と並んで少しほにみ、小さく歯を見せながら笑う。

「でもあの炎から抜け出した時にネイン姉さんが居たことにはビックリしたけど。」

「お姉さん？ がいるの？」

「あれ、知らない？ そこに居るでしょ？」

そう言って指差す先はヴィオラ。
当の本人はどこ吹く風だ。

「……ヴィオラが。」

「やつだよ。」

「じゃあアリス君は……」

「御察つしの通り、立派じゃないけど第一王子ですー。」

本当に、人生はそう上手くはいかないのだと思い知らされた。

そしてその後これよりさらにそれを身を以つて実感する事になる
など思つてもみなかつた。

一度目痛感（後書き）

前ね投稿から大分経ちました。

掲載遅れて大変申し訳ありません。次回は春風の更新です。

9月17日の更新でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5367p/>

精霊達のレクイエム（鎮魂歌）

2011年9月18日12時27分発行